
同志諸君に告げる。これが理不尽だ！

ネオ・代表05-1

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同志諸君に告げる。これが理不尽だ！

【作者名】

ネオ・代表05-1

【あらすじ】

冒険だ！軍備だ！そんな好き勝手にやっていく内、気づかぬ内に畏怖される存在になってしまいう話。▼*原作開始時間より二十年前からの始まり。

*「サイト管理者」「代表05-1」から「ネオ・代表05-1」に改名。※重要※『ハーメルン様』からのお引越し小説です。投稿については運営様に事情を話し、活動——投稿許可を頂いております。 ※重要※ピクシブ様やアルカディア様でも投稿しております

が、基本的にはピクシブ様とのマルチ投稿です。優先投稿順は①暁様、②ピクシブ様、③アルカディア様、となります。

*2023年の3月、ハーメルン様で投稿していた作品です。

『ミッドガルド』クロイントルーパー及びバトル・ドロイド紹介

「クロイン軍団」

「脅威」に対抗する為に『セブンス・デイビターズ』によって設立された軍団である。

「補佐官」の遺伝子を元に創られたクロイン・トルーパーは厳しいトレーニング・エクササイズを受けさせられていた。彼女等は訓練の頃に「クロイン候補生」という階級を与えられ、協調性とチームワークを学ぶために複数の分隊に分かれて訓練を行った。クロイン候補生を導くインストラクターは数種類存在し、若いクロインは成人の『クロイン・サージェント』から教育を受け成長したクロイン達は戦闘教官として『ARCTルーパー』、又は軍事教育担当の同志の元で訓練を積む。一部のクロインは、平均的・標準的なトルーパーとは異なる訓練も受けていた。彼女等は『クロイン・コマンドー』やARCTルーパーといったエリート兵士になるため、特殊な訓練を積んだ。

合格となったクロイン兵は様々な任務へ投入される。

* 不思議なことに20歳となってから見た目の変化は殆ど無い。 (MGI14581)

公開されているプロフィール

・ 身長165cm

・ 83 / 57 / 84 (スリーサイズ)

アーマーは白い装甲服となっており、ヘルメットは視界を確保する為のT字型のようなバイザーがある（ヘルメットから見る景色は某帝国よりも見えやすい）。偏光レンズ、パッド、センサーを加え、より軽量で丈夫なアーマー・プレートを採用した。聴覚センサーが取り付けられており、汚染された環境でも呼吸可能な空気を供給する濾過システムが内蔵されている。

高性能な空気フィルター、酸素供給システム、偏光レンズ、会話をより分かりやすくする表示装置が備わっていた。さらにブーツが磁化されており、安定性を確保するための重力場制御装置が組み込まれている。

その他の標準装備としてベルトには予備の弾倉、通信機、携帯食料などが有る。

（フェイズIよりフェイズIIアーマーに変更）

【武装】

・DC-15Aブラスター・カービンを標準装備としている。黒色の銃で重量は約4kg。一つの弾倉に込められた弾（実弾では無い）は300発。射程が短いのが欠点ではあるが小型な為、使いがってが良い。暗視スコープやライト等も取り付けることが可能だ。誤発射防止の為の安全装置がある。相手への攻撃だけで無く、相手を気絶させることが出来るスタンモードが有る。

【階級】

兵卒―白

- 『クローン・サージェント』（軍曹）
- 『クローン・ルテナント』（中尉）
- 『クローン・キャプテン』（大尉）
- 『クローン・コマンダー』（中佐）
- 『クローン・マーシャル・コマンダー』（少将〜中将）
- 『クローン・グラント・マーシャル・コマンダー』（大将）

【兵科】

多様な状況で任務を遂行するため、様々なクローン・トルーパーが追加訓練や特殊訓練を受けていた。多くの異なる環境で発生した際、彼女等は特殊な装備を身に着ける。

↳任務に特化したトルーパー

- ・『アドバンスト・レコン・コマンドー』：通称ARCトルーパー。独自の思考を持ち、高度な訓練を受けたエリート兵士。
- ・『クローン・コマンドー』：エリート兵士として育成された。特殊な訓練と武器を与えられる。
- ・『クローン・スカウト・トルーパー』：軽量型のアーマーを身に着け、偵察任務に特化した兵士。
- ・『クローン・トルーパー・メディック』：衛生兵として活動する兵士。
- ・『クローン・ショック・トルーパー』：要塞基地『ミドガルド』に拠地を置きミドガルドの警備や防衛、要人、要地の護衛に従事する兵士であり『最高指導者』とセブンスデイビタース及び同志（要人）を守ることを専門とする。以外の仕事として刑務官として働

たりする。赤いマーキングが入ったアーマーを装着した。

・『クローン航法士官』：アーマーは身につけず艦船に乗り込み、クルーとしての役割を果たす。服装は黒色の軍服。黒色の帽子。袖の長い黒色の手袋。ベルトホルスターにはDC-17ハンド・ブラスター。艦長は深緑色の士官用軍服。左胸には階級章。ベルトホルスターにはDC-17ハンド・ブラスター。

・『メディカル・オフィサー・クローン』：医療を専門とする。服装は白いナース服（帽子無し）。

・『特殊作戦部隊クローン・トルーパー』：先進的な装備を身につけ、迅速な活動を行う。

＊指揮官クラスには左肩に指揮官であることを示すポールドロンを付けている。

く環境に特化したトルーパーく

・『クローン・コールド・アサルト・トルーパー』：寒冷地での活動に特化した装備を身につける。

・『クローン・マグマ・トルーパー』：火山地帯での活動に特化した装備を身につける。

く兵器に特化したトルーパーく

・『バイカー・アドバンスト・レコン・コマンドー』：通称BARCトルーパー。BARCスピーダー（バイクのようなもの）を乗りこなし、高速移動に適したヘルメットを身につけた。

・『クローン・フレイムトルーパー』：火炎放射器で武装し、熱に耐性がある断熱アーマーやカーマを身につけた兵士。火炎をする際

・E-5ブラスタライフル

概要

クローン軍団が創設された前より、使用されているヒューマノイド型ドロイドである。WSOで登場した異星人の骨格を参考にして製造された。その為、骸骨のようである。見た目と裏腹にどこか人間くさいお茶目でユーモアがあるドロイドである。

執る戦術は数を武器に戦うことが多いがアップグレードにより「個の質」を使った戦術を執れるようになり始めている。柔軟性のある戦術や行動が出来る。赤色のマーキングのB1や青色のマーキングされたB1。前者は戦艦、巡洋艦、施設などに配備される「B1セキュリティ・ドロイドで後者は艦やシャトルなどを操舵するパイロットを担当する。その他にもジェットパックを付けたB1部隊もあれば艦や戦闘機などのメンテナンス専門の部隊も存在する。

そして黄色のマーキングが施されたOOMコマンド・バトル・ドロイドは他のバトル・ドロイドを指揮するコマンドーとして活躍する。

BXシリーズ・ドロイド・コマンドー

全高1・91メートル

武装

・E-5ブラスタライフル

・バイブロブレード

・スタンバトン

概要

高度な戦術と戦場認識力をプログラムされたB1バトル・ドロイドの上位型モデルである。全長1・91メートルで、隠密行動に適した強力な戦士。標準的なB1バトル・ドロイドより頑丈で、動きや反応速度も機敏だった。ドロイド・コマンドーの装甲はブラスタ一の発砲に数発が耐えうるよう設計された。

ドロイディカ

全高1・83m

防御：組み込み式シールド発生装置

武装

・組み込み式ツイン・ブラスター 2門

概要

ヒューマノイド型の構造によってある程度の汎用性を持つ細身で長身のB1バトル・ドロイドとは異なり、デストロイヤー・ドロイドまたはホイール・ドロイドとも呼ばれるドロイディカは、唯一の設計思想、すなわち標的の完全なる殲滅のみを目的に作られたドロイドである。

この赤褐色の武装戦闘マシンは曲線と鋭角を組み合わせた昆虫のような恐ろしい外観をしており、重武装された両腕の先端からは爆発的な破壊力を持つ強力なツイン・ブラスターを猛烈な勢いで連射することができる。さらに、超小型偏向シールド発生装置を内蔵している為、自身をシールドで完全に包み込み、ブラスターによる攻撃を防ぐことも可能である

ドロイディカの3本足による移動は遅くぎこちないが、より高速

な移動を行える形状に変形することによってこの欠点を補っていた。ドロイディカは本体を丸めることによって円盤状に変形し、滑らかな地表上を転がることによって高速な移動が可能となる。

屋外での戦闘の際は電力消費が激しい為、シールドを展開しないことがあるが施設や軍艦の場合は三本脚の先端から艦のエネルギーを無尽蔵に吸収しシールドを常時展開出来る為、軍艦と施設警備の防衛に採用が決定された。

Ｔ１タクティカル・ドロイド（軍事戦略分析及び戦術）

概要

標準的なバトル・ドロイドの上官として銀河系各地の戦場へ赴いた。ヒューマノイド型の体格で胴体と比較して手足が細長く、全長は1・93メートルだった。Ｔシリーズ・ドロイドのボディは青と白、緑と白、赤と白などの2色でペイントされることが多く、目と口の部分が赤や白、黄色などに発光した。このドロイドは様々な点で標準的なバトル・ドロイドよりも優れており、前線から離れたドロイド司令船や要塞化された拠点で戦術を調整する役目を与えられた。優れた知能を有していた為、完全な指揮権を与えられることもあった。しかしそのせいで多くのＴシリーズ・ドロイドが自分たちは他のドロイドよりも優れていると思いつまむようになった。後、同志から褒めて欲しいと強く思ってる。

『ミドガルド』宇宙軍の部署及び編成の紹介



脅威に対抗する為に規模が多くなりつつあるミドガルド宇宙軍には部署が存在するがその内の幾つかを紹介しよう。

『宇宙軍調達局』。：宇宙軍調達局と呼ばれる部署は艦船の調達、生産ラインの確保、新しい技術の開発やテスト等を行い基本的には同志ステラによって監督下に置かれる部門となる。その他、数名の同志が。

『宇宙軍防衛調達局』。：宇宙軍を支える重要な部門である宇宙軍防衛調達局は主に物資の調達などの後方支援に担当し医療品から弾薬に至るまで、前線への補給の為に安全な供給ラインを確保し装備などを備蓄することも任務の一つである。しばしばで輸送船団の警備なども担当している。基本的には同志（私の分身）によって監督下に置かれる部門。

『宇宙軍艦艇管理局』。：名前の通り、管理する部門。基本的には同志テレーゼによって監督下に置かれる部門。



一人の同志が指揮する最小の艦隊単位が、『セクション』。同じセクションでも構成される艦種によっては異なる場合もある。戦艦や巡洋艦、駆逐艦のような主力艦は3〜5隻で1セクション。フ

リゲートやコルベットといった小型艦は7～12隻が集まって1セクションとなる。

此等と一緒にした編成も1セクションと分類され、5隻の主力艦と小型艦7隻の合計12隻のセクションも存在している。此等の艦隊は一人の同志か年長のキャプテンによって指揮される。同じ艦種でも同様。

次に12隻から36隻の艦艇が集まる『戦隊』が構成される。3～4セクションが主力艦をサポートするように配置。お互いの視界やシールド及びエリスフィールドを補完するような陣形で運用され、1個戦隊は二人の同志と准将又は少将によって指揮される。

次に48～72隻の艦艇で構成される『バトルグループ戦闘群』は、3人の同志とクロイン少将又はクロイン中將によって指揮され、強固に守られた敵の重要拠点や、要塞を殲滅出来る戦力となる。

次に100～300隻で構成される『フリート艦隊』は、戦闘群を上回る戦力であり大規模作戦や惑星を制圧出来る戦力となる。4人の同志と艦隊司令官である（指揮能力に特化したクロイン中將）、もしくはセブンス・デイヴィターズ（7人の統治者）の一人によって指揮されるが余程のことは無い限りはセブンス・デイヴィターズによる指揮は無い。

最後に、1000隻～5000隻の艦艇で構成される『アルマダ（無敵艦隊）』という艦隊単位もあるがこれは特定の、又は『対荒らし殲滅』コードがセブンス・デイヴィターズの総意、もしくは

『最高指導者』による発動のみに投入される艦隊である。戦略級の超兵器も艦隊として組み込まれる。指揮するのは最高指導者Ⅱギルド長。副司令官としてセブンス・デイヴィターズの一人とグラント・マーシャルコマンダーが一人。

『ミドガルド』艦艇及び兵器紹介（随時更新）

FG300型多用途フリゲート

全長250m

最高速度1000km

ハイパードライブクラス2,0

武装

- ・カスタム型150mm連射砲塔3基（実弾）

概要

一般的な多用途フリゲートで一般的な連射砲台を3基装備している。装甲はプラスチック装甲。様々な攻撃・防衛任務を遂行可能である。基本構造は単純の為、製造は簡単。派生として装甲、偵察艦がある。資源が集まり主力艦艇に数が出来て来ると本艦は戦闘艦隊から退場となるが探査、輸送船団護衛と支配領域の哨戒任務に就く。

FG300型多用途フリゲート改級

同上

ハイパードライブクラス1,9

武装

- ・カスタム型150mm連射レーザー砲塔3基
- ・近接防衛2基

概要

実弾からレーザーに変更し近接防御2基を追加、装甲は強化プラスチール装甲。
資源が集まり主力艦艇に数が出来て来ると本艦は戦闘艦隊から退場となるが探査、輸送船団護衛と支配領域の哨戒任務に就く。

セレス級空母型駆逐艦

全長580m

最高速度850km

ハイパードライブクラス1・6

中型格納庫

戦闘機保守設備

武装

・120mm連射レーザー砲塔2基

概要

限られたスペースに戦闘機の保守・司令システムを完備しており、戦闘機を10機を搭載出来る。特殊戦闘機搭載艦として、様々な戦闘機を搭載し小規模の各種空中支援任務を遂行可能である。派生として支援型がありコレは戦場時、UAVによる味方艦船の補修が可能である。

AC721スサナー重量級支援駆逐艦

全長560 m

最高速度800 km

ハイパードライブクラス1, 6

武装

・カスタム2連装275 mm砲塔x3 (実弾)

・近接対空防御4基

概要

統合的な艦砲システムと巨大な物資貨物倉庫を備えている。多用途作戦や長距離輸送に適している。派生としてミサイル型、艦載型がある。迷彩は本艦唯一の緑とある件にて本艦は何故か敵対存在と勘違いをされ、迷彩が原因？と思い他の艦艇と同じく白を基調とした迷彩に変更した。艦のフォルムは「やはり、愛が必要だ」の艦と非常に酷似しているとかしていないとか。

AC721スサナイ重量級改型 戦闘特化型駆逐艦

全長560 m

最高速度800 km

ハイパードライブクラス1, 6

防御：発展型シールド発生装置4基

装甲：強化デュラスチール装甲、対ビームコーティング

武装

・カスタム2連装330 mm重レーザー砲塔x6

・近接対空防御x8

- ・ミサイル発射装置2基
- ・艦首魚雷発射管4門
- ・後尾魚雷発射管4門
- ・両舷魚雷発射4門

補助装備

- ・セルラーディフェンダー魚雷艦2隻

概要

貨物倉庫を小型に変更し実弾からレーザーにして330mmに。シールド発生装置が付き近接防御を増設しミサイル、魚雷を装備した戦闘特化型である。補助として船体下部に大砲艦であるセルラー2隻搭載可能であり、カスタマイズも可能でセルラー艦を取り外し内部に格納することが可能にするためのスペースを下部に作った「ハンガーベイ」にニュー級アタックシャトル2機と予備機を収容可能な艦も存在する。

*艦のフォルムは「やはり、愛が必要だ」の艦と非常に酷似しているとかしていないとか。

プロテクト級航宙戦闘艦

全長752m

最高速度750km

ハイパードライブクラス1・0

試作型対消滅機関「エリスドライブ」

統合エネルギー変換システム

防御：発展型シールド発生装置4基、試作型「エリスフィールド」

装甲：強化デュラスチール装甲、対ビームコーティング
武装

- ・ 4連装大型エリスレーザークannon砲塔（490mm）x 9
- ・ 試作型X-X-9重ターボレーザークannon砲塔（330mm）x 2
- ・ 3連装中型エリスレーザークannon砲塔（330mm）x 10
- ・ 近接対空防御レーザークAIWS x 40
- ・ 司令塔近接防御 x 5
- ・ ミサイル発射装置 x 8門
- ・ 艦首魚雷発射管 8門
- ・ 後尾魚雷発射管 8門

補助装備

- ・ ミストラル戦闘攻撃機 30機
- ・ ニュー級アタックシャトル 5機

概要

本艦は「セブンス・デイビタース」七人の統治者が一人『ステラ』主導により設計・建造された艦であり最新技術検証艦として小数が投入された。箱形で正面が三角形の楔のような特徴のあるフォルムをしている。

装甲は厚くなっておりもっとも厚いのは正面である8,000mm。

補助として戦闘機とシャトルが搭載されている為、母艦としての役割もある。

エリスドライブは艦の砲撃、推力、防御の動力源として機能する。大きさは巡洋艦クラスの艦ではあるが戦闘力は戦艦と同等か防御力はソレ以上となる。とある件を堺に本艦は主力戦闘艦の一つとして

採用が決定した。採用決定と伴い冷却装置のアップグレードを計画。

*主砲塔形状は地球連邦防衛軍と似ている？

ブロテクト級航宙戦闘艦Ⅱ型

同上

概要

エリス・ドライブのアップグレードによりバスターレーザー発射後も問題なく戦闘を遂行することが可能になった。

セレスター級航宙戦闘空母

全長760m

最高速度750km

ハイパードライブクラス1・0

機関：エリスドライブ

統合エネルギー変換システム

防御：発展型シールド発生装置5基、エリスファイールド

装甲：強化デュラスチール装甲、対ビームコーティング

武装

- ・3連装大型エリスレーザーキャノン(490mm) x 4
- ・3連装中型エリスレーザーキャノン砲塔(330mm) x 8
- ・ミサイル発射装置16門
- ・近接対空防御レーザーCIWS x 60

- ・司令塔近接防御 x 6
 - ・両舷魚雷発射管 6 門
 - ・艦首魚雷発射管 4 門
 - ・後尾魚雷発射管 4 門
- 艦載機数：300機

概要

本艦はセレス級に変わる艦艇として設計、建造された。艦の形状はプロテクト級をベースにしており、双胴のフォルムが特徴的だ。

経緯としては艦載機数と空母能力として不足したことが挙げられた。これを受けて軍事担当の同志による設計が行われ、試作艦として幾つかは出た中で満足した艦艇がコレである。ミストラル戦闘攻撃機に変わるシールドや短距離ワープ能力等を持つ高性能である新型『Xウィング戦闘機』270機とニュー級アタックシャトル30機が装備、此等はシールドで保護されたハンガー（格納庫）に格納されており出入り口から出撃する。航空管制ブリッジが各ハンガーの活動を監督した。その他に揚陸艦1隻を下部に収容可能である。戦場時、UAVによる味方艦船の補修が可能である。ちなみに決戦兵器でもあるバスターレーザーを標準装備。

*主砲塔形状は地球連邦防衛軍と似ている？

FG300型多用途フリゲートII級

同上

概要

エリスドライブを搭載。

アークワイズ級フリゲート

全長325m

最高速度1000km

ハイパードライブクラス1,2

防御：シールド発生装置2基

武装

・4連装中型レーザー砲塔4基

・ミサイル発射装置2基

・艦首魚雷発射管2門

・後尾魚雷発射管2門

・近接対空防御C I W S 3基

概要

本艦はFG300型に変わるフリゲート主力艦として設計・建造された。装甲はデュラスチール装甲。様々な攻撃・防衛任務を遂行可能である。基本構造は難しくない為、製造は簡単。

*艦の見た目はまんまSW世界のアークテンス級である。

アークワイズ級フリゲート改

同上

機関：エリスドライブ

防御：エリスフィールド

概要

偵察艦が不明艦隊との攻撃を受けた為、戦線に投入され交戦したがレーザ主砲の効果は無かった。その為、エリスドライブへの改装が決定され、現在のアークワイズ級は建造中も含め全て「改」となっている。

*艦の見た目はまんまSW世界の銀河帝国アークテンス級である。

マールトランキリタティス級ミサイルフリゲート

全長255m

最高速度1000km

ハイパードライブクラス1,2

機関：エリスドライブ

防御：発展型シールド発生装置、エリスフィールド

装甲：強化デュラスチール装甲、対ビームコーティング

武装

・3連ロケットランチャーMK1型『エターナルポラリス』x3

・クロス複合砲システムx3

・近接対空防御CIWSx6

概要

クロス複合砲システムとミサイルを搭載した統合型ミサイルフリゲートである。一般多機能ミサイルを持ち付近の飛行目標を要撃が可能である。主に護送、ミサイル、対空任務を担う。

レリアット級戦術魚雷フリゲート

最高速度 800 km

ハイパードライブクラス 1, 2

機関：エリスドライブ

防御：発展型シールド発生装置、エリスフィールド

装甲：強化デュラスチール装甲、対ビームコーティング

武装

・エネルギー魚雷 x 2

・連射パルス砲 x 2

・近接防御 x 4

概要

特殊なエネルギー放出弾頭の魚雷を搭載し、重武装の目標に優れた効果を与えられる。派生としてステルス型がある。

ルビー級フリゲート

全長 298 m

最高速度 960 km

ハイパードライブクラス 1, 2

機関：エリスドライブ

防御：発展形シールド発生装置、エリスフィールド

武装

- ・BR-1480A型480mm x 1
- ・二連装45mm砲 x 3
- ・艦首魚雷発射管2門
- ・後尾魚雷発射管2門
- ・司令塔近接防御 x 1

概要

艦体は480mm重砲を中心に構成されており、主砲の持つ火力は幅広いタイプの艦船に特に中々大型艦船にとっての脅威となる。艦体は強化されているとはいえ、機動力や防御性能は、他のフリゲート艦と比べると低い。派生として、ルビー級改であるイオン砲型が有り、小型艦船のフリゲート艦では初めて搭載した。精密な追跡システムにより、攻撃イオン砲エーテルレーザーで大型艦船に全面的に攻撃が出来る。
*「やはり愛が必要だ」の陣営に存在する「カ」から始まって「ム」で終わる艦艇を一発で撃沈出来る…だがその後の冷却時間が掛かるのは少しデメリット。

AC721スサナー重量級戦闘特化型駆逐艦II型

同上

ハイパードライブクラス1・2

機関：エリスドライブ

防御（追加）：エリスフィールド

概要

同上。

AC721スサナー重量級支援駆逐艦II型

同上

ハイパードライブクラス1・2

機関：エリスドライブ

防御（追加）：エリスフィールド

装甲：デュラスチール装甲、対ビームコーティング

概要

対消滅機関を搭載している為、主砲兵装はエリスレーザー砲となった。

*主砲塔形状は地球連邦防衛軍と似ている？

AC721スサナー重量級ミサイル駆逐艦II型

全長560m

最高速度800km

ハイパードライブクラス1,2

機関：エリスドライブ

防御：発展型シールド発生装置2基、エリスフィールド

装甲：強化デュラスチール装甲、対ビームコーティング

武装

- ・カスタム2連装330mm重エリスレーザー砲塔x4
- ・近接対空防御レーザーCIWSx8
- ・司令塔近接防御x3
- ・SM-280型ミサイルサイロx3
- ・SM-408型対空ミサイルサイロx3
- ・艦首魚雷発射管8門
- ・後尾魚雷発射管8門
- ・両舷魚雷発射12門

概要

第一、第二主砲に代え、垂直ミサイル発射システムを搭載している。様々な対艦攻撃ミサイルを高速に連射可能。強力な火力投射能力を持ち、小く中型艦船を効果的に制圧出来る。一定の領域対空能力を持ち、戦闘機編隊を2〜3編隊まで同時に追跡・攻撃出来る。

*主砲塔形状は地球連邦防衛軍と似ている？

エリスL級駆逐艦

最高速度900km

ハイパードライブクラス1,2

機関：エリスドライブ

防御：発展型シールド発生装置2基、エリスフィールド

装甲：強化デュラスチール装甲、対ビームコーティング

武装

- ・156mm砲塔x5

- ・近接対空防御レーザーCIWS x 3

概要

エリスL級は高速巡航出来るという特徴があり、迅速な対応と機動に用いられる。派生として装甲型がある。

エリスL級駆逐艦II型

同上

武装

- ・230mm特殊口径砲 x 4
- ・アッシュオブエリス300mm重砲 x 1
- ・近接対空防御レーザーCIWS x 5

概要

某作戦時、火力不足に悩まされたエリスL級は原型をそのままにし、156mm砲塔から230mmに換装し、その内の1つは撤廃。中央甲板にはアッシュオブエリス300mm重砲を装備した。これにより、某勢力の量産型であり、重武装、重装甲である520m艦艇を撃沈することが可能となる。

ウイングユサール級ミサイル駆逐艦

最高速度700km

ハイパードライブクラス1, 2

機関：エリスドライブ

防御：発展型シールド発生装置2基、エリスフィールド

装甲：強化デュラスチール装甲、対ビームコーティング

武装

- ・MK2CM-4x280型4連装ミサイルランチャーネストx2
- ・2連装大型艦首艦砲x1
- ・後尾魚雷発射管x4
- ・近接防御x8
- ・近接対空防御レーザーx3

概要

カスタマイズされたストームミサイルシステムを搭載し、様々な艦船目標を迅速に絶え間なくミサイル攻撃を遂行可能。艦首に備えられた2連装砲塔は前方全てを視界に収め、威力は凄まじい。その代わり砲撃後の装填ならび冷却時間が長い。

ツンドラ級戦術駆逐艦

全長610m

最高速度700km

ハイパードライブクラス1・3

機関：エリスドライブ

防御：発展型シールド発生装置2基、エリスフィールド

装甲：強化デュラスチール装甲、対ビームコーティング

武装

- ・フォートレス型12センチ砲x3

- ・近接対空防御レーザークイック x 10
- ・司令塔対空防御 x 2

補助装備

- ・『攻撃型偵察機ARC170スターファイター』10機

概要

専用の帯域幅と本艦の空中ユニットが形成するデータリンクを通じ、戦場情報の取得、目標選択、攻撃警告ならびに遠隔指令といったあらゆる戦術を実施するツンドラ級は駆逐艦クラスでありながら旗艦として、使用されることはしばしばある。補助として格納庫には戦闘機編隊を3つ収容が出来、多様な任務を遂行可能である。

ミニファースト級巡洋艦

全長825m

最高速度900km

ハイパードライブクラス1・0

機関：エリスドライブ

防御：発展型シールド発生装置4基、エリスフィールド

装甲：強化デュラスチール装甲、対ビームコーティング

武装

- ・長距離重エリスレーザーク砲2門
- ・局所防衛エリスレーザーク砲 x 38 (短距離ミサイル含む)
- ・艦首ツイン重ターボレーザーク砲 x 2
- ・二連エリスターボレーザーク砲 x 26
- ・軽エリスターボレーザーク砲塔 x 20

- ・魚雷発射管24門
- ・近接対空防御レーザーCIWSx6

補助装備

- ・『ヴァルチャー級ドロイド戦闘機』多数

概要

ミニファースト級は、軍艦と通信船という二つの役割を担った艦である。船体中央部から左右に伸びる翼には防御用兵器が備わっていた。ミニファースト級はバトル・ドロイド達によって運用されることを目的に設計、建造された。補助装備として『ヴァルチャー級ドロイド戦闘機』を多数搭載。同志が乗る場合を想定し生命維持装置や居住区画等がある。

プロヴィデンス級キャリアー／DESTロイヤー

全長1088m

最高速度900km

ハイパードライブクラス3・0

機関：エリスドライブ

防御：発展型シールド発生装置6基、エリスファイールド

装甲：強化デュラスチール装甲、対ビームコーティン

武装

- ・回転式4連装エリスIIターボレーザー砲塔(144mm)x14
- ・エリスIIデュエルレーザー(200mm)x36
- ・局所防衛砲x12
- ・対空機銃x40

・魚雷発射管102門

補助装備

・ヴァルチャー級ドロイド戦闘機 多数

概要

流線型のフォルムをする形状を持つこのプロヴィデンス級は各部が細かくモジュール化されており簡単にエンジンのアップグレードを可能となっており艦載能力に特化したキャリアー、対艦能力に重点を置くデストロイヤーに変更することが出来るのが特徴でバトル・ドロイド達によって運用されドロイド船の旗艦として機能する。艦種クラスは戦艦。

DH全能支援船

全長908m

最高速度900km

ハイパードライブクラス1・2

機関：エリスドライブ

防御：偏向シールド発生装置ドーム2基、エリスフィールド

装甲：強化デュラスチール装甲、対ビームコーティン

武装

・4連レーザー砲x12

・局所防衛レーザー砲x23

・ミサイルランチャーx15

概要

ミドガルドが使用する巨大な輸送船兼補給船である。ルクレハルク級バトルシップをはじめとする貨物積載容量の低い軍艦を補佐するため、設計・建造されミドガルド宇宙軍の戦力に加わった。この補給船はバーベルのような形をしており、装甲化された船体の全長は908・78メートル、全高は910・35メートル、横幅は1257・32メートルだった。船体には複数のハンガー・ベイを備えている。メイン・ハンガーは2つの半球部にはさまれた船体中央部に位置し、出入り口は船の後方に設けられていた。ハンガーには吊り下げ式クレーンをはじめとする貨物積載および運搬用の機材が充実していた。メイン・ハンガーの奥には船の主要反応炉室があり、万が一に備えてレイ・シールド発生装置が設置されていた。

ミドガルド軍のバトルドロイド部隊を銀河系各地の戦場へ運搬した。補給船はルクレハルク級艦よりも大量の貨物を積載することができ、ドロイドではないクローン兵の再補給物資や武器を運ぶ。戦闘に加わることも想定されているが実戦では味方の宇宙船の援護射撃に依存している。Tシリーズ・タクティカル・ドロイドの監督者としてB1バトル・ドロイドによって運用される。

エターナルストーム級『ミドガルド』主力戦艦

全長2000m

最高速度550km

ハイパードライブクラス1・0

機関：エリスドライブ

統合エネルギー変換システム

防御：エリスフィールド、偏向シールド発生装置2基、試作型重力

偏向シールド

装甲：ニュートリウム複合装甲、対ビームコーティング

武装

- ・艦首大型エーテルレーザー×1
- ・クラスターミサイル8基
- ・近距離防衛対空レーザー 多数
- ・近距離用陰電子砲 x30

補助装備

オートマトン600機

概要

円柱型のフォルムをする戦艦で2000mの長大な棒のような形状をしており、その船体の大半は主砲であるエーテルレーザーを撃つための加速装置の役割を果たしている。

船体そのものが砲身という設計は強力な火力を誇った砲撃を遠距離に飛ばす設計となる。冷却装置のアップグレードにより、強力な攻撃、防御力を獲得した。どのような重量級艦船でも撃破可能となり小惑星クラスを破壊すら可能とする能力を保有している。統合投射プラットフォームを装備しており、各目標に超遠距離攻撃を行う。

オプションにはUAVシールドシステムはエネルギー兵器に対する全面的で強力な防御を獲得出来る。弱点があり側面に敵艦による接近がされると攻撃が難しく又、機動力が早く無いため、補助装備としてオートマトンを装備している。オートマトンは全長3・5mの人型機動兵器である。能力は未知数だ。

とある勢力からの情報だと戦闘力はフリゲート艦を数機で撃沈する能力があるようだが真相は以下に……。

エターナルストーム級『ミドガルド』主力戦艦Ⅱ型
同上

概要

最大出力で放てば、一発で惑星を半壊させることが可能。

エターナルストーム級『ミドガルド』主力戦艦。通称セブンス・デ
イビターズ級

全長2000m

最高速度550km

ハイパードライブクラス1・0

機関：エリスドライブ

統合エネルギー変換システム

防御：エリスフィールド、偏向シールド発生装置3基、試作型重力
偏向シールド

装甲：チタニウム複合装甲、対ビームコーティング

武装

- ・艦首大型エーテルレーザーx3
- ・クラスターミサイル8基
- ・近距離防衛対空レーザー 多数

・近距離、中距離用陰電子砲 多数

オートマトン600機

概要

全長2000mに及ぶ通称、デイビタース級の外見は、3つの円柱を三角形の頂点それぞれに並べたようになる、三本の砲身を持った艦であり、三角形を作るようにそれぞれが連なっている。通常のエターナルストーム級と違い、中央（最奥にある）は輝きを見せる円形のエリスドドライブが剥き出すようになって見えている（エリスドドライブは内部にある）。

艦艇数は7隻と予備艦艇7隻。デイビタース級の建造完了と同時に『ガイエンブルク級移動要塞』が完成。

エターナルストーム級『ミドガルド』主力戦艦。通称、総統級

全長2000m

最高速度550km

ハイパードライブクラス1・0

機関：『シーメンズIIマリアンIIエリスドライブ』

統合エネルギー変換システム

防御：エリスフィールド、偏向シールド発生装置5基、重力偏向シールド

装甲：強化型チタニウム複合装甲、対ビームコーティング
武装

- ・艦首大型エーテルレーザーx5
- ・クラスターミサイル10基
- ・近距離防衛対空レーザー 多数
- ・近距離、中距離用陰電子砲 多数

オートマトン600機

概要

全長2000にも及ぶ通称、総統級の外見は、5つの円柱を五角形の頂点それぞれに並べたようになる、五本の砲身を持った艦であり、五角形を作るようにそれぞれが連なっている。通常のエターナルストーム級と違い、中央（最奥にある）は輝きを見せる円形のエリスIIドライブが剥き出すようになって見えている（エリスIIドライブは内部にある）。

最新のドライブを内蔵しており、対惑星級並の攻撃力、防御力を獲得した。艦艇数は1隻と予備艦艇1隻。最高指導者級の建造完了と同時に『スターダスト計画』の「対惑星兵器」の両設計案が完成した。担当者によると両設計案は既に「データ削除済み」で、建造は間もなく完了。

《警告、以下のファイルはセブンス・デイビターズ（七大統治者）と担当者によって制限されています。資格証明が必要です。証明の失敗は特殊部隊（"赤い右手"）の動員をもたらします。アクセスしてください》

《証明成功》

ガイエンブルク級移動要塞
直径900km

収容艦艇数 10,000隻

装甲：ニュートリウム複合装甲、対ビームコーティング

防御：エリスフィールド、偏向シールド発生装置多数、重力偏向シールド

武装

- ・要塞砲x1。
- ・その他多数

補助装備

- ・オートマトン多数
- ・ヴァルチャードロイド戦闘機多数
- ・その他多数

概要

ガイエンブルク要塞は直径900kmの球体型バトルステーションである。直径の大きさを例えると準惑星ケレスくらいある。武装は要塞砲x1を主砲としている。要塞砲は艦隊を薙ぎ払うことが容易に出来る他に、惑星を破壊する力も保有しているが大規模艦隊からの襲来を想定して、回転式4連装エリスIIターボレーザ砲塔、局所防衛砲台、その他多数を設置している。

それと数百〜数千：いやそれ以上からの波動砲を受けても容易に耐えられる防御性能を兼ね備えている。あくまでもシミュレーション上のだが…。

重力傾斜を発生させる能力を持つ文明との戦闘を想定し、重力傾斜から抗う性能もあり、ステルス機能もある。

ガイエンブルク要塞は未知領域のホルクミン星の軌道上で建設が開始された。ホルクミン星系にはプロヴィデンス級デストロイヤーを旗艦とした多数の戦闘艦艇と次元跳躍阻害兵器を配備される他、プロトタイプでもある『次元潜航艦』が配備されており、招かれざる客を警戒していた。

それと並行してこの要塞を更に上回る巨大兵器が同星系にて完成。

スターダスト級惑星破壊兵器

直径は「データ削除済み」と規格外な大きさを誇るこの巨大兵器スターダスト級は、『最高指導者スノウ』とセブンス・デイビターズ（七大統治者）主導の元にスターダスト計画が始動され、「データ削除済み」に完成した。

惑星破壊兵器はガイエンブルク要塞と外見は変わらないが、力と防御力は別格だ。

惑星を文字通り破壊が可能で、防御はエリスフィールド、偏向シールド発生装置、重力偏向シールドを標準装備している他、新開発された『光周波フィールド』と呼ばれる多層性結合波形を用いた防御フィールドを実用化したことで、より光学兵器に対して高い防御力を獲得した。

ワイプゲートを改造した重力シールドは、如何なる文明も星ごと粉碎してもなお有りまくる兵器を無力化。

スターダスト計画にはもう一つ、『龍』を模倣した惑星破壊兵器も存在する。

『ミドガルド』戦闘機、シャトル、護送艦の紹介（随時更新）

ミストラル戦闘攻撃機

全長35m

最高速度（大気中）1000km

防御：シールド発生装置

武装

・35mmレーザー戦闘砲

概要

2門の速射砲を搭載しており、襲来してくる敵機群や護送艦に素早く反撃が出来て、強力な空戦能力を持っている。

機体が軽いため高速移動及び機動力を獲得。長時間の出撃に問題なく対応可能。ただし、ハイパードライブを積んでいない関係でワイプが出来ない為、任務を遂行する際は母艦が随伴する必要がある。

ヴァルチャー級ドロイドスターファイター

全長7m

最大加速時3800G。最高速度（大気中）1200km

武装

・翼部ブラスター砲x4

・魚雷ランチャーx2

概要

ヴァルチャー級ドロイドスターファイターは生きたパイロットを必要としない自律式のドロイドファイターである。有人機よりも遙かに速い反応速度でドッグファイトやアクロバット飛行が可能。

ヴァルチャー級の最大の特徴は飛行モードから歩行モードへの変更に可能で母船の外壁に張り付いたり、そのまま地表に降り立ち地上部隊を支援することが出来る。

ヴァルチャー級の設計思想としては数で敵を圧倒する群集兵器としての役割をプログラムされている。

*見た目まんまSW世界で登場する分離主義勢力のものと同じ。

ハイエナ級ボマー

全長12・4 m

全高3・1 m

最大加速時3700 G。最高速度（大気中）1100 km

武装

・レーザー砲 x 4

・プロトン魚雷 6 発

・プロトン爆弾 4 発

・震盪ミサイル 6 発

概要

強力な爆弾が搭載出来るよう設計された自律式のドロイドファイターである。ヴァルチャー級を元が開発され、大型の船体を持つ。

*見た目まんまSW世界で登場する分離主義勢力のものと同じ。

T-65 Xウィング・スターファイター

全長13・4 m

全幅11・7 m

全高2・4 m

最大加速時3700 G。最高速度（大気中）1100 km

ハイパードライブクラス2・0

機関：エリスドライブ

エンジン：核融合推進エンジン×4

防御：発展型シールド発生装置

武装

・レーザー砲×4

・プロトン魚雷発射管×2（プロトン魚雷6発）

・震盪ミサイル2発

概要

多用途の制宙戦闘機であるXウィングはクローンパイロット1名と『アストロメクドロイド』で運用される。翼は普段、二層に重なるように折り畳む為、左右1枚ずつの見た目だが戦闘時となると折り畳まれた左右1枚の翼が左右2枚ずつの翼となり、X字型（Sフオイル）へと展開。

武装は4門のレーザー砲がそれぞれの翼の端に設置。胴体の中ほどにある溝には2門のプロトン魚雷発射管がある。機体中央左右には内部に1発ずつの中型ミサイルが格納されており発射時に対の

ドアが開いて外側斜め下向きにせり出され、発射される。

生命維持装置を標準装備している他、専用スケットに搭載されたアストロメクドロイドは常に中央回路と直結しエンジンや動力システム等、あらゆる飛行状態の監視やハイパードライブの補助を行い急激な高度変化と状態制御を調整することによって、パイロットは飛行以外の複雑な作業から解放され、攻撃や回避にもより集中することが出来た。アストロメクドロイドが修理可能な損傷であれば損傷を直すことも出来た。

*見た目まんまSW世界で登場する銀河共和国のものと同じ。

T-70 Xウイング・スターファイター

全長12・48 m

全幅11 m

全高2・5 m

最大加速時3700G。最高速度（大気中）1100 km

ハイパードライブクラス2・0

機関：エリスドライブ

エンジン：核融合推進エンジンx4

防御：偏向シールド発生装置

武装

・レーザー砲x4

・ブラスター砲x2（機体下部）

・プロトン魚雷発射管x2（プロトン魚雷8発）

・震盪ミサイル2発

概要

T-65 Xウィングのデザインを継承しつつ、様々な点に改良を施したT-70 Xウィング・スターファイター^{プレイヤー}は将軍が乗員を務めている。T-65 Xウィングと同様にパイロット1名とアストロメクドロイドによって運用される。

*見た目まんまSW世界で登場するレジスタンスのものと同じ。

B L B-Yウィング・スターファイター

全長16 m

全幅8・54 m

全高2・44 m

最大加速時2700G。最高速度（大気中）1050 km

ハイパードライブクラス2

機関：エリスドライブ

防御：発展型シールド発生装置

武装

- ・前部レーザーキャノンx2
- ・バブル型防御用旋回式砲台x1
- ・プロトン爆弾14発

概要

対空戦闘もこなせる長距離爆撃と珍しい機種。クローンパイロット1名、クローン砲手1名、アストロメクドロイドで運用される。他の多くのミドガルド軍機と同様、生命維持装置やフィールドキッ

トと呼ばれる一週間分のサバイバル食料キット、シールド、射出座席を標準装備している他にハイパードライブクラス2・0を搭載している。これにより艦隊から離れての任務、長距離単独行動が可能な機体となる。

アストロメクドロイドが搭載されていることから操縦、攻撃&回避に専念出来る。Yウイングの運用思想としては頑丈な船体と搭載されている高性能爆弾での一撃離脱攻撃。

*見た目まんまSW世界で登場する銀河共和国のものと同じ。

攻撃型偵察機ARC-170スターファイター

全長12・71m

全幅19・85m

全高3・81m

最大加速時2600G。最高時速（大気中）1000km

ハイパードライブクラス1・5

機関：エリスドライブ

防御：発展型シールド発生装置

武装

・大型レーザー砲x2

・後部ツインブラスタ砲x1

・プロトン魚雷発射管x1（プロトン魚雷5発）

・震盪ミサイル2発

概要

偵察からドッグファイト、爆撃といった様々な任務をこなせるマルチロール機。後部に旋回式ツインブラスター砲があり、両翼の端に設置された大型レーザー砲は主力艦の装甲を貫通する程の威力を誇り、プロトン魚雷や震盪ミサイルを装備していることから重武装といっても過言ではない。乗員はクローンパイロットが1名と副操縦士が1名、後部のツインブラスター砲を受け持つクローン砲手が1名の他にアストロメクドロイド1体が乗り込んでいる。Xウィングと同様に戦闘時はX字型（Sフォイル）へと展開する。

*見た目まんまSW世界で登場する銀河共和国のものと同じ。

ニュー級アタックシャトル

全長19 m

全高23・34 m

最高時速（大気中）850 km

ハイパードライブクラス1

機関：エリスドライブ

防御：シールド発生装置

武装

・レーザー砲x6

概要

ニュー級アタックシャトル、通称ミドガルド・アタック・シャトルは多目的輸送船である。長距離を航行出来るクローントルーパー用兵員輸送船として用いられる。左右斜めに一對の可変翼を備えているのも特徴の一つ。

前部にコックピット、後部に乗員区画が配置されている。

*見た目も中もS W世界で登場する銀河共和国のものと同じ。

ラムダ級T-4Aシャトル

全長20m

最高速度(大気中)850km

ハイパードライブクラス1

機関：エリスドライブ

防御：偏向シールド発生装置

武装

- ・ 前部ダブルレーザー砲x2
- ・ 翼部ダブルレーザー砲x2
- ・ 後部ダブルレーザー砲x1

概要

ラムダ級T-4Aシャトル、通称ミドガルド・シャトルは3つの翼を持つ輸送船でミドガルドの^{プレイヤー}将軍及びミドガルド軍のクローン将校の移動用に使用される。

宇宙空間だけで無く大気圏内もスムーズに移動が出来る他、人員輸送船としての利用も出来た。安全な航行を保証するため分厚い装甲を持ち、コックピット部分は救命艇として分離することが出来た。

*見た目も中もS W世界で登場する銀河帝国のものと同じ。

セルラーディフェンダー重量級魚雷艦

全長130m

最大加速時2500G。最大時速（大気中）900km。

防御：発展型シールド発生装置

武装

・四連装魚雷発射管x2

・速射砲x1

・近接防御砲x2

概要

魚雷攻撃システム「ビーハイヴ」を搭載し、魚雷で目標を連続攻撃できる護送艦である。大砲防衛システムと状況把握システムを装備しており、小型艦船や戦闘機からの妨害を受ける際の生存能力を大幅に向上させた。ハイパードライブを積んでいない関係でワイプが出来ない為、任務を遂行する際は母艦であるAC721スサナー級II型（艦載型又は戦闘特化型）が随伴する必要がある。

CV-MO11重量級ミサイル護送艦

全長105m

最大加速時2500G。最高速度（大気中）900km。

防御：発展型シールド発生装置

武装

・MK1-JM三連装垂直ミサイル発生装置「スターファイア」x

2

・75mm速射砲

概要

ミサイル攻撃システム「スターファイア」を搭載し、小・中型目標を継続的に攻撃することが出来る護送艦。大砲防衛システムと状況把握システムを装備しており、小型艦船や戦闘機からの妨害を受ける際の生存能力を大幅に向上させた。ハイパードライブを積んでいない関係でワープが出来ない為、任務を遂行する際は母艦であるAC721スナイパー級II型（艦載型又は戦闘特化型）が随伴する必要がある。

設定資料記入後：補遺。メッセージを受信しました。

補遺、会話記録



設定資料記入後・・・補遺。

音声記録・・・

・・・匿名Aよりメッセージを受信しました。音声記録を再生します。

「これだけの武装を持ってしてもまだ安心が出来ない世界だ。可笑しいだろ？君は正しい反応だ。我々、そして君からしたら過剰だからな。だがこんな過剰なまでの武装でも『確認した勢力』は星をも破壊する能力を保有している。

簡単に、だ。天体でも怪しいのに星はやばい。此方は小惑星クラスを主力戦艦20隻で数回繰り返しでやっと破壊可能なのに。

それにしても何故確認した勢力は我々を畏怖の目で見るんだッ？バ

レバレだな。畏怖の目ね、此方がしたいくらいだわ！！ー



匿名Bよりメッセージを受信しました。

音声記録・・・

・・・音声記録を再生します。

ーあゝじゃあ、話していきうかな。あの『件』についてね。私は最新で試作艦でもあるプロテクト級に乗って『未知領域』探索に向かった。今となってはこの艦に救われたよ。話を続けるね。

え？あゝ勿論、艦隊で行ったよ。40隻くらいでね。探査の目的は地図を更新することだ。私達が転移したこの銀河系の大部分は既に掌握済み。残りは外縁部のみだから「もう少しでこの銀河系の地図は完成する！」って興奮しながら任務を行っていたさ。その時、横に居たアークワイズ級が巨大な爆炎に包まれたんだ。それはまるで直線上に放つ巨大ビームのようだった。突然左舷前方に現れたも

んだから回避など不可能に等しかった。たったそれだけで10隻のアークワイズ級がジャボンさ。最新の高性能レーダーのおかげで『未確認の勢力』からの攻撃だと分かった。

だって我々の艦では無い艦の反応とかあったからね。

それでも射程圏外だったから反撃なんて出来なかったさ。ただ避けるか逃げるの2択。最終的には私ともう一つの同型艦と2隻の駆逐艦II型と1隻のアークワイズ級だけ。ワープで逃げる為に計算の準備していた最中に私の艦にもアレがやってきた時は本気でこの世からサヨナラって確信したね。悟りにだって入った。

けど、私は助かった。目を開けると爆炎は此方を飲み込むことは無く薄い緑色を輝かしたエリスフィールドによって少しずつ無力化されたんだと分かった。

『アイツ等』きっとビックリしたね。ビックリしなかったらまた爆炎がやって来るのは分かる。

でも無力化できたとはいえ冷却、エネルギー変換システムに負担が掛かってしまったからエリスフィールド張ることは出来なかった。シールド発生装置も同様に、だね。

幸い航行に問題無かったのは良かったけどね・・・
計算が済んだ私を含めた残存艦隊は直様、現宙域をワープし離脱した。

プロローグ

西暦2040年の大晦日の今日。世界で人気のSFゲームVRMMO『ワールド・スペース・オンライン』がサービス終了となる。

このゲームは元々2020年初期にスマホゲームとして発売されたが世界から人気を呼んだ。

発売から5年、某企業は体感型VRMMOを開発する。

体感型というのは専用コンソールを利用して、外装に五感を投入し、仮想の世界で現実にいるかのように遊べるゲーム一般を指す言葉である。

当初は基本的なコストが高額となっており医療、軍事関係などの使用がメインとなっていたが年数を重ねるにつれて非常に簡素化し、やがて体感型は一般家庭に普及するようになっていた。

この頃より某企業はゲームにも更に力を入れるようになっていたがその際、人気があるワールド・スペース・オンラインを体感型に導入。

今更ではあるがワールド・スペース・オンラインについて説明しよう。説明すると世界観は宇宙を題材とした物語であり宇宙開拓ストラテジー系オンラインゲームである。宇宙を探索し、国を管理し、他プレイヤー勢力との外交、貿易、戦闘を繰り広げるものである。

開拓、とあるが開拓はどちらでもいい。開拓をやらないプレイヤーも居る。このゲームは自由度が高いのだ。冒険オンリーでも良し、商売を楽しむのもよし、覇権を握り未来永劫支配するプレイもよし。なので様々な楽しみ方が存在するのだ。

ギルドも作れるし、自分だけのアバターを作ることでも可能で人間種以外でもヒューマイノイド型の異星人種にファンタジーに登場する神秘的な種族にまで。オリジナルの艦とかも作れたりもする。MOD要素もあり多々あり他作品の武器だったり、兵器だったり、キャラクターだったり色々と入れることだって出来るのだ。

そんな世界だが、現在誰よりも愛していた存在達がプレイしていた。



ーワールド・スペース・オンラインー

我々が愛するこの世界（WSO）は今日を以って終わる。

貿易、外交、戦争、冒険、開拓

出会いと別れは表裏一体。

我々は忘れないだろう。『#%&\$"&!Q（言語化不能）』として忘れる訳にはいかない。我々はリアル世界に置いてでも世界中を旅した。

何故か距離を取られ畏怖の目で見られる事があったし説教もされ

た。時には石を投げてくる子供達。

何故投げられたのかは分からない。同志と共に捕えたワニをプレゼントしたことが駄目だったのか？

何故説教されたのか分からない。女と男のアレコレについて教えただけなのに・・・。

ショックだ。理不尽だ。話を続けようーーー

我々は地球では出来なかった旅がこの世界では出来た。だが・

其れも今日までだ。

23 : 55 : 48

間もなく、W S O 世界は終わりを迎える。

もっとしたかった。もっと冒険したかった。荒らしであるチータ
ーを蹂躪したかった。

23 : 58 : 48

だが同志諸君、そんな顔をするな。私は貰い泣き体質なんだ。この
気持ちだけは消えやしない。この気持ちだけは心に残るのだから。

23 : 59 : 30

だがもしも、もしもまた出来るのなら――

23:59:50

それはとても――

23:59:55、56、57、58、

なんて素晴らしいことだろう。

23:59:58、59――0:00:00



0:00:00:.....1

第1話

明かりに照らされた白い部屋の中に幾人かが金属で出来た円卓を囲いように椅子に座っている者たちが居る。

「なあなあ、まだ始めないのかよ？」

∧ i 1 4 0 8 6 | 5 4 7 9 0 ∨

紅いYシャツの第一ボタンと無地の黒スーツを着崩し身に纏い両耳にアクセサリーを付けた赤髪の少女が言った。名前はアイリス。背中まで伸びたロングストレートの赤髪はロウソクの火のように輝いている。ゴールドの瞳は金塊のような綺麗さで眉と共に細めているのは少しダルそうであり急かすようでもあった。

「そう急かさない方がいいよ？彼女も『色々』と準備があるからね」

「も？ってなんだよっ」

「さあ？」

「おいコラッ」

∧ i 1 4 0 8 7 | 5 4 7 9 0 ∨

白いyシャツの第一ボタンと柄付きの青いスーツを着崩し身に纏う青髪の少女が言った。名前はテレゼ。背中の上部分まであるセミロングヘアにスカイブルーの瞳は青空を表すようで綺麗であった。彼女はアイリスへからかいながら言葉を返す。

「時間は過ぎていくようだし『アッチ』に帰ろうって思ってもどうにもならないよね」

∧ i 1 4 0 8 8 | 5 4 7 9 0 ∨

白いyシャツに無地の白いスーツを身に纏う灰色の髪をする少女が言った。名前はユリア。髪型はショートにしている無地の黒いメガネを掛けてあり瞳はテレゼと同じく金塊のように輝いており、耳に装着しているヘッドギアは近未来のフォルムだと感じさせて知的な印象を与えているようである。

「それはそうですね。確かに時間は過ぎていきます。が今は、『この場の時間』が大切ですからね」

「それは私だって分かってるよ」

「まあっ」

∧ i 1 4 0 8 9 | 5 4 7 9 0 ∨

黒いyシャツに黒いスーツを身に纏う金髪の少女が言った。名前はオリアナ。背中の上部分まであるロングヘアにカチューシャを頭

に掛けて瞳は黄色。オリアナは机に突っ伏すユリアを見て、目を軽く見開くと微笑む。

「おやおや、行儀が良くないねユリア。気分が悪くなるよ。ただでさえボクはこの場に来て君を見ると気分が悪いというのに・・・辞めてくれないかな、ソレ。後、視界から消えろメガネ」

「メガネは『ステラ』も一緒だろ！・・・後者のそのセリフはブーメランとしてそのまま返すよ」

∧ i 1 4 0 8 4 | 5 4 7 9 0 ∨

ピンクのYシャツに白衣を身に纏うピンク髪の少女が言った。名前はステラ。首元が隠れるくらいのショートヘアをしていて左耳からリボンのようなものを下げており無地の赤いメガネを掛けており瞳は髪色と同じピンクである。服装と知的な雰囲気も相まって科学者のような感じさせる印象である。

ステラは挑発を込めてユリアに辛辣と悪口を混ぜた毒舌の言葉を掛けるが彼女も負けんとばかり返す。同時に睨み合う二人。

「気のせいですかね？二人の目から電撃が飛び交うような幻視が見えるのは・・・」

「いつものことじゃないオリアナ。気にしたら負けよ」

「オレ知ってる、それって現実逃避ってやつだよな！」 「あっ、

ちょっとそれはッ」

「・・・アイリス。逃げちゃだめなの？」

「あ、え、えくと、その、うん。逃げてもいいんじゃないか、ねえかなく」

「・・・アイリスさん」「・・・言わんこっちゃない」

∧ i 1 4 0 9 0 | 5 4 7 9 0 ∨

白いシャツに白いスーツを身に纏う銀髪の少女が言った。名前はイザベラ。腰元まで届くストレートヘアにアメジストの瞳であり、温かい慈愛に満ちた笑みはまるで天使のようである。

「ハハハっ・・・うん、マジですまん。だからその目は止めてくれよ、じゃなくて止めてください」

表情と口元は笑っているが目は笑ってなく冷たく凍るような眼差しは鬼を彷彿させるかのようにである。アイリスにはそう見えた。

「分かればよろしい」

「ほっ（安堵の溜息）それはよかつ・・・」

「次は許さない」

「うっッ！」

アイリスは鋼の心の持ち主だと自分自身がそう強く思っていたがそうではなかったようだ。と思いガラスハートに修正されたアイリスは心にダメージを受けた。慰めてもらおうとテレーゼとオリアナに目でお願ひしたが彼女に送られる眼差しは同情と哀れみであった。

アイリスの心は崩壊寸前間近であった。なお現在ダメージコントロール中。

「――殴ってやる！ステラ！？」

「――奇遇だね？ボクも殴ろうと思っていたところなんだよッ！」

「まあまあ、落ち着いてください。争いは良くな・・・」

「オリアナは黙ってる！」「うるさいからどっか行ってよ！？」

「・・・いんは理想論でしょうね！ぶっ飛ばしてさしあげますッ！！！」

現場は大変なことに。アイリスは虚ろな目となって口を大きく開けて放心状態でありテレーゼは彼女の口から魂が抜けようとしているのでは？と錯覚を覚えてしまう。イザベラはアイリスに無言の圧を掛けて。ユリア、ステラ、オリアナは拳による語り合いが始まるうとしている。

テレーゼは色々と頑張った。でも駄目だった。今の自分にはただ

祈ることしか出来ないのだ。

―その時である―

―同志諸君、待たせたな。

「「「「「ッ！！」「」「」」

声が聞こえた。それも頭の中で。瞬間、今までの事が嘘だったようにスパッと椅子に座る。

アイリスは再起動したようだ。良かった良かった。

同時に誰もがその方向から聞こえたであろう方向に振り向く。

入り口の扉が左右にスライドし開かれ、二人の少女が入室する。

∧ i 1 4 0 9 1 | 5 4 7 9 0 ∨

服装は軍服であり白い詰襟型のジャケットに前合わせで金のボタンに「桜に錨」の紋章が印字されたのが5つある。女子用軍服のスカートから伸びる黒いストッキングに包まれたスラリとした両足はモデルのようである。

そして背には肩章に飾緒が付いているコートゴールドを羽織っている。

髪は腰元まで届くロングストレートで純白であり瞳は明るい黄土色。

もう一人も軍服ではあるがシンプルでありシャツに無地の黒いジ

ジャケットを着ていて頭には黒い帽子を被っている。

髪は黒色で全体的に短く整っていてショートに近い髪型で首元（後ろ）が隠れるくらいある。

瞳は黒である。

この場に集まる誰もが容姿端麗であり「美少女」と呼ぶに相応しい。

純白の少女は席に座り黒髪の少女は付き従うように隣に直立不動をし佇む。

室内は静寂に包まれる。

――同志諸君、待たせたな、――同志諸君、待たせたな、よしっ。

「同志諸君、待たせたな」

「――「――「――」

「？」

――あれ？さっき言っていたよな？。

――なんで繰り返し言うだろうね？。

――練習かな？。

――可愛いですね。

――静かにした意味ないじゃん。

――ああ。

6人の少女は純白の少女に温かい目線を送る。

「……同志諸君、聞こえているからな？」

純白の少女の名前はオリビア。円卓に座る6人の纏め役を担当している。オリビアは常に感情を乱すことが無くクールだと自負しているがそれでも限界はあったのか涙目である。

ちなみに先程の「頭の中」で声が聞こえたのは念話を使ったからだ。念話は補佐官を除くこの場の全員が使える。

オリビアは気を取り直し表情を引き締めて言葉を放つ。

「全員、揃ったようだな。……では、これより緊急会議を始める」

今まで明るかった空気が一変し室内は張り詰めた緊張した空気となつて広がった。

「内容についてだが、既に同志諸君は把握していると思うが念の為、見てもらいたい」

オリビアは補佐官でもある黒髪の少女に身振りで円卓に座る者達に端末を配るよう指示を出す。

指示を受けとった補佐官は入る際に一緒に持ってきた金属のケースから人数分の端末を取り出し配る。

補佐官より受け取ったのは「書類端末」と呼ばれるものである。書類端末とはインプットされた情報をホログラムとして目の前に投影し見る為のものだ。

紙媒体などの書類もあるが今回は書類端末が使用される。

少女達は端末を起動するとホログラムが自分の目の前に投影された。

ホログラムの投影された大きさは大体タブレットサイズ。

少しの間、端末に表示された情報を黙読する時間が続いた。

室内は怖いくらい静かとなった。そして――

『はぁ（溜息）』

補佐官とオリビアを除く少女達が溜息を出した。出さなかった側も『再度』出したい程。同時に疲れ切った様子を見せる少女達。

「これは確かの情報なのですか？いえ、疑う訳では無いのですが

・・・」

「あく艦隊がッ」

「月に建てたから月もセットで要塞基地ごと、『転移』したって……ええーッ?!」

「声うるさいよ、アイリス。けど今回ばかりはボクも声高に叫びたいくらいだね。：障害物が無い宇宙空間に転移したと考えれば寧ろ良好か? いや、星と星の衝突が無いだけマシ? はぁ（溜息）：それ以外に」

「私達が知る銀河系が一つも無いわよ! 此処何処なの!?!」

「システムコマンド起動! : 基本的なシステムすら出ないとは（啞然）

端末に表示された情報を見て信じ難い表情をすると同時に驚きを露わにする少女達。

「驚くだろう? かくいう私もだ。WSO世界なのかも分からない。使用していたアバターに転生? 憑依? で五感を感じることが出来る時点で「現実」世界であることは間違い無いだろう。確認の為、私は気持ちを落ち着かせる意味合いも含めて停泊所に在る軍艦に乗って宇宙に出た。……月は綺麗で白くて丸かった（ドヤ顔）」

「「「「「ッッ!」」」。ム。）」「「「「「」

「ま、待て! 銃を向けるなッ! 私は偉いんだぞ!?!」

「知るかよ！偉いんなら先に部下を労えよな！？部下じゃねえけど『ダチ（同志&親友）』だろうがッ！」

『そうだッそうだ！』

「う、うるさい！いいじゃないかッ。って危ないぞ！本当に撃つバカがいるか！？」

少女達はオリビアが時間に遅れたのはソレが原因だなど確信に近い考えに至り彼女にハンドガンを向ける。その内の一人、アリスは無言で銃のトリガーを引いたことに補佐官は苦笑いだ。補佐官止めなさい。

「ちょっと待て？今、軍艦って言った？」

ユリアは銃を向けたまま気になる疑問を指摘する。書類端末には艦隊は無いと記載されていた筈だ。

「この状態で聞くのか同志ユリア……ああ、言ったぞ、と言っても初期の艦だぞ？設計図に各種有っても資源がとて有るとはいえない状態で無理だ。現在停泊中の艦は『FG300型フリゲート』と小型採掘貨物艦くらいだ」

だから、合わせると30隻くらいになる。と最後に付け加えるオリビア。

少女達は無言で銃を仕舞い席に着く。今日は色々と疲れる日になりそうだな、と思いつながら。

オリビアは命の危機が消えたことに安堵の息を出して自身も席に着く。

「では気を取り直して。まず今後の方針なのだが・・・」

会議を進め今後の方針を固めていき結論が出た。

- ・ 星系含む銀河系の探査、及び地図の作成
- ・ 資源採取
- ・ 軍備増強
- ・ その他

「…では改めて。突然、非現実的な事態に巻き込まれ、内心不安だろう。「不安じゃねえよ」「シッ！静かに」…実際、元の世界に帰る糸口すら掴めていない。だがコレはコレで悪くないのでは無いか？地球で出来なかったことがWSO世界の技術を用いて好きに出来るのだ」

『・・・』

少女達は不敵な笑みを浮かべる。

「では同志諸君に告げる。あ、その前にまずは――」

ーご飯を食べようか。私は空腹だ。

その言葉を聞いた少女達も無言で賛同するように頷き、やるべきことの前に腹ごしらえをするのであった。

第2話

同志諸君、あの日より15年の月日が流れた。

まずこの15年という期間の間で分かったこと、やって来たことを言おう。

我々が転移したこの銀河系の名前は『アンドロメダ銀河』。質量において太陽系第三惑星『地球』がある『天の川銀河』とほぼ同じ質量であること。

しかもアンドロメダは天の川銀河の隣にある銀河系でもあった。

アンドロメダ銀河と聞いて私達はもしや本当に私達が住む現実世界にW S Oの技術を持って転移したのではと頭に過る。同時に天の川銀河に行きたい想いに駆られたが我々は直ぐにでも行けない理由がある。

恐らく、いや確実に地球外知的生命体、又は宇宙人が銀河中にいることは間違い無い。だが遭遇すらしなのはどういうことだ？いや恐らく我々よりも遙か高度の技術力で姿を消しているに違いない。まあ、外縁部であるアウトーリムに恐らく存在するであろうが。

まず当初、保有していたのは駆逐艦すら無くフリゲート艦23隻しか戦力が無い。ソレ以外にも人的資源が圧倒的に無かった。

会議に同席した「補佐官」、円卓の席に集った「同志」を除いて居ないのだ。いやその場に居なかった同志も居たがとにかく圧倒的に居ない。

人間では無いが警備や歩兵、艦の操舵など汎用性がある『B1バトルドロイド』が担当していたのだが……正直なところ愛嬌たっぷりといったマスコットの印象が一番強い。

戦闘力は個別より数を重点に置いた戦術を取るが欠点があり司令船などに置かれる中央コンピューターでの制御に頼らざる負えなくなってしまうている。

銀河系規模なんてWSO技術でも難しい。司令船が破壊されたら一斉に制御が失うのはデメリット過ぎる。

こうした欠点を無くすため、我々は独立して行動出来るスタンドアロン方式の採用、敵味方識別信号の更新や、搭載AIのアップグレードを行う。

これにより数より個の質による戦術が少しでも行えると期待したい。同時に命令遵従で忠誠心のある『クローン軍団』の製造に着手した。

惑星『ティラス』と名付けた惑星の90%以上が水に覆われている海洋型惑星にクローン製造の為の施設は設けた他、訓練所に居住区画などといった等も設けた。

クローン製造の要ともなる、遺伝子問題に関しては緊急会議に同席した補佐官の遺伝子を使用した。本人も乗り気だったし。クローンの製造と平行し、武器やアーマの開発を開始。

更に平行し、実弾兵器（主砲）をレーザー兵器に変更。同時に造船ドックを増設し製造する艦艇は徹底したブロック構造と規格の統一によって設計、製造される。

クローン製造がティラス一ヶ所のみに関し、軍艦製造などに関しては一ヶ所では無く多数の造船ドック、軌道上造船ドックにて行われる。

宇宙人よ。いいのか？本当に造船ドック以外にも作っていることが有るんだぞ？（意味深）。

まあ許可取る必要が無い。姿を表さない宇宙人が悪いのだ。我々は悪くない。

しかしながら15年の月日が経とうとしているのに不思議なことに見た目はあの時のままで変化など無い。

クローン達は成長速度が人一倍早くなっているとはいえ、見た目の変化はそろそろ止まりそうだ。

変化が有るとしたら同志達がSF世界で登場するであろう軍服を着用していることか。それと軍用コートを外して紅いマントを付けたくらいか。私は基本的にな変わっていないな。好きだから。

とはいえ流石に外交に赴く際、もしくは本拠地より所用があつて出る場合は着用しないとな…。

さて、肝心の戦力である現在保有する軍艦達を発表する。

- ・『FG300型多用途フリゲート改』15000隻
- ・『アークワイズ級フリゲート』2000隻
- ・『AC721スサナー重量級駆逐艦II型』（派生含む）12000隻
- ・『プロテクト級航宙戦闘艦』5000隻

引き続き軍艦製造中。

――

フフっ、笑みが止まらないな。主砲、対空防御などレーザー兵器に改装、更にシールド発生装置を取り付けた。これで宇宙人の高度な艦でも渡り合えるであろうが不安は残る。きっと我々よりも想像を絶する力があるのは明白である。

例えばだがコンパクトな艦のサイズに関わらず星をも容易に破壊することが出来るのでは？と考えてしまうのだが…：流石にありえないか。

15年という月日は無駄では無い。同志ステラが設計したプロテクト級。最新技術の塊であり試作型でもあるこの艦はブラックボックスもある為、能力は未知数であるがその力は他とは類を觀ない。

箱型に近い設計をするプロテクト級であるがコレは他の艦艇では無い力がある。ソレは「対消滅機関『エリスドライブ』」

エリスドライブは艦の砲撃、推力、防御の動力源として機能する。コレは今までに無い力であるその技術を同志ステラは作り上げた。流石は天才科学者だ。

ちなみにプロテクト級の主砲のmmを聞いた所、なんと490mmとのことで副砲含めた一斉射で轟沈させることが容易に出来ることが証明されている。副砲はAC721スサナー級と一緒に330mm。

AC721スサナー級は大型の倉庫を中に持っており資源採取を行う採掘艦が採った資源を收容する艦であるが同時に採掘艦などの護衛も兼ねて武装も取り付けた。遠征や主力艦の護衛として戦闘特化型のII級もある。

このプロテクト級とAC721スサナー級駆逐艦があれば本格的な遠征も可能になる。

戦力以外にも本拠地でもある要塞基地が建てられている月には防御用の固定砲台が多数増設され、現在は星全体を覆うことが出来る惑星用シールド発生装置を設置しているところであり、プラスとして防衛艦隊を駐留させている。その中にはプロテクト級の姿が数十隻。

宇宙人の遭遇に備えて、AC721スサナー級を旗艦とし、FG

300型多用途フリゲート改10隻を編成。至る所でB1バトルドロイドによって哨戒を行っているが今のところ変化は……ん？

「…報告します！某宙域の某星系にて重力波反応を確認しました！ワープアウト反応とのことです！」

補佐官と瓜二つの少女であるクローンが緊張とした声音でそう報告してくる。ワープアウト反応？我々の艦では無いのか？…識別は？。

「識別不能です。我々では無い何者かであります！」

…恐らく、いや確実に宇宙人。…遂にこの時が来たか。

「…ワープアウト反応が起きた某宙域の某星系に、付近に居る二個哨戒艦隊と同志アイリスを向かわせろ」

さあ、宇宙人とのファーストコンタクトだ。

第3話

〃〃FG300型 偵察型フリゲート〃〃

ある1隻の偵察艦がとある場所を目指し星の大海原を航行していた。

とある場所にて到着した艦は「不明艦隊」を小惑星帯に隠れながら情報収集を「バトル・ドロイド」達によって行われている。

情報収集を行っている理由としては突如、この宙域にワイプアウト反応が起きたからだ。それは「我々の」では無かった。

ワイプアウトした艦艇は合計100と数隻であり外見は濃緑色が基調となっている。主砲らしきものに穴が開いていて無砲身であり艦首に据えられた黄色い開口部の目玉が二つあるのが特徴的だ。

側面から翼のフィンのようなものも確認が出来る。明らかに戦闘艦であると軍人では無いものから見ても容易に捉えられることだろう。

「ソレ等」を観察する当直に就いていた一体のB1バトル・ドロイドはその硬く骨格の華奢な身体を仰け反らせて椅子を回す回すを繰り返す。どうやら彼？はこの任務に飽きを感じ始めたようだ。その行動を見た真ん中の胸に丸いペイント、頭に黄色のペイントが有るOOMコマンド・バトル・ドロイドが叱る。シュンッと落ち込む彼？。

その時、突如として轟音と激しい揺れが艦内を襲った。

「んわッ!？」

「ナ、ナンダ!？」

B1バトル・ドロイドの一体がまじまじとスコープを覗き見て、そこに映し出された事実には絶句した。

同僚ドロイドが見せて見せてと彼?をどかしスコープを覗き見るが、同じく絶句した。

状況を確認したいとOOMコマンド・バトル・ドロイドが聞く。

「アゝ敵艦カラ砲撃ヲ、受ケタヨウデス」

どうやら砲撃されているようだとOOMコマンド・バトル・ドロイドは呑気に思ったがすぐ現実に戻った。

「何故ダ!、本艦ハ小惑星帯二隠レテイタハズダッ。ン?…マサカ」

まさかと思いOOMコマンド・バトル・ドロイドはパネル画面を起動させるよう命ずる。

起動した画面には両生類または魚類を思わせる様な生物的フォルムで艦首の両舷には黄緑色に光る目のようなくぼみを持つ独特な艦

影に濃緑色の塗装を施された艦船の群れが此方に向かって撃って来ているのが外部観測用のカメラ、全周スクリーンの一部の映像によって分かった。分かったのだが……、

「ナゼ、何故！小惑星帯カラ抜ケテイルンダ?!」

00Mコマンド・バトル・ドロイドは驚き声を荒げる。本艦は間違ひ無くエンジンを止めその場に居座ったハズ。左から見渡すと操縦士と目が会う。彼？は気まずそうに「ゴメンナサイ、つい♪」っ
と言う。

「つい♪っデ済ムナツ貴様アー!?!」

やむことの無い爆発音がやってくる。此方も反撃するが混乱を来たしている為か効果は薄かった。敵艦の砲撃はシールドで防げたものの、敵の高出力な光学兵装によって自艦が当たる3発目を受け取った瞬間、限界はすぐにやってきた。此方の左舷装甲表面を融解させ、内部に爆発の手がやってくる。

それを理解すると同時に重力システムが無力化され傾斜する艦内、そして次々と周囲の装置や配管等が爆発する。ブリッジも同じくして火の手がやってくる。

自分達は助からない。でも救援要請と集めた情報は届けることができる。そう認識した00Mコマンド・バトル・ドロイドは部下にそう命ずる。命令を確認した部下は直様、実行する。

ああ、皆…オレは初めて宇宙人とのファーストコンタクトをするよ。

「対話、か。…回線を開け」

コレはオレ達にとって偉大な一歩だと信じて疑わないぜ。

『…驚いたな、まさか可憐な少女が将校とは…ゴホンっ。…我々は偉大なる大ガミラス帝国、総統閣下に仕える者である！劣等民族共に告げる！貴様等には…』

上部パネルに映し出されたのはヒューマノイドの若い女で、肌の色は青かった。え？オレ達地球人類は青い肌にも成れたのか！いやこの見た目と雰囲気的にコイツ宇宙人か。

…にしても言葉が分からないな。初めの言葉の驚いたニュアンスはなんとなくだけど理解は出来た。んだけどよ、全く以って分からないぜ。万能な言語翻訳装置が機能しないとは（驚愕）。

『…選択肢を与える！総統閣下に忠誠を誓うか死か…選べ』

これも言葉の壁なのかよッ。なんでだ！オレは言葉を交わしたいと言うのに！？オレは口を噛み締める。気づけば膝を屈して泣いていた。

『おお、そうか。忠誠を誓うか…賢い選択だ』

相手との通信回線が終わる。

「アイリス將軍、第一種戦闘態勢に移行します。よろしいですね？」

艦長、お前…なんて怖い顔をしているんだ。艦長以外のクルーも怖い顔をしている。同じ顔であるクローンであるから人によってはある意味で恐怖だな。でもよ？お前ら、本当どうしたんだよ？さっきまで明るく表情豊かで声音も元気あったのに…。

「…艦長っ、あの異星人の所為で將軍が辛そうですッ。第一種戦闘態勢に移行することを具申します！」 「そのとおりです！」 「アイリス將軍を泣かしたことを後悔させてやりましょう！！」

「そのとおりだなっ。全艦ッ、第一種戦闘態勢に移れ！」

「え？あ、いや、オレの意見『はっ！』……」

……ちょっと傷ついた（泣）。



アイリス率いる艦隊VS不明艦隊^{ガミラス}

我が戦力は25隻、対する相手は100と数隻と4倍以上の戦力を持っている。

アイリス艦隊と不明艦隊は同航戦となる隊形を崩していないが変化があるとするならば両陣営は主砲を向き合っていることだろう。

不明艦隊はアイリス艦隊に降伏勧告を通知したが答えは「馬鹿め」

っだ。その回答にカチンっと頭に來たのか攻撃する不明艦隊。対するアイリス艦隊もお返しだとばかり撃ち返す。

アイリス艦隊が放ったレーザーは敵艦にと正確に当たるが不思議なことに跳弾してしまう（AC721スサナー級を除く）。だがそれは初弾のみで敵艦に集中砲火を浴びせた結果、敵艦の横っ腹^{バラ}を射抜き撃沈していく。

片方は初撃破したことに喜びの声を上げ、片方は撃破されるとは思わず、驚きの声を上げる。

不明艦隊はすぐ様、二つの艦隊に分かれ同航戦から切り替えて挟み撃ちを行う。同時に機動力のある駆逐艦分隊（ガミラス側艦種基準）が魚雷、ミサイルを使った肉薄を行う。

アイリス艦隊は優勢気味ではあるが、それでも数には勝てずまた一隻、また一隻と数を減らしていき最終的にはアイリスが座乗するAC721スサナー級を含めた7隻となっていた。アイリス艦隊はアイリスを中心とした輪陣形に移行する。

不明艦隊は初めこそは敵バリア技術に驚いたものの戦線を離脱、又は撃沈する敵艦隊を見て勝機があると踏んでいた。だが不明艦隊は、いやガミラスは知らなかった。今自分達が相見える艦隊、いや勢力が只の勢力では無いことを……。ガミラスが崇拜する「彼女」が危険視していることを：彼等は知らなかった。

「敵艦隊後方に重力震を確認！…ゲシユムジャンプ反応ですっ！」

くアイリス艦隊と対峙するアンドロメダ銀河派遣方面軍、クリスタ旅団旗艦（ゲルバデス級航宙戦闘母艦《セヴァストポリ》）く
へクリスタ・ファイストSIDEく

「―――准将閣下!?」「―――クリスタ准将閣下!?」

私は何処で間違えた？側近の呼びかけと叫びが聞こえる。指示が欲しいのだろう。

だがどうすればいい?……

「ゲシュタムジャンプした敵艦数……よ、400!尚も増大中?!」

通信兵が叫ぶ。

先程まで、優勢であった我が軍が一気に劣勢へと追い込まれた。

……こんなの、どうすればいいんだ。

第4話

ガミラス艦隊の一つ、クリスタ旅団はこれまで数多の戦場を潜り抜けた猛者だと称する者達だ。拡張では無く事実である。

クリスタ准将率いる艦隊は敵艦隊と交戦。敵艦隊のバリア技術と撃沈されたことには驚かされたものの数的優位、状況は揺るぎないものだだとクリスタ准将を含めたクルー達は勝利を信じて疑わず思った。∴そう思っていた。

「敵艦隊後方に重力震を確認!∴ゲシユムアウト反応ですッ、コレは味方ではありませんッ!!」

ガミラス艦隊眼前(アイリス艦隊後方)にゲシユタムアウトが行われた証たる青い輝く円が現れ、そこから敵の増援艦隊、400隻が現れた。

ゲシユタムアウトした艦艇は先程の旗艦と思われる艦艇と同じ型である。コレはゲルバデス級航宙戦闘母艦の全長400mを超えた500mクラス(スサナー級)艦であった。そんな艦艇が400隻全て同じだということにガミラス側は驚きを隠せないでいた。

「ゲシユタムアウトした敵艦数・・・よ、400!尚も増大中?!」

だが『彼女等』が増援として送った艦はコレだけが無い。次々とこの宙域にゲシユタムアウトして訪れる。極め付けに次々とゲシ

ユタムアウトする艦の総数は、既にクリスタ艦隊の4倍を超え、今なお増大している。

「ゲシユタムアウト更に続くっ…こ、これはッ!…」

管制官からの悲鳴にも似た言葉の直後、敵艦隊の中心に一つの青く輝くワープゲートが展開される。

そこから出てきたのはガミラス最大の戦闘艦『ゼルグート級』と同等の全長を持った700mクラス、『プロテクト級』の姿があった。その周囲を護衛する様にスサナー級12隻がワープアウトする。

(間違い無い。白銀の如く輝くあの艦こそが敵の旗艦ッ本能がそう訴えている。だが恐れることは無いぞクリスタ。つい先程の戦いで敵のバリア技術を剥ぎ取ること(時間は掛かった)が主砲たる陽電子ビームとカノン砲で出来る。だが数的優位は下回ってしまっている。撤退し態勢を…)

クリスタの思考は敵将が発する威嚇的な声が自動翻訳機を通じて艦内に響いたことで終わりを迎える。

『遊びは終わり。さあ…戦いを終わらそう』

その言葉が開戦の合図であるかのようにプロテクト級の四連主砲による砲撃がやってきた。四本の光り輝く緑色の矢が交差するかのように束となりながらクリスタ艦隊最前線に居る左舷前方のクリピテラ級駆逐艦とその後ろに居た『デストリア級重巡洋艦』を射抜き、

片方は爆沈し片方は轟沈した。少しして敵前衛艦隊の一部と敵戦闘機編隊がクリスタ艦隊へと急速接近。

「友軍に救援要請をッ…」

クリスタ艦隊はソレを迎い撃つ、同時に最早自分達だけでは作戦遂行は不可能に近い。そう判断し基地に待機する救援要請をする。
だが……

「クリスタ准将っ、友軍基地への応答が出来ませんッ」

「な、何故だ！奴らから発する妨害電波か？」「分かりませんがこの場にいる艦隊は応答可能のようです」

(それでは意味が…待てよ？それならば…)

「全艦ッ、直ちに反転！現宙域より撤退するッ！」

クリスタはこれ以上は危険と判断し、

「撤退ですと?!。しかしクリスタ准将閣下、それはっ…」

「分かっているっ。だが生きてさえいれば汚名を注ぐ機会はやって来る。復唱はどうした!？」

「は…はっ。全艦、直ちに反転し現宙域を撤退せよ！」

側近であり副官である老佐官ハイドリッヒ大佐が復唱し指示を送る。

(…だがこのまま逃してくれるとは思う程、私はバカでは無い。フフっ、やるしかないか…)

「…ハイドリッヒ」 「…分かっております。准将閣下」

クリスタからの呼びかけに直ぐ答えた彼に、『意図』に気づいた事に流石長く共に居るだけのことがあると思いつながら彼女は苦笑いをした。

「…我が艦隊の戦力は？」

苦笑いと共にクリスタは凜とした佇まいを崩さず険しい顔立ちと なってハイドリッヒ大佐に戦力を確認するよう指示を出した。ハイドリッヒは管制官にその旨を伝える。管制官は直ぐ様、確認し上司であるクリスタとハイドリッヒに報告する。

「…クリスタ旅団105隻の内、35隻が撃沈されました。20隻が中破、大破を受け、大破した内の数隻はその後、爆沈しました。五体満足な艦艇は本艦を含め半数以下です」

報告ご苦労、と労いの言葉を短く伝える。そして通信士に全艦隊に映像通信を繋ぐよう指示を出す。通信士から合図が送られたことを確認してから、クリスタは息を整えてマイクを持って言葉を発す。

「…損傷が激しい艦艇は直ちにゲシュタム・航法に移行。以外の無事な艦艇は殿となって敵を此処で止める。…逃げたいなら今の内だぞ？」

最後に一言、私一人でも戦うっと付け加える。

『…』

沈黙が空間を支配する。沈黙の支配は直ぐに破れた。

『…此方、ファントム雷撃分隊は旗艦と共に殿を努めます』『此方、ガイデロール級セバスです。損傷はありますが戦闘に問題ありません！』『敵に我々の底力を魅せつけてやりましょうよ！？』

「クリスタ准将閣下、彼等もどうやらまだまだ暴れたりないようですか？」

ハイドリッヒ含めた艦橋要員も全員が動かず、「最期まで戦います」とその姿勢で訴えかけた。

呆れたような安心したような声色のハイドリッヒの声に、少し晴れたような顔をしたクリスタは誰もが見惚れる程の顔立ち（笑顔）で命令を下し、最後にこう言った。――ありがとうと。

こうして迫りくる敵艦隊に殿に賛同した47隻が立ち向かった。



へ????艦隊旗艦プロテクト級『シエラ』

アイリス艦隊の救援、増援として駆けつけた人物は、艶が入った黒の長髪に青空のような青い瞳、紅いマントに純白のスカート、純白の軍服は所々金細工が施されており、其れを身に纏う『少女』は司令官席に座り戦況を観察、分析し処理していた。

その時、アイリスから通信が来ていると通信士より報告を受けて通信ホログラムを起動させ、無表情で宝石のように輝くスカイブルの双眸をホログラムへと向けた。

『いや〜増援助かったぜ〜、死ぬかと思った』

「アイリス、は：何故、プロテクト：級に、乗らなかった？：プロテクト、級に：乗っていれば：そんな：思いとは：無縁：だと、いうのに」

『へっ、オレは「次から乗れ」：すまねえ【シエラ】』

シエラは呆れた思いで一杯であった。アレほどオリビアから言われていたのに何故と・・・。同時になるほどとオリビアが念の為と言っていたことが納得した自分が居た。

「：私、は増援として：駆けつけた：けど：もう一つ：としては：任務がある」

シエラは任務内容について話しだす。オリビアより下された司令としては不明艦を少しでも鹵獲すること、出来なければ旗艦の鹵獲

をすること。

『…オレはどうすればいい？』

アイリスは先程とは一変して真面目な態度となった。…口元はピクピクとなっているが。

「…私の艦隊…の、一部を…あげる…それを使って…異星人共…の退路を、絶ってほしい」

『了解だ、じゃあまた後でな』

通信が終える。

「・・・」

シエラは無表情（基本無表情）から一変して怒りに燃えた顔立ちとなって威圧的なオーラを撒き散らす。

「彼処に居るのは…殿を努める…艦隊…損傷した味方を守り、逃した…味方の為に…殿を…務める行為…敬意に値する…でも…荒らし…である奴らは…許さない…まあ…オリビアの指示が優先事項だから…」

シエラは作戦内容を振り返りも兼ねて思い出す。シエラとしては本来であれば不明艦隊（荒らし）全てを砲撃で以って沈め、生存者は「研究対象」とする筈であったが彼女はオリビアからの命令を絶

対優先とした為、旗艦のみでの一回だけの砲撃に留め、その後は自身を引き連れた艦隊と発艦した戦闘機と共に不明艦隊（殿）の航行を阻害することに努め、最終的には不明艦隊を鹵獲する。それがオリビアと共に新たに決めた作戦。

「あ、あのく」

「・・・」「ひっ、ほ、報告であります。シエラ將軍指示により不明艦隊の航行ルートを艦載機による攻撃、艦の砲撃によって遮断、一部を除き航行不能としました。『ドロック級ボーディング・シップ』が殿を努めた不明艦隊全てに取り付きドロック級が持つ4本のスパイクによって装甲に穴を開け、トルーパー達による突入を敢行。現在、白兵戦を行っております！」

シエラから放つオーラに報告したクルーは萎縮してしまうものの己の責務を全うした。

「シエラ將軍、新たに入った報告です。白兵戦は成功。異星人共は降伏したとのことです」

よこから通信士がそう報告をする。

シエラは腕を組んだ後、右手で顎を上品に掴みコレからの事を思考する。少ししてシエラは思考を終え命令を下す。

「…鹵獲は成功…突入した…トルーパーは、艦を操舵する…異星人を…監視、航行困難な異星艦は牽引して…重要人物は…本艦へ収

容、して…その他は、スサナイ級…監房ブロック…収容を」

「了解しました。…命令を伝える、これより――」

こうして、ファーストコンタクト及び戦闘は終わり、帰路へと着くのであった。

第5話

どうやらファーストコンタクトは戦闘に発展したか。当初の戦況では不利ではあったが増援艦隊が間に合ったおかげで勝利は掴めた。不明艦隊と宇宙人の鹵獲成功し現在進行形でデブリと鹵獲艦を同志ユリアと同志達（沢山の私）が研究中。いや本当に宇宙人の艦って感じだな。実際は感じどころでは無いが…。

光学兵装のレーザー主砲は此方よりも上の威力を持つレベルのようだ。記録によるとアークワイズ級、FG300型は全く効かなかったようだ。2点は宇宙人艦へ正確に当たるも跳弾する。逆にスサナー級は相手艦への砲撃した際は跳弾しなかったようで撃沈が出来た。

プロテクト級の場合は余裕に相手を射抜き撃沈、轟沈させることが出来たようだ。∴プロテクト級は元から『エリスⅡドライブ』あるが、スサナー級は兎も角ソレ以下は『エリスⅡドライブ』に改造するか？

同志達（沢山の私）はNPCのことでありWSO世界では性格から見た目等を設定することが出来る。こうして現実となってしまう影響なのか同志達（沢山の私）はすっかり私と変わらなくなっている。そのため、オリジナルである私とそうで無い者（もう一人の私）の見分けが他の同志からつきにくいようであった。∴そうか？

だからまあ念話とかも普通に出来る。試しに全員（私）で同志ア

イリスに向かって声を掛けたが何故か悲鳴を上げた。心配する声掛けをしながら彼女へと走るが悲鳴の音量が増し、悲鳴を上げながら走り去った。謎である。

話は戻るが今回は勝てたものの次は勝てる保証など無い。技術面、軍事力では向こう側が圧倒している可能性がある。

軍事力では現在、造船ドックを増設し加えて先の件により、全ての造船ドックは稼働をフルに速めており、1年後には約3万隻が就役する予定である。同時に全ての艦艇はエリスIIドライブに改装を順次行っている（建造中の艦艇は元からエリスIIドライブ仕様）。

ああ、そうだ。現在就役している艦種を「全ての同志」に公開しておこう。

—————

〃〃就役している艦種一覧〃〃

就役したものは・とし、新たな艦種含む就役予定艦艇は・＋』とする。

- ・ FG300型多用途フリゲートII型（派生含む）
- ・ マーレトランキリタティス級ミサイルフリゲート
- ・ マーレヌビウム級揚陸艦
- ・ レリアット級高速魚雷フリゲート
- ・ ガーディアン級支援駆逐艦（派生含む）
- ・ AC721スサナー級重量級支援型駆逐艦II型（派生含む）
- ・ 『ツンドラ級戦術駆逐艦』
- ・ プロテクト級航宙戦闘艦（艦種は巡洋艦）

- ・セレスター級航宙戦闘空母
- ・『CAS066ミスキ級巡洋艦』
- ・『ミニファースト級巡洋艦』
- ・『エターナルストーム級主力戦艦』
- ・『プロヴィデンス級キャリアー／DESTROYER』
- ・『ルクレハルク級バトルシップ』
- ・『DH全能支援船』

である。此等は全ての機関はエリスードライブとなっている。

無論、製造と平行して新たな艦船の設計は続ける。だって怖いもん。ああ技術面では14年前より行っていたのがつい先日『ハイパーレーンゲート』の建設が完了したところ。

『ハイパーレーン』は星系と銀河間ワイプワイムホールに使用される。これは凄いだ。超空間ネットワークを応用した亜空間回廊への出入り口となる施設。これを使用することにより数万光年という通常のワイプよりもはるかに長距離を跳躍できる。ゲートを使用するためには、跳躍する物体にゲートコントロールシステムを搭載し、システム衛星とリンクする必要がある。

これを東西南北全てに配置。主に天の川銀河方面。確か数は6？いや10？まあ両手で数える程のハイパーレーンゲートが設置されている。見た目はフラフープ（リング状）のようなもので直径は地球の衛星、月と同じくらいである。

だがまだゲートを使ったことは無い為、理論上はそうでも実際は

分からない。テストとして同志（もう一人の私）が直接担当するそうだ。確か『プロヴィデンス級キャリアー』に座乗し僚艦として『ミニファースト級巡洋艦』6隻を連れていった。何方も新たに設計、建造された軍艦であり、此等はバトル・ドロイド達によって運用される。

ちなみにだがこの2点は元々、不明艦隊とのファーストコンタクトより数日前にプロヴィデンス級2隻ミニファースト級8隻の建造が完了し、ファーストコンタクトが起きた当日に投入予定であったのだが、同志が誤って2点に搭載されている自爆装置を起動してしまった為、木っ端微塵の鉄くずとなった。軍艦&艦隊の管理担当である同志テレゼは泣いた。

技術面の話から変わるが我々の本拠地でもあるシダテル級要塞基地に收容所には青い肌を持つ宇宙人達が居る。宇宙人は未知の存在だ。人の形をしているからと言って油断は出来ない。のだが何分と初めての存在。丁重に扱わなければ失礼というもの。

收容所は只の、では無く開放的な收容所である。檻で出来た牢屋なんて無いから某グループホームくらいに広いし沢山あるしレクリエーションルームは勿論のこと、衛生面もしっかりとしている。更に外に居るのではと錯覚するほどの草原も生えた公園に青空が（青空は機械で投影しているが分からないように隠してる）。これにより安定とした生活が出来る訳だ。

そういえば、宇宙人宇宙人と内心で呼んでいたが彼等は『ガミラス』とかいう種族だそうだ。分かった理由としては相手側の翻訳装

置を使ってである。それもコンパクトな大きさで首に付けるタイプの。相手側の助言と同志ステラの研究でも使えなかったら貴重な『ほんやくこんにやく』を食べさせる他なかった。そしてなんと此方の言語は『テロン』とかいう種族と酷似しているとか。

テロン、か。非常に興味深い。行ってみたいものである。ちなみにだがその時、私と同志オリアナが入った際、彼等は同志オリアナを一目見たかと思えば一斉に彼女に向かって敬うように頭を垂れたのは驚いた。本人も何が何だがさっぱりだったとか。

その際：ガミラスの言語は分からなかったのにも関わらず『イスカンドル』という言葉が聞こえた気がするが：人の名前なのか？まあ重要性はあまり無いだろうがその後、言語が分かりある程度打ち解ける関係にはなったのだが同志オリアナに対しては不思議なことに敬語（最上級）である。

色んな意味で調子に乗ったのか同志オリアナは偽名で『ニーシャ・イスカンドル』と名乗った際、ガミラス人達は嗚呼の如く号泣をしていたのは：正直言って恐ろしかった。

さて、ハイパーレーンが成功したら、収容所に居るガミラス人達を返さねば（使命感）。だって大艦隊で報復に来てほしくないから。

だがそうなるに乗せる艦が必要だな。いやソレは彼等が乗ってきたガミラス軍艦で解決か。同行人として同志オリアナも一緒に。同志オリアナを乗せる理由としてはガミラスの情報が欲しいからだ。ソレで相手の脅威度というのが分かるというもの。

此方の軍艦を乗せてもいいが警戒されないか心配だ。…もう一度言うがガミラス軍艦にガミラス人と一緒に乗れば解決!。でもその際、彼女の服装どうしようか…神秘的なドレスを着させるか。いや、此処はプラグスーツを…ああ迷う。まあ彼女を乗せることは決定事項だから迷わないけど…。

誰かが言っていた。迷いがあれば勢いが肝心だと!、そうと決まれば早速…ど、同志オリアナ、丁度良かった実は―――。

第6話

「システム衛星トリリンク開始、間モナク『大マゼラン銀河』方面に続くハイパーレンゲートが開キマス」

「超空間ネットワーク」：それは銀河間航行を行う上で重要な中継システム。超光速航行でも多くの時間を要する銀河間航行を支える宇宙の灯台とも呼ぶこともある。ハイパーレンゲートと我々が呼んでいるアレは使用したことが無い。正確に言うならば数日前に完成したばかりと言うべきか。

「：ゲート開門次第、突入を開始」

「ラジャラジャ」

完成したら正常に使用出来るかテストをする。其れが今回の目的であるが実はもう一つ存在する。：それはガミラス軍人達を返還することだ。ガミラス艦隊との交戦したあの件以降、我々は更なる備えを行っている。理由は簡単だ。：：返還しないと大艦隊で報復してくると思うと後が凄く怖いから。

それと同志オリアナをガミラスに向かわせ情報を収集することも目的に入っている。たしか『ニーシャイスカンドル』で名前を通すんだっただか。イスカンドルってなんだろう？

ゲートが正常に稼働し亜空間へと入り大マゼラン銀河方面（外縁

部）に建設したゲートを超えることが出来たら、テストは成功と見て良いだろう。

とはいえ、未知の世界（銀河）であるし危険は付きもの。ゲートも例外では無い。もしかしたら巨大な生物が居るかもしれない。そう考えると単独で行くことなど出来っこない。そんな時は僚艦を連れて行こう！と現在も一緒にいる『ミニファースト級巡洋艦』6隻が、私が乗る『プロヴィデンス級キャリアー』を守るように囿んでいる。

何方もバトル・ドロイド達によって運用されている。今回はゲートを通る為、体にどんな影響を受けるか分からない為、クローン達では無くこの2点を連れていく。私か？私どころか全同志は問題ないだろう…多分。

「ゲート開門ヲ確認、全艦コレヨリ突入シマス」

さあ、無限の彼方へさあ行こう！。

く数十秒後く

まるで青い海のようにであった。底を知ることなど出来ないまでの深さ？があり上も同様だ。透けて見えそうな海は穏やかであれば綺麗に見えただろう。だが違う。確かに青いし透けそうであるが強風や風、竜巻に雷が鳴り響くのはとても穏やかとは言えないだろう。

亜空間…通常の物理法則が通用しないと仮定されているがこうし

て軍艦が問題なく飛べていることは少なくとも航行は可能なようだ。エリスレーザーは使えるか？試しに砲撃するよう命ずる。…ふむ、砲撃は出来るが何等らかの影響なのかエリスレーザーは途絶えた。…此処が亜空間であることが改めて強く実感させらるな。ああ、イイ♪。

艦は多少、本当に多少揺れる程度に済んでいるのは有り難いがレーダーは想定範囲内というべきだところ、スキャナー等も酷く乱れていてとても使い物にならない。

搭載されたゲートコントローラーは一切の機能障害を起こすことなく行き先を示し続けているのは素晴らしい。

『ゲート接近、衝撃に備えて下さい』

むっ、艦に衝撃が襲っているな。まあ問題無く安定しているが飛行機であれば危ういだろう。

しばらくすると通常空間に見えてきた。少しして、ゲートから白煙と共に私を乗せた艦と護衛艦達が出た。視界いっぱい映るのは、星々の海の輝きであった。背後にはゲートが。…とても綺麗だ。

「イエエエーイ！」 「作戦ハ成功ダー!?」 「星ガ綺麗ダー！」
「ラジャラジャー！」

ああ、素晴らしき人生かな。このような体験はそうそう無いものである。オリジナル同志に感謝である。さて、帰って成功したことを報告をし

なければな。



へクリスタ・ファイストSIDEへ

「問題認められず。システム正常に稼働中」「――、――
―?、准将閣下っ」

はっ、まるで夢から覚めたような感覚だ。…表現が難しい。

「あ、ああ大丈夫だ。ハイドリッヒ」

「しっかりなさってください。間もなく我が家に帰れるのですか
ら」

心配する声掛けをして何処か呆れた声をするハイドリッヒ。

「無論だ、…ハイドリッヒ」「はい…」

「あれは…ゲシュタムの門、か？」

「いえ、違うでしょう…が、形状と見た目、その他の点においても似ているように感じるのは私だけでは無いようです」

私達は捕虜となり二週間経った今日、開放された。過ごした日々は驚きの連続であったが今日もそうなりそうだ。…彼女等が言って

いた「近道がある」という言葉、先導されながら帰路に着く中コレを見つけた今、私達は驚いている。：前方にある彼女等が『ハイパーレンゲート』と呼んでいたものはゲシュタムの門に似ていたのだ！…。

「ツツ！？、前方のゲートより反応がっ」

管制官がそう言った直後、ゲートの何もない虚空を突き破り白煙と共に現れたのは、ガミラス軍最大級の一等航空戦闘艦『ゼルグート級』と同等かソレ以上の大きさの艦艇が姿を現した。艦の形状は自分達と交戦した彼女等が持つ軍艦と違い流線型のものであった。

ソレが中心から現れたと思えばその艦を囲むように6隻が姿を現した。囲むように現れた艦は先程よりか小柄な船体を思わせるがそれでも旗艦と思われる艦艇と共通する部分が見られる。ゲルバデス級を優に超えゼルグート級と同じくらいの全長があるのが容易に分かった。

「ツツ！？…全艦戦闘っ…：…ん？」

私は戦闘配置の合図を送ろうとするが違和感があった。まず攻撃をしてこないこと、もう一つは我々を先導している彼女等『ミドガルド』は攻撃をしていないこと、ゲートを警備していると思われるミドガルド軍の300m級の軍艦数隻は出迎えをしていたからだ。

「ミドガルド軍より通信が来ております」

「受け入れる。…回線を開け」

ノイズが走る、数秒後、ミドガルド少女将校の姿が正面モニターに映し出された。ミドガルドの階級についてはうる覚えではあるが、えくと確か中佐だったか？

改めて思うがその年で佐官とは…若いな。…だ、だが私はまだ負けてないぞ！…誰に言っているんだろうか。

『クリスタ准将、ハイパーレンゲート通行を許可する。…既に聞いていると思うがこの先が大マゼラン銀河である。続けて先導に従いゲートへ入れ』

このゲートはミドガルドが造ったのかそれとも我々のように後から利用しているのか…、もし前者であれば末恐ろしいが後者であることは間違いないだろうが私は何故か後者であることを断じることが出来ない。不思議と前者であるミドガルドが造った可能性を頭に過ってしまふ。

「りよ、了解した。その前に質問が有るのだから…」

『質問？それは今ゲートから出た艦艇のことか？』

「そ、そうだアレは一体…」

『…私には貴女が言うアレに関しては言えるは無いと言っておこ

う。ただ、少なくとも君達の脅威になることは無い。…他には？」

「言えることは無い、か。成程、どこの国軍でも情報統制はされているのか。」

「…質問に答えて頂き感謝する」

『そうか、…ガミラス本土への無事の帰還を祈る』

通信が終える。

フフっ、我々の心配をしてくれるのか。嘘だとしても本心で無いにしても嬉しい限りだな。

「さあ、諸君。我が家に帰ろう」



「そういえば何か大事な事を忘れているような…、そうだ！イスカンダルの御方であるニーシャ様がこの船に乗られているんだっ！。ニーシャ様を忘れてしまうなんて私はなんてことをッ！。ミドガルドよっ。なんで気軽に「連れてって♪」と言えるのだ！、不敬だぞ！！私よりも！？。」

第7話

へオリアナSIDE

「ニーシャ様！」 「ニーシャ様！」 「ニーシャ様！」

「イスカンドル！」 「イスカンドル！」 「イスカンドル！」

心とは裏腹に笑顔で手を振る私。

『ワァァァアッ！』

どうもこんにちは。オリアナと申します。私は今、ガミラスの方々に歓迎を迎えられています。只の、では有りませんねコレ。規模でいうなればバレード、でしょうか？。イスカンドル王族の方に対しての催しなようなのですが…。

…王族どころかイスカンドルの人ではありません。というかイスカンドルって名前では無く国名であったんですね。同時に王族の名字であったのですね。…どうしてこうなったんでしょうか？。いえ、事の発端は自分でも分かりません。

突然ですが私は現実世界でも日課としてトレーニングをしています。それは沢山。体操は勿論、ランニングだったりボクシングだったり。その後は汗を流す為、気持ちをリラックスする為にお風呂に入っています。WSO世界では時々でありましたが同じくやっ

ていました。お風呂とかは流石に気持ちよい？でしたが今は違いますね…。

私達はどういう訳かWSO世界から現実世界に転移？転生？憑依？
：はてなマークがいっぱいですね。でもそうなんです。実際問題、
今も困惑はしています。は、です。

他の方々（同志&親友）はどうかは分かりませんが私は『あちら』
に未練はありません。断言出来ます。

現実世界に戻れたのかは分かりませんが少なくとも五感を感じる
時点で現実であると自分はそう認識しています。これは共通でした
ね。

そんな私はあの時、日課であったトレーニングを終えて温泉に入
っていました。温泉は月の地中で出来たとは思えない程によく出来
ていました。画面越しではあったものの眺めは綺麗でした。夢に出
る程に：後でとある事によって軽く怒りを覚えました。

お風呂から出たら着替える訳ですが脱衣室にて着替え中、オリビ
アさんがやってきました。：正確にはオリビアさん（達）が。

凄かったとしか言えません。いきなりなだれ込んできたんですか
ら。気づけばオリビアさんがいっぱいです。そういえばオリビアさ
んは自分の似姿というかそっくりな姿を創っていましたね。まさか
アレ程とはっと少し現実逃避気味になっていたら衣装を着せられて
気づけばガミラスの軍艦『ゲルバデス級』なるものに乗せられてい

たのです。

おのれ！と思いましたがね。因みに一回だけ念話でお話をしたのですがその時に帰ってきた言葉は「ガミラスに行って情報収集だ同志オリアナ。暇だろう？」ですよ！？。

そんな事を思い出しながら（ブンブンッ）している私は『親衛隊』なるものが脇に整列して並ぶ階段を国旗？を掲げる二人のガミラス人（親衛隊）と共に上っています。その先に『アベルト・デスラー総統』なるものが待っているようです。

：総統、ですか。まあイスカンドルよりかはマシでしょう。いえ100倍マシです。だってアレですよ？今も着ている少々扇情的？な衣装がイスカンドルと同じであるのは驚きはしましたがまずアレです。一つ目、イスカンドルの人口は片手で数える程度。二つ目は『何故』か自分はイスカンドル人で無いと何度も言っているのにも関わらず「そんな訳がありません！」とガミラス女性将校の方が強く言っていて気づけばイスカンドルに出向いてしまい（勿論自分からでは無い）、その後にはイスカンドル女王『スターシャ・イスカンドル』に何故か抱きつかれたこと。そして、三つ目は……何なんですか『アレ』は！？。

いえ、自分が記憶の障害があると行って記憶消失的な事を言ったことの発言をした自分が悪いですがね。でもですよ？イスカンドル女王に地下深く連れられたと思いきや『あんな光景』見たら絶対に逃げたいに決まっているじゃないですか！？。

デスラー総統なるものと対面してパレード？が終わった後、イस्कンダルにてスターシャ女王と一対一での対面&お話？

いやですよ！絶対に嫌ですッ！。あんなの没落帝国でしょ？荒らしでしょ？無理無理です。でも自分には拒否する権利は無いようです（泣）。

改めて何方が良いかいきましょう。ガミラスorイस्कンダル。まずガミラスは青い肌を持つことから一瞬、青○に変わる幻覚を見た気がしないでもないですが怖いですがマシです。イस्कンダル？…ふっ答えは決まっています。…無理♪（恐怖から来る怯え）

ああ皆さん、私は断言しましょう。これが理不尽であると。ああっ、助けてーッ！。

*その後、なんやかんやあって1年後、スターシャを説得？したオリアナは無事、ミドガルドへと帰還出来たのであった。…なんで帰れたんだろう？



へオリーブアSIDEへ

私は今、先日同志オリアナよりやってきた情報を頭の中で整理していた。

ふむふむ成程、ガミラスは大マゼラン銀河内にあるサレザー恒星系の第4惑星に位置する星間国家であり大マゼラン、小マゼランを

統一しその後、統治していると。で我々が名前だと思っていた『イ
スカンダル』は実在していて『スターシャ・イスカンダル』がイス
カンダルを統治。ガミラスとは双子星であると。

やはり情報収集はするものだな。続けて、ん？同土オリアナから
の念話か。

えくと何々………は？

第8話

：同志諸君、我々は深刻とも言える問題が発生している。イスカ
ンダルについてだ。同志オリアナによる情報収集が一通り完了した。
一言で言おう。：何だ『アレ』は!？。

同志オリアナからの情報を元に再現映像を作成したが本当に何だ
アレは?何も無い宇宙空間に青く輝き、緑あふれる惑星が映った。
以降『アルファ』惑星としよう。

大地の上には文明が栄え人々の豊かな様子の後に再びアルファ惑
星が映し出され、反転し何も無い宇宙空間を映しだされると突如と
して極太の青いビームが何本も現れ、直線上にある文明惑星^{アルファ}へ叩き
込み、真っ二つに燃えるような破壊した様子が我々の目に映った。

我々は目を疑った。本当の出来事であるのかを：だが同志オリア
ナは嘘では無く本当にあった出来事であると言った。なんでも同志
オリアナはスターシャ・イスカandal女王に『クリスタル・パレス』
と呼ばれる宮殿直下にある地下空間へと連れられて、コレを目の当
たりにしたという。恐らくは記録関係の類いと思われる。

因みに同志オリアナは記憶喪失を装ったと言っていたがそんなこ
とよりも…。

：マジヤバイ。若い人中心に使うと思われる言葉を言ってしまっ
たが本当にマジヤバイ。え?何?じゃあアンドロメダ銀河にあった

破壊されたと思われる跡の惑星や文明が崩壊したと思われる廃墟と化した惑星もイスカンドルが関与しているともッ！（驚愕を通りこしたレベル）。

——いえ、どうやらイスカンドルは関与していないようです。後、此方の、私達『ミドガルド』の存在には少々ではありませんが未知の技術によって確認した模様です。：少しあり得ないものを見たような顔でしたが。ちなみに何故か私はイスカンドル人判定となっています。

え？やだ怖っ、プライバシーの侵害だ。しかし……本当に？信じられないのだが：（疑い）

——私も同じ気持ちですが本当のようです、オリビアさん。アンドロメダ銀河に関してはスターシャ女王によると『ガトランティス』による仕業では無いか？とのことです。

：ガトランティスも同じくらいヤバいということ？つくづく理不尽な現実世界である。こんな危ない存在が存在しまくっているとしたら地球は大丈夫なのだろうか？！。

——その地球は『ユリーシャ・イスカンドル』なる人物が居るようです。理由は分かりませんが「救済対象」により地球に派遣されたとのことですが…。

救済だと？アレか？自分達に都合が良いように「環境をよくします」と理由で惑星を改造して住みやすいようにするのか？それな

ら幾分マシな気がするがそれでも脅威だし荒らし行為であるが…破壊行為で「サヨナラ♪」だとしたら一大事だぞ!？。

——同感です。引き続き情報を…では無く、、、

え?じゃあ何?…。

——早くイスカンドルから出たいですっ!助けて下さいッ!!。

あ、可笑しいな、電波の調子が悪いようだ。では。

——え?ちよっ、ちよっとま……。念話通信終了。

同志オリアナ。すまない。行こうにも行けないのだよ、我々の戦力は不十分であるし単に怖い。艦隊を向かわせたいが此方よりも上の可能性がある。ガミラス軍の艦隊戦力は未知数だ、恐らく数十万は存在すると思われる。

とはいえ此方から攻撃すると向こうからどんな超兵器がやってくるか分からないから平和的に行かねば意味が無い。最終的には武力で持って解決だが出来ればガミラスとは友好関係を築きたいが一番はイスカンドルである。だって此方に来ないで欲しいので。

というわけで我が戦力の確認であるが全部の艦艇にエリスドライブに換装させている最中であるがアレを見ると防げる自信が無い。しかしどうやらイスカンドルは、かの超兵器は無く艦隊もおらず人口は片手で数える程度しかいないようで女性しかいないようだ

…ステルスで隠しているのか？だとしたら震える他ないが…。現在も開発部、技術部による現在進行形で新たな艦艇を設計している最中。

ちなみにだが、現在就役しているのが、コレだ。

〃〃就役している艦種一覧〃〃

就役したものは・とし、新たな艦種含む就役予定艦艇は・+』とする。

――

- ・FG300型多用途フリゲートII型（派生含む）
- ・マーレトランキリタティス級ミサイルフリゲート
- ・マーレヌビウム級揚陸艦
- ・レリアット級高速魚雷フリゲート
- ・ガーディアン級支援駆逐艦（派生含む）
- ・セレス級軽空母II型
- ・AC721スサナー級重量級支援型駆逐艦II型（派生含む）
- ・『エリスI級駆逐艦（派生含む）』
- ・『ウイングユサール級ミサイル駆逐艦（統合型）』
- ・『クワイアー級狙撃駆逐艦（派生の電磁加速砲も含む）』
- ・『コネマラカオス級電磁加速砲狙撃特化型巡洋艦（派生含む）』
- ・『CASO66級巡洋艦（統合型）』
- ・『KCCPV2・0級軽量級攻撃巡洋艦（派生含む）』
- ・『プロヴィデンス級キャリアー／デストロイヤー』
- ・『ミニファースト級巡洋艦』
- ・プロテクト級航宙戦闘艦（艦種は巡洋艦）

- ・ 『ロジャー級航宙戦闘艦（艦種は戦艦）』
- ・ 『セレスター級航宙戦闘空母』
- ・ 『ルクレハルク級戦艦』
- ・ 『DH全能型支援船』
- ・ 『エターナルストーム級主力戦艦』

――

である。

その他にアンドロメダ銀河に点在する各ハイパーレーンゲートに警備目的として戦隊規模の艦隊を増援として向かわせ当たらせる。ゲート警備に当たらせる予定の戦隊の艦種はミュニファースト級巡洋艦、プロヴィデンス級キャリアー、『ルクレハルク級バトルシップ』の三点であり、どれもがバトルドロイド達によって運用される。

ルクレハルク級はドーナツ状の船体に中央に巨大なボールのようなコアシップを持った3000m級の巨体を持つ艦艇であり、豊富な武装の他に物資等も沢山乗せることが出来る。ただしルクレハルク級は鈍足である為、惑星の封鎖又は警備目的等に使用される。

更にアンドロメダ銀河中全域にハリネズミが如く哨戒艦隊（1セクション）がハリネズミが如く配置し巡回。巡回に当たるのはミュニファースト級巡洋艦この1点。

観測ステーションも増設した。

とはいえ、イスカandalがどれほど此方を見ているか分からない。『秘匿領域』の存在を勘付かないことを祈る他無い。『例のプロジ

エクト』や『例の艦艇』に『例の兵器』も同様である。

なので、なんとかしてでもせめては、我々ミドガルドが今居るこのアンドロメダ銀河内にだけは入られることを阻止しなくては…。

さて、では同志諸君、本日はこれにて。…解散！。

…そして5年後…

なんていう戦力であるか（感激）！コレで脅威に対抗出来るというもの。脅威？そういうえば自分たちが恐れている存在を忘れているような？…まあいいか、では母なる地球よ！今行くぞ！。…あ、そういうえば地球って天の川銀河の何処だったかな？…これでは行けないじゃないかっクソがッ！。

「私もオリビアさんにクソって言いながら殴ってもよいですか？」

*どうやらすっかりイスカンドルについて忘れてしまっているようだ。なおこの後、オリビアさんはオリアナさんから『とある理由』で殴られるとか殴られないとか。

第9話

「…成程」

私は同志（創造主）からお願いをされ、私は文明があったと思われる遺跡を調査していた。遅くなったが現在居る場所を言っておこう。…此処はビーメラ恒星系の第4惑星、ビーメラ4。銀河系外ではあるがより正確にするならば天の川とマゼラン銀河の真ん中あたりである。

緑豊かな惑星であり水は豊富に存在している。有害物質の類は現在も検出されていない。嬉しいことに大気成分は地球とほぼ変わらない為か呼吸の方は楽である。…そういえば宇宙空間でも呼吸可能なヒューマノイド知的生命体がWSO世界には居たな。それどころか生身で楽しそうに宇宙遊泳する存在であったが。

ビーメラ星には昆虫の形をしたヒューマノイドであり二足歩行の知的生命体が住んでいたようだ。ビーメラ星人はどうも蜂のような昆虫から進化した生命体のようで、女性は女王がひとりいるだけであとはみんな男だ。技術的なレベルは数千年前の地球文明程度といったところだろうか。

しかし、経過を見るにビーメラの文明は約330年前に滅んだようだ。現在では遺跡が残るのみとなっているようだが地上建物が見当たらなかった。私が今居る遺跡の内部には死に絶え、ミイラ化した死体が遺跡内に多数横たわっている状態だが、触覚や翅などの身

体的特徴が見て取れた。後、中央に手で容易に掴める程の「謎のコア」が有ったから触った。

罨？ふっ、その程度で驚いてどうする。ああでも無いこうでも無いを手持ちの機械で解析を試みるを繰り返すと光を発しながら目の前でホログラムのように投影された。文字は分からないが見た限りだと超空間ネットワークの概念図のようだな。銀河間航行を行う上で重要な中継システム。：高度な文明であったか。ちよっぴり怖いがもう居ない存在だから安心安心だ。

「しかし：」

その他であるが、なんだろうか？あの黄金に輝く金属の船、はもはや緑の蔦等によって覆われているがアレってイस्कンダルの：だよな？何故此処に：、これ以上はイस्कンダルの事を考えるのは辞めよう。あんなの思い出す度に震えてしまう。まあそれよりも……、

「：船、が」（声の震え）

船が、私の船が数刻前、何故か爆発してしまったのだ。いや事は私にある。いやだって乗ってきたFG300型フリゲートII級がそんな簡単に「ああ」なるとは思わなかったんだ。

後は：アレだ。ザリガニのような鋏を持っていて百足ののような足を持っていて、終いには大きく開けた口からは触手のようなものを自慢げに見せびらかしていたあの生物は破壊力ある怖さであった。いやだって想像して欲しい。B1分隊（50体）と共に森の中で遭

遇し交戦し敗北し逃げ回った時、ふと後ろに振り返ると触手を振る
わせながら口を大きく開けていたんだぞ?!。まさかブラスターが
効かないとは驚いたが『戦術礼装』で事無きを得たのは幸いだった。

さて、どう帰ろうか。誰かがこの星へ補給を目当てに船とかが降
りてこないだろうか。補給するにしてもどうやってであるが。外に
もう一度出てみよう。

〳〵数時間後〳〵

し、静かだ。だがまだ希望を捨ててはならない。きっとやってく
る。そうに違いな…ん?…アレは『戦艦ヤマト』?。ということは
此処は地球?!…のわけがあるかッアレは青空に浮いているんだぞ!
…自分でツッコミをするって虚しいな。

しかし、アレはとても世界大戦の船とは思えない外見…。ともす
ればアレは『宇宙戦艦ヤマト』と称するべきか。

…未来の地球の船、ヤマトか。素晴らしい(感激)。

あ、格納庫?から機が発艦したようだな。見た目はオスプレイの
ような形状であるが何処に向かうのだろうか?まさか遺跡か?それ
はなんと嬉しいことか。遺跡というならば今も持っている"コア"
は戻して置くべきか?なんか頭の中で『戻すのだ、ポッター』っと
囁かれた気がするから戻そう。後、私はポッターでは無い。

さて、同行を探るか。あやもくはヤマトに乗れるか交渉しなければ

ば（使命感）。

くく1時間後くく

遺跡に入ったか。「コア」が目的か？しかし彼等は「化け物」に襲われていたのによく無事だったな。最後見た時は全体の大半が赤で占められたドームのある円柱に手足が生えた形状をしており顔はなく、昆虫のような見た目の「頭部」の3枚のフィンがある側が背中。

頭部を中心にメーターが多数ついているドロイドがパワードスーツで持って彼等を守ったがその後、そのパワードスーツにお姫様だっこのようになっていた女性が化け物に何か視線を向けたと思えば襲わなくなり回れ右したのは何故だ？

あ、出てきた。所々馴染みのある母なる地球の言語『日本語』で話しているのを聞くと表現が難しいが、やはり心から安心する。時々「波動コア」とか言っていたのは気になるが。よし、私も彼等彼女等の前に出るか。

やあ、どうも。

「っ、誰だ!？」「え、可愛い」「……」

そんなに警戒しなくてもいいじゃないか。古代。後、その君大丈夫か？蹲りそうにお腹抱えているけど…。

「…何故、俺の名字を知っている？」

知っているものにも近くで見えて居たし時折呼び合っていたのだから分かる。後、古代、視線が気になるからジロジロみないで欲しい。既に分かっているだろうがこれでも女性なのだ。

「ご、ごめん」「お、お腹がーっ！」「……」

大丈夫だ、慣れている。

「そ、そうなのか？」

ああ、コレは戦術礼装と言ってね。名前の通り、戦う為の礼装だ。見た目に反して高性能なんだぞ？。後、君は大丈夫か？

「それよりもって言ったら失礼に当たるんだが君はどうして此処に？」

それよりもって言うが蹲っているその男は大丈夫なのか？何処か体調でも？

「あ、あぁいや、体調というかなんとか」「そうなんですよっ。平田さんは体調が悪いんですよ！」「…うん、そうだな。平田は体調が悪いんだ」

そうか、涙を流すくらい体調が悪いのか。なら直ぐに上の船、ヤマトに乗るべきでは？

「ヤマトの事まで。君は何処まで知って…っと沢山（意味深）聞きたいが確かにその通りだ」 「古代戦術長、シーガルガ降りテキマス」

上空から少しずつ降りてくる機体、『シーガル』というのか。ああ、そうだ。古代に交渉を掛けよう。

「ん？なんだい？」

実はカクカクジカジカで…、

「な…、それは大変な思いをしたね。一緒に来るか？」

是非も無い、乗らせてくれ。



「…間もなく沖田艦長が参られます。何か御座いましたらお知らせを。…失礼します」

さて、私はこうして、貴賓室に居る。椅子に座ってコーヒを啜りながら。

無事に乗れたようでありながら、少し騒がしかったな。

これから艦長と対面か。緊張するな。

*こうして、沖田艦長と対面した彼女であったがこの後、ヤマトの目的を知った際に「かの所」へ向かうとした彼女は衝撃を受けたとか受けなかったとか…。

第10話

ヤマトはビーメラ4にて保安部によるクーデター（反乱）が発生した。その中には情報長の『新見薫』、航海長の『島大介』が含まれていた。目的はイスカandalへの旅は困難、又信用が出来ないがそうである。

そこで新見薫は補給の為、降り立ったビーメラ4の環境が地球と酷似していると分かり破棄されたイズモ計画発動を試みるが一人では困難を極めると判断し、同志を秘密裏に協力を仰ぐよう要請する。

そのため保安部長『伊東真也』に加担し、航海長島大介を口説き落とした末にてイズモ計画派による艦内クーデターに参加しビーメラ4に降りたち少し経ったところで実行に移した。しかし、所々で計画通りにはいかず、なし崩し的に進めて行ったことが仇となる。

加えて犠牲者を出さないで成功させる事を望んだ彼女とは正反対に、犠牲者を厭わない伊東のやり口に耐えかねて反発する。しかしその時、惑星調査からヤマトに帰投してくる古代進らの処遇を巡って、新見との軋轢がより深刻化に。

犠牲を厭わない伊東に島でさえ「指揮官は俺だ」と反駁されてしまい、それに逆上して射殺しようとするが新見による体当たりで防がれた。

あわや怒り心頭となった伊東は島と新見は射殺されてしまいそう

になるが寸前に同じ保安部の『星名透』が介入して防がれる。「裏切ったのか?!」と星名に問うが本人曰く「いやだなあ、表替えたただけですよ」とのこと。ヤマト艦長『沖田十三』が現場に登場した事でここにクーデターは失敗に終わり、結果的に彼女も営倉送りとなった。

本来ならば反逆罪で即処刑?されているのだが、艦内でのトラブルを穏便に済ませたかった事や、彼女の素質を惜しんだ沖田艦長の寛大な措置でこれだけで済んだと言える。

表替えたと言った星名であるが実は「地球連邦極東行政長官ヤマト本部長」『藤堂平九郎』を直属の上司に持ち、イズモ計画推進派のヤマトクルーを内偵するスパイでありクーデター発生時にはそれを抑える役目を持っていた。

艦橋最上階にある艦長室で（島、古代、副長『真田』、艦長沖田）へ未然に防げることは出来なかったが航海長である島の協力のおかげで流血に至らず收拾出来たとそう告げた。

ビーメラ4の事件はイスカンドル航海日程の遅れの一つであると責任は私にあると島は皆にそう告げるが心配はいらないと副長である真田は返した。

その理由は古代が持ち帰った波動コア又情報であった。それには航海日程の遅れを短縮することが出来るものが記されていた。それは、

「我々は35日の遅れを出しています。…ですがこの『亜空間ゲート』をしよう出来れば、航程を一気に3万年は短縮出来る計算となります」

「亜空間ゲート」である。超空間ネットワークを応用したワームホール亜空間回廊への出入り口となる施設であり使用すると数万光年という通常のワープよりもはるかに長距離を跳躍できる代物である。ゲートを使用するためには、跳躍する物体にゲートコントロールシステムを搭載し、システム衛星とリンクする必要がある。

「ゲートをコントロールするシステム衛星がこの近傍に存在します。これを攻略できるかどうかが鍵となります」

島からの遅れを解決する方法があると示し、真田が代わり作戦室に集う者達に発言した。

一言で片付けると攻略出来るとスイスイ進める高速道路の中の高速道路であろうか？…表現、合ってるかな。

「この波動コア、便宜上『ビーマラコア』と呼称しますが、ビーマラコアにはゲートを造った種族の他にゲートを使用していた管理者とも呼ぶべき種族の存在も記されていました」

「管理者？」

この疑問に沖田は口を開き、真田に問うたが真田は思わせぶりな笑みを覗かせながら視線で沖田達に問うた。口には出していないかっ

「死んでいるように見えるけど…」

「本当にあんななんで何万光年もワープ出来るんですか？」

亜空間ゲートから少し離れた所に到着したヤマトはその全貌を目の当たりにしていた。

「それにしても古代さんは護衛だとしても、副長はなんで森さんまで連れてったのかな？」

「森さんがイスカンドル人だから「違うッ、彼女はそんなんじゃない！」：」「ちょっと耳がキーンとした」「ご、ごめん」

ビーメラ4の反乱後、一部の者達、いや以上の者達は「船務長」「森雪」がイスカンドル人であるのでは無いか？と疑いを持ち始めていたのだ。森雪は階級が一等宙尉であり船務長兼主任リーダー手を務めている者である。切っ掛けはビーメラ4での出来事（反乱）であるがそれだけでは無い。

『ユリーシャ・イスカンドル』を乗せた車が事故またはテロ事件に巻き込まれた影響から直近の1年以前の記憶を失ってしまったということも関係があるのでは？とより強く思っているのだ。南部は森はイスカンドル人ではない、絶対違うと強く反論した。

「そういえば…」 「ん？どうしたんです、太田さん？」

「いや森さんがイस्कन्दル人かどうかは別にしてさ、…噂の宇宙人見た？」

「"彼女"、か」

その言葉を発したと同時にエレベーターの扉が開かれ、一人の人物が艦橋に入る。

『……』

艦橋内は一瞬にして静まり返った。入室した人物を見つめる（バレないように）。その人物は女性で、いや少女であった。腰元まで届く長い純白髪に黄土色を持つ瞳、通った鼻筋に桜色の形の良い唇をし綺麗な肌をする少女。服装はエヴァンゲリオンのプラグスーツに似ているようであった。その上から黒いコートを羽織っている。

それだけならコスプレかと思うが"いかにも"の雰囲気は決定づけた。そしてこの"宇宙人"について脳裏を過る。古代達がビーメラより帰還した際に一緒に居た今此処に居る"彼女"についてであった。

イस्कन्दルやガミラスとは異なる全くの第三勢力。自分達と同じ肌と知能を持っている存在であるがそれでも地球人ではないことから、ガミラスに向けられる敵視、憎しみの視線や感情といったものの程では無いものの、未知の存在であることから大多数の者達が複雑な気持ちを抱かせていた。

そんな注目の的である少女は艦橋から見えるゲートを見ていた。一体何を思い見ていたのか、それは分からない。

そんなこんやで時は経ち、システム衛星に入った真田、古代、森の活躍によりこうして亜空間ゲートのシステムコントロール権を掌握し起動した亜空間ゲートは死んだように眠っていたその巨大なリングは息を吹き返し、そんなこんやで亜空間ゲートを使って大マゼラン銀河に入ったのであった。

第11話

現在、アンドロメダ銀河系外縁部のとある星系、…アルタイル宙域のアルタイルにて宇宙を泳ぐ生物を遠く離れた所より観察している。この生物のフォルムは楕円形の扁平な胴体にタコのような脚を持った宇宙生物である。

先日までは「サナキ」とか「ありのく」といった名称であったが、つい先程、『宇宙アミーバ』と改名したところである。今更であったがWSO世界で似ているようであったから、改名した。

先程までは近くにて観察していたのだが、何故かいきなり攻撃を行ってきたものだから驚いてしまったが、そういえばこの生物はWSO世界と色々と似ていたので攻撃はされないだろうと思ったのが、始まりであったな。

だがこの星系に進入の時は反応も無くただじっとしていたようだったということはその「程度」であれば問題は無かったというか。宇宙アミーバの索敵範囲は分からんがもしWSO世界と同じであると仮定するならば例として地球から火星までの索敵範囲内。…コレって普通にヤバいな。

宇宙アミーバは此方の（艦の）シールドを貫通する力があるようだ。エリスフィールドでも貫通するだろうか？…あ、不貫通。後者は不貫通という結論に。

宇宙アミーバは防御面においてはシールドは無いものの装甲に関しては強力である。

しかしながら、：改めて見るが凄くデカイ。アークワイズ級フリゲートを余裕を超えるくらいの全長を持っているし全幅も大きい。

飼い慣らすことは出来ないだろうか？一体はサヨナラ（意味深）してしまっただから出来ないが多数居ることにはやってみたい気持ちはある。やることに關してだが軍用として使っていきたい。宇宙アミーバにて得られ研究が成功した場合、まだ理論上であるが『船体再生細胞』という技術が手に入るかもだし、成体として成長したアミーバをそのまま軍艦として活躍も出来るかもしれない。

素晴らしい有効活用を思いついたものだ。すぐにでも準備し飼育段階に移行出来るように願う。

さて、引き続きやっていくか。



――

・アンノウンの生物を外縁部より進入を観測ステーションが捉えた。突如として波を打つようにしその場から消えた。おそらくワイプ能力を持つ生物だと思われる。

・未知の文明とのファーストコンタクト発生。

・「同」未知の文明が我が支配領域に侵入し、この宙域にて我が偵察艦及び哨戒艦隊（1セクション）が攻撃ないし撃沈された。そ

の後、近隣の星系への破壊行為。

・アンドロメダ銀河内外縁部に「同」未知の文明の本拠地と思われる惑星を確認。解析した中で判明した唯一の情報は国家名、：デ・ブラン。

・「同」未知の文明（デ・ブラン）より宣戦布告が発生。これより我がミドガルドはデ・ブランを排他主義と断定、同時に戦争状態に移行する。：荒らし許さん慈悲は無い。

――

「それで、状況は？」

ソフィアは自身が乗る軍艦の艦橋へ通じる通路を足早で歩きながら補佐官に起こっていることを質問を投げる。

「はっ、デ・ブランと名乗る国家より宣戦布告を受けており、宣戦布告がされたと同時に我が領域に多数の戦闘艦艇と思しき艦船が確認されました。侵犯してきた領域付近に居る調査船及び非戦闘員はその宙域より隣の宙域にある要塞基地へ避難しました。2個哨戒艦隊セクションがその付近を航行している為、哨戒艦隊は駐留艦隊と合流予定となり防衛に当たります。既に他の方々はこの事態を確認済みです」

「了解したわ。一刻の猶予も許さない状況ね。これより独自の防衛行動を開始する旨を伝えなさい」

そう言ってソフィアは目の前の艦橋に入る扉を開けて入る。

「ソフィア將軍が入ります！」

護衛兵の声と同時に艦橋内で各自やるべきことに集中していたクローン達は立ち上がり敬礼し監督するクローン中將は振る帰り敬礼する。

「各自、自分の仕事に戻りなさい」

ソフィアがそう言った後、クローン達は各自、やるべきことに集中しソフィアは広々とした艦橋の豪華な司令官席にマントを翻して座る。

「ソフィア將軍、全艦発進準備完了しました」

クローン中將がそう報告した。

「ありがとう、…これより我が艦隊は目標時点へ急行する。全艦発進せよッ！。目標、外縁部のインダク宙域へ！！」

プロテクト級航空戦闘艦をより強力にし建造された『ロジャー級航空戦艦』1番艦《ロジャー》が飛翔し、ミドガルドを後にする。

その後を追うのはソフィア旗下の艦艇多数。

そして、某外縁部方面に続くハイパーレンゲートに…ミドガルド艦隊は集結した。艦艇数は、5,000隻にのぼった。

第12話

くくデ・ブラン本星より100と数光年 インダク宙域くく

「清々しいまでの大船団だ：恐らく今後、数十年は見ることは無いだろう」

デ・ブラン帝国ミドガルド侵攻宇宙軍の最高指揮官のバイオス・スウォルト将軍。齢65歳、『侯爵』の称号を持ち数々の死線をくぐり抜けてきた猛将である。

そんな彼が指揮するデ・ブラン帝国宇宙軍は、総兵力10万の将兵を抱え、美しい星々の大海原を、軍船4,000隻を超える大船団で航行していた。

「ミドガルドの艦艇など我が足元にも及ばないのやもしれぬな」

デ・ブラン帝国の艦艇は駆逐艦から戦艦まで全てが大きい。駆逐艦は150mで巡洋艦は駆逐艦の2倍であり戦艦は400mだ。バイオス・スウォルト将軍が座乗する艦艇は全長600mを誇る弩級戦艦である。

無論、艦艇の大きさだけでは無く技術面においても自国より上は出来ないだろうと絶対の信頼がバイオス・スウォルト将軍にはあった。最新技術であるシールド発生装置は当時、試作型の関係の為、極少数のみでの運用であったが10年前より全ての艦艇に搭載され

るようになり、融合炉のアップグレードにより攻撃力は強力となった。

それに加え、光の壁を超えることが出来る全艦艇が持つこのワイプシステムは帝国のさらなる進歩を約束した。

勝利の神は我が帝国にやってくる。バイオスはそう信じて疑わなかった。……先程までは。

「何故だ！？たった100隻しか無いミドガルド艦隊に何故こうも手こずるのだ?!」

「將軍ッ、戦闘不能の艦艇は2割を突破しました！」

そんなことは分かっている！と部下に怒鳴るがそれだけでは目の前で起きる現実が変わらない。

どうなしてこうなっている、とバイオスは起きている現実から目を逸したいと強く願いたいくらいだ。

数は100と少ないが其れ等の多くは250〜300m級だが、その内の三分の一がデ・ブラン帝国では大型艦に分類されるだろう。

三分の一はミドガルドバイオス將軍が座乗する弩級戦艦に匹敵する程であった。砲塔の数は船体に釣り合わないがそれでもデ・ブラン帝国より上の光学兵装が使われている。防御兵装においてもシールドが使われており帝国の先を行く技術であるとバイオスは悔しさを胸に抱き

ながら見抜いていた。

「陣形を立て直すッ。戦艦を前へ、巡洋艦は左右より2方向で叩く！。ただちに：「バイオス將軍！」今度は何だッ？！」

このままではまずいっと考えたバイオス將軍は陣形を立て直すとうとするが通信士より掛けられ、バイオスは振り返る。

通信士は震えながらバイオスに静かに報告する。

「巨大な重力破を確認。…来ます」

バイオスがメインパネル（全面）に振り向くと同時に現在もなお、交えている艦影かんえいと見たことの無い艦影の、大艦隊が敵艦隊ミドガルド後方にワープアウトした。

多くが300m級と600〜700m級だが、その内の6隻は帝国の基準では超大型に分類される程のサイズを持っていた。

4隻は1000m級の艦であり、更に一隻だけ現在のデ・ブランからすれば「あの艦艇」と同等の巨大な艦であった。

全長1200mを誇るその艦と円柱型のフォルムをする戦艦で2000mの長大な棒のような形状をしている艦艇は明らかに敵艦隊ミドガルドの旗艦と総旗艦であることを誰もがそう理解する。

「ワ、ワープアウトした艦艇数は……3000を、確認」

全身の毛穴という毛穴に全てが栗立つ恐怖を感じながらバイオスは心中で絶叫せずにはいらなかった。

バイオスは状況を理解することが出来なかった。敵艦隊後方に現れたミドガルド（増援）艦隊の放った砲撃により、次々と我が味方艦艇が立て続けに撃沈された。別格なのは円柱形のフォルムをする総旗艦だ。どの艦隊よりも前方に居たサーリク率いる分艦隊600隻は陣形もままならず、その圧倒的破壊力を持つ緑色をした輝く光線に飲み込まれていき、ミドガルド総旗艦だけの砲撃で60隻以上の艦隊が光の渦へと消し去られ、次にはミドガルド総旗艦を除いた艦隊の攻撃により500隻以上が撃沈ないし轟沈した。

ミドガルド艦隊特有の動力機関「エリスドライブ」が繰り出すその莫大なエネルギーは、総旗艦である（エターナルストーム級）の2000mにも及ぶ粒子励起装置と加速装置により数倍に膨れ上がり、サーリク分艦隊を一挙に飲み込んでいく。それはもはや砲撃の域を超えており宇宙の一角に新たな太陽が出現したようでもあった。

あまりの急展開と一方的で絶望的な暴力にバイオスは口を開けたまま固まることしか出来なかった。サーリク分艦隊からの救援要請と側近の呼びかけにより、すぐに我に帰ったバイオスは指令を下した。

（ミドガルドの戦力は我らの下回ることは無い。上であったことが今分かった。情報部はダミーを掴まれたようだ。：撤退など許される筈もない。そして、あってはならないことだが事実を報告する

必要であると嫌でもそう直感が伝わってくる)

「こちらミドガルド侵攻軍艦隊将軍バイオス。進撃中に艦隊による攻撃を受けた。敵艦隊数は3000。我が侵攻軍は被害甚大であり既に壊滅状態。」

これより残存艦隊で現宙域より戦略的後退をしつつ、敵艦隊を迎え撃つ。本国からの増援を強く要請ー」

「バイオス将軍！「なんだ?!人が話している時に…」本国より増援です!。数は1隻ですが「アレ」がやって来ました!？」

(なんだと!?)

通信士からの報告と同時にデ・ブラン艦隊後方にワイプアウトとした艦艇が現れた。何処か生物的な見た目をし、緑と白、一部黄色で構成されたコレはデ・ブランの艦艇に共通するものであった。

全長1200mを誇るその艦はデ・ブランでは2隻しか存在しないものである。表面を見るに数え切れぬ程大量の武装を搭載し、装甲、シールドは遥かに上を行く超弩級戦艦である。そして、艦首部分が大きく空いているのは『切り札』を搭載しているからであった。

…そしてその艦首の大砲口に赤黒い光が蓄積され始めた。それはどんだん大砲口内を満たしていき、溢れんばかりの光となり球体のように集約していく。

人によっては美しく見えるそれは、ミドガルド艦隊を捉えた。

「デ・ブラン砲、発射アアア!!」

砲口で湧き立つ光が急速に広がり、一気に収束したかと思うと、勢い良く極太のエネルギーの束を放出し無理やり1本に束ねられたエネルギーは目標に向かって突き進んでいき、周囲に放電を起こしながら進み続け、ミドガルド前衛艦隊を飲み込み、やがては全てを飲み込んだ。

「……………」

そして、

「やったぞー!?!?」「どうだ思い知ったか!!」「デ・ブラン帝国バンザイ!!!」

デ・ブランの旗艦のクルーは喜びの声をあげ、皆抱き合い、喜びを分かち合った。

だがその中で同じく喜びの声をあげていたバイオスだが、ふと彼の背筋には冷たい汗が降りていた。

(デ・ブラン砲を放った際、ふとミドガルド総旗艦を中心として薄緑のリングのようなものがミドガルド艦隊を覆うように展開されたような……ま、まさか……)

そして、バイオスの考えは的中することとなる。

「ミドガルド艦隊は…健在です」

「……………は？」

バイオスの視界が眩む。副官と側近の声が遠く聞こえる程、思考が停止していた。ようやく得た満足度を瞬時に粉碎したのだ。

もうどうやっても敵う相手ではない。とバイオスは思った。

「し、將軍！どうしますか!？」

「……………だ。」

「え？」

「撤退だ…全軍撤退。全艦隊通信で残っている船にそう伝えるのだ」

「ま、まだ軍船は残っております！それに、そんな事をすれば!？」

「わかっておる…十中八九私は殺される。だが『私だけだ』。お前達は助かるから安心しろ」

「將軍……………」

そうして、バイオス率いる5000隻。この戦いで1000隻あまりとなったデ・ブラン艦隊は、微量の赤い粒子を放出しながらインダク宙域からの撤退を開始した。



《ミドガルド艦隊総旗艦エターナルストーム級》（オリビア"達"
SIDE）

ミドガルド前衛艦隊800隻は鉄くずないし消滅したか。単艦のみで艦隊全体を重力防御フィールドで覆うことは無理があったか。『リンクIIエリスフィールド』であれば防げたのかもしれないな。…しかしあのデ・ブラン1200m級から放たれたアレは…、

「余剰次元の爆縮を検知、か…これはどうみる同志（もう一人の私）」

「ああ、同志（もう一人の私）この波長。…これは似ているな。」

「ああ…間違い無い」

それも星を一撃で持って死に至らす兵器。これはヤマトがバラン星を惑星崩壊に至らせたもの。かつてイスカンダルは波動エネルギーを兵器に転用していた。…名を、

「「波動砲だ」」

……ヤバイよな？

「このことは…」

「既に同志（創造主）にも伝わっている」

今更で唐突だがこの艦の全てが同じ容姿をしている乗組員。なのでオリビアが沢山居る。

「しかし、ヤマトに乗っている同志（もう一人の私）は大丈夫だろうか？」

「大マゼランにいる同志か。問題は無いだろう、先の戦いでデ・ブランの戦力は大幅に削れた。しかし今更であるが疑問だ。そもそも今まで奴等を何故見つけることは出来なかった？あらかた調査の方と索敵はしたつもりであったのだが…」

「とにかくデ・ブランは潰す。これは決定事項だ…では」

「これより一部艦隊を除き、デ・ブラン本星に向かい包囲する。…もっとも既にその任務に当たる艦隊は間もなく到着予定だが」

「そして、ヤマトに乗っている同志へ迎えを送る。1000隻の艦隊で向かわせよう。元々デ・ブラン方面の外縁部にてこの1000

0 隻を含めて合計5000隻が集結していたんだ。その内の1000隻が今、抜けても戦況は揺るぎないし問題は無いだろう…同志よろしく頼む」

任された。さあ、待っている。同志よ、今迎えに行くからな。

第13話

ヤマトはガミラスからの和解により、スムーズにコスモリバー受領を終えて帰還の途。そんな最中だった。

主要艦橋員達はこれまでの事を、走馬灯のように頭を過ぎっていた。

ガミラス冥王星基地の破壊はもう二度と流星爆弾は地球に降ってこないこと。ガミラス機械兵^{ガミロイド}の捕獲。

ワープ時に起きた異次元断層の際にガミラス人が青い肌を除いて地球人類と同じであること。ビーメラ4での反乱と未確認の宇宙人、自らをオリビア・ミドガルドと名乗る少女。

コスモリバー受領。亜空間ゲート内でデスラー総統と名乗る人物との一騎討ち。ガトランティス遠征軍との遭遇戦に『ジレル人の末裔の巫女に、『アケイリアス文明』惑星（星の方舟）シャンブロウ。

良くも悪くもあったがそれは、皆の思い出の1ページを飾ることは言うまでも無いだろう。それを主要艦橋員、いや全てのヤマトクルーは、形はなんであれそう共通し自覚していた。

「真田副長っ、前方に重力場の歪みを確認しましたッ、距離2光秒ッ。これは…ワープアウト反応ですッ！。ガミラス、ガトランティスではない!?」

リーダー等より強力な重力波が検知された。それを船務科の船務

士である『西条未来』は現在、この場の最高指揮官である真田に緊張した声音でそう報告した。

黒髪のロングヘアを背中の真ん中あたりまで伸ばし、頭にカチューシャを付ける特徴を持った女性、西条未来は船務長である森雪の交代要員として百合亜と共に電測等を担当している。

その報告の直後、第一種戦闘配置が発令され、艦内は一気に慌ただしくなり始める。

それと同時に多数の青く輝くワイプゲートが展開された。

そこから出てきたのは多数の戦闘艦艇。

「スクリーンに出せ」

スクリーンにて確認するヤマト主要クルー達。

未確認艦隊の見た目としては全ての艦艇共通することなのか立方体であり箱型に近い形状をしており、何処か「もしかしたら別世界の地球軍に出てきそうだな」という感想をヤマト艦橋クルー達は不思議と違和感（普通なら感じるかも）無く受け入れていることを感じ取っていた。

スクリーンに映った艦隊規模に皆、中性子星カレルでの戦いを思い出させたが真田は落ち着きを持って指示を出した。真田が言い放った後、スクリーンに映る艦隊の望遠映像には、白色を基調とした

輝く船体の巨大な戦艦が構えていた。

「未確認艦隊数ハ1000隻ヲ確認。ソノ内ノ推定全長750m、数ハ一隻デスガ、コノ大型戦艦ハ未確認艦隊ノ旗艦と思ラレマス」

出てきたのは多数の全長250mの艦艇。そして未確認艦隊中央に30隻の全長600mの艦艇とガミラス軍ゼルグート級に匹敵する全長750mである艦艇が一隻をヤマトは確認した。

「副長！指揮官から呼びかけています！、映像通信です。受け入れますか?!」

「ファーストコンタクト……」

ヤマトは、現在遭遇しているこの宇宙人の姿を知らない。

つまりこれは事実上、初めての接触だ。

「応じよう。…スクリーンに回せ」

緊張が走る中、未確認艦隊の旗艦からの映像通信が入った。

固唾を飲み、皆の視線がスクリーンに注目する中、スクリーンにノイズが走り映し出される。その宇宙人の姿を見て、またしても艦橋クルーは決して軽くなく、そしてかつて以上の無い衝撃を覚えた。

何故ならば映像に映し出されている人物はこの場に居る人物、オ

リビアと瓜二つであったからだ。違う点を挙げるならば第二次世界大戦時の旧日本軍のような白い軍服を着ていて、肩から赤いマントが着ていることだろう。

階級章の派手さや飾緒、肩章の色から恐らくこの場にいる彼女も共に高級士官であることは容易に察せられた。

『…私はこの艦隊を率いる者、名はオリビア。階級は上級大将。…指揮官と話したい』

「本艦の副長、真田です。…要件を聞いてもよろしいですか？」

『ストレート！？』と恐らく、いや恐らくでは無く真田を除くヤマト艦橋クルー達は思っていることだろう。

『話は、簡単だ。今そこに同志を…それでは分からないか（小声）。私は、そこに居るもう一人の私を迎えに呼び、連れ帰るよう命令を授かっている。それともう一つ、既に聞いているかもしれないが地球と同盟を結びたい…もし断れば』

「副長ッ、未確認…いやミドガルド前衛艦隊と思しき艦隊の内100隻近づく！。速度7sノット！！」

『手段は厭わない。…分かってくれるな？。…なんか大変な事に（小声の小声）』

西条は緊張とかつ少しの怯えが入った声音でそう報告した。無理も無いだろう。威嚇かもしれないとはいえ、その艦隊行動はもしか

すると攻撃されるかもしれない。それにより緊張の頂点に達しようとしており、西条を含めたヤマト艦橋クルーがそう思うのも仕方が無いとも言えた。

「お待ち下さい」

少し重く響く声が艦橋に伝わった。

艦橋に現れたのは沖田艦長だ。艦長帽から鋭い目が覗き、どんな状況でも冷静に物事を見る慧眼が光っていた。

ヤマトに接近中であったミドガルド艦艇100隻は待機命令を下されたのか、速度が急速に落ち、やがてはその場に停止した。

「…承服しましょう、ただし、同盟に関しては私一存で決めることは出来ません。持ち帰っての話とはなりますが我々は現在、航海の途中なのです。事を構える意思は有りません。…そこは御理解下さいますせんか？」

『…』

映像越しに映る「オリビア」からは、直ぐに返答が無かった。その間が、非情に重く感じた。

無言の圧力を加える映像越しのオリビアを前にしても尚折れない鋼のように敢然と立つ沖田の佇まいは、この場に居る艦橋クルー達にとって確かな勇気と信頼となって映ったことだろう。

『…そうか、了解した。ではまず――』

こうして友好的？な通信の後、ヤマトに居たオリビアをミドガルド艦隊へ返還した後、彼女等はワープアウトし沖田達は地球に向けて帰還の途に戻ったのであった。

第14話

なんか呆気なかった出来事であったな。デ・ブラン帝国との戦いは…。

我が領域内へ進撃していた5000隻の艦艇の報告を聞いた時は、驚きを隠せなかった。まさか我がミドガルド軍の最大規模である「アルマダ」艦隊に匹敵する艦艇数だとは…。

進撃してきているデ・ブラン艦隊を同志ソフィアと同志（オリビアのNPC：実質、私の分身）達が対処し、デ・ブラン帝国の本星を最新艦艇である巡洋艦CAS066ミスキ級100隻、戦艦エターナルストーム級80隻、その他の揚陸艦等で本星を攻略。

何方も数は多かったが技術は我がミドガルドの方が上であると安心しかけたが、やはり油断ならない世界である。まさかイスカンダル文明が誇る波動兵器：波動砲と同じ原理である兵器がアチラに有るとは想定外であった為か、この現実世界で初めて、敗北しそうになった瞬間であった。

あの波動砲は艦隊規模で惑星を木っ端微塵にしてしまう代物なのだから。単艦ですら惑星を木っ端微塵とまではいかなくとも、惑星を破壊出来るのは恐ろしいことだ。

イスカンダルの戦闘艦は現在、無い為、分からないことが多いがコンパクトな艦艇であることは予想は出来る。

話は戻るが、同志ソフィアと会敵したデ・ブラン艦隊はなんとか撃退した。デ・ブラン帝国本星攻略を担当する同志によると守備艦隊と思われる約3000隻に波動砲と同じ兵器、1隻が確認しコレと交戦したが結果は勝利したとのこと。

艦隊戦の際、同志が乗っていたエターナルストーム級に急接近され、超近距離で一方的な砲撃戦がやってきたのはビックリものだったようだが人型起動兵器『オートマトン』のおかげで窮地を脱つすることに成功。

エターナルストーム級は圧倒的な砲撃力、シールドを保持しているが側面や後部には、正面に有るエーテルレーザーは届かない為、近距離用の対空レーザーを多数と先のオートマトンで補っている。急接近を受けて同志は「補うものを装備していてよかった」と言っていた。

そんなこんなでデ・ブランからの降伏通知が着たと同時に戦争は終了し、デ・ブランは我がミドガルドの属国となり管理下となった。排他主義から降伏通知がやってくるのは初めてだな、いやしかし：
：我がミドガルドは国では無くて「ギルド」というか組織のようなものだから「ミドガルド国」と言われても、なあ。

翌日、此方側より「二度とケンカ売るな」を主に申し込み、その後日、コレとその他が締結。でも、またケンカ売ってきそうだから、今度、脅しとしてデ・ブラン帝国本星の近隣惑星に原始惑星を破壊するとうしようか。

無人だし破壊されたとしても影響は無いようだからな。

後はデ・ブラン本星に封鎖兼威圧を目的として1個戦隊を当たらせる。編成内容はルクレハルク級とロジャー級だ。許可なく本星より出たら撃沈と乗っているデ・ブラン人を研究対象にする旨を伝えるか。

試したいな。いやしかし、一般人や軍人達をするのは駄目だな。研究対象か、罪が凄くい重い罪人中心であれば問題は無いだろう。ちなみに研究内容の一つは「人体の隅々を調べること」だ。

しかし、デ・ブラン政府：何故、顔面蒼白だったんだ？中には震える者も居たが：そうか、罪人が自国より消えることに歓喜していたのか！？分かりみだ。：多分。

今更だがアウターリム（外縁部）に少数ではあるものの国が存在しているとは：。イスカンドル女王スターシャは嘘を言ったな！：
：其れを言うなら我々もか。

ちなみに少数とは言ったが惑星国家数十、星間国家が一つ存在することを我々は把握した。デ・ブランは星間国家。デ・ブランなんと以前まで共和国であったようでその影響もあって全ての惑星国家はデ・ブラン帝国の加盟国のようなのだ。：反乱起きないよな？

後はなんだっか。：そうだ、ヤマト：地球の件についてだ。まさかガミラスから攻撃を受けた挙げ句に地球そのものが流星爆弾、隕

石をそのまま兵器として転用し、青かった地球は赤くなっていたと聞いた時は、憤りの感情が湧き上がってきた。

海は枯れ、都市は破壊と荒廃、正体不明の有害植物達による大気の汚染。人類は地下奥深くにある地下都市に追いやれるように避難したが汚染は地下都市までも進出し始め、人類絶滅は一年となろうとしていた、ところをイスカンドル女王、スターシャによって波動エンジンを技術供与した。そんな中、地球は恒星間航行可能な宇宙戦艦「ヤマト」を完成させる。

そして、イスカンドルに存在する汚染浄化システム「コスモリバーシステム」を受け取るため、旅を出た。そしてその旅は無事に終わり、ヤマトは地球と人類を救い、青い星へと戻った。

…やはりあの時に居たガミラス人を研究対象にするべきであったか？一瞬ガミラスのことを「サヨナラ♪」（意味深）と色んな意味で思っていたが地球は救われたから、まあ見逃そう。

地球とガミラスは正式に休戦協定を結んだようだ。それと同盟を結んだ。同盟といたら我々ミドガルドもその一員に加わった。大使館を設立し、同志イザベラが大使となり、現場へと赴いた。

本当なら地球へと帰り咲きたいが残念ながら私達はもう「ミドガルド」の人間と認識されている。いくら地球人と同じ姿形でも地球から見たら「宇宙人」なのだ。戦争の傷は簡単に消えないということだろうか？ガミラスに対する憎悪の視線は未だに残っている。ふっガミラスよ、因果応報だな。

クソく、帰れないのは辛い。地球に行き来出来ることを考えれば、よし！っとする。地球の事を考えると心配になった来たな。また侵略者とかがやってくるかどうかどうする！。駐留艦隊を地球へ派遣しなければ！その後、必要であれば追加で送ろう。

さあ、母なる故郷、地球よ！今度は我々が守ろう！！

デ・ブラン「我々はミドガルドを未来永劫、恐怖するだろう」

デ・ブラン帝国は内戦の時を得て、数百年前に統一された。経済をより円滑となって国を回せ、数十年前には宇宙へと足を踏み出し、自らが住まう恒星系をも行き来が容易に出来るようになる技術力を生み出す程までに成長した。

しかしと言うべきか人間はそれだけでは満足などしなかった。むしろ、この銀河系は我々デ・ブラン帝国が相応しいとすら絶対的な確信を持った思いを、誰もが形はなんであれ認識していた。

だがそれはもはや過去の物となった。何故ならば帝国は属国となったからだ。それも侵略対象であるミドガルドに、だ。

瞬く間に侵攻艦隊は敗走に追い込まれ、半数を失った。帝国最強の矛と名高い超兵器を搭載した艦艇1隻も含まれていたに、だ。

政府首脳陣は直様、会議を開いた。

首脳陣の殆どは「帝国が負ける訳ない」や「通信妨害のせいだ、未だ侵攻艦隊は健在だ」であった。長い時間を費やした会議の結論は一先ず決まり、本国防衛艦隊を再編し集結させ、本星を背とし布陣した。

本国防衛艦隊の戦闘艦艇はどれもが500m級クラスで占められており、その中の1隻は帝国最強の矛と名高い超兵器を搭載してい

る。

いくらミドガルドが高性能な艦艇があるとはいえ、我が帝国に及ばない。仮に侵攻艦隊が破れたにせよ、ミドガルドだって深い傷を負っているはずだ。それが政府首脳陣が出した結論であり共通認識だった。

だがそれは間違いであった。

我々は目を疑った。

本星宙域にワイプアウトしたミドガルド艦隊の数は多く無い。本国防衛艦隊3000に対し、相手は2000だった。200隻なら余裕だぜっと語った将兵は居る。かくいう私もそうだったし笑っていた。だがそんな我々は、ミドガルドとの絶対的な力の差を思い知らされた。

本国防衛艦隊は瞬く間に壊滅した。ミドガルド軍の円柱型のフォームをする戦艦である2000mにも及ぶであろう長大な棒のような形状をしている艦は別格だった。たった1回の砲撃で本国防衛艦隊の一部、50隻が緑色の巨大な砲撃に飲み込まれるように消滅した。

それはもはや砲撃の域を超えており宇宙の一角に新たな太陽が出現したようでもあった。

そんな絶対的な暴力の化身ともいえる存在が120隻も居た。数

分が経った頃には本国防衛艦隊は半数を失った。ミドガルドはシールドすら強力すぎた。ミドガルドの戦艦（デ・ブラン帝国は知らないが名称、エターナルストーム級）は数十隻単位の砲撃を1隻に対して、集中して繰り出したのにも関わらず効果は無かった。

ミドガルド艦隊纏めて、消し飛ばす為に超兵器であり最新でもあるデ・ブラン砲すら使用したのにも関わらず余裕に耐えたのだ。どんな方法で防御したのか分からないが赤いリングのようなものが前面に押し出されていた気がする。

本国防衛艦隊は壊滅した。

そしてその日、デ・ブラン帝国はミドガルドに対して、無条件降伏をしたと同時にミドガルドの管理下に置かれた。

だが停戦協定が締結されたとはいえ、当初は抵抗を試みなかったわけではない。隙を見て、あるいは真正面から、ミドガルドの支配を破ろうと抵抗したのだ。

しかし、その試みは全く成功しなかった。

全力で抗ったにも関わらず、いとも容易く、無力化していった。治安は皮肉にもミドガルドの管理下に置かれてから、少しずつではあるものの治安は良くなるようになった。だがそれでも街は、都市に住まう人々の空気は重かった…。

封鎖するかのように巨大な艦艇36隻が星を囲うようにして、衛

星軌道上に駐留。本星にはミドガルド兵、不気味ともいえる存在のバトル・ドロイドに監視ドローンによって巡回されている。…まるで星から出ることは認めないと言っているように。

それは当然の起結というべきか、デモ、反乱運動が始まった。デ・ブラン人全てとはいわないものの貧困層、中間層、富裕層は一丸となってその一員となっていた。

だがその反乱運動は直様、終わりを迎えることになる。

全ての放送機関、家庭にある中継機器がミドガルドによってジャックされ、一つの映像が映し出される。放送機関は前触れも無く、ジャックされたことに衝撃を受けた同時に現場では混乱が生じていた。政府も同様に。

一体何が始まるのか、と人々は画面を食い込むように見つめる。

映像には星の大海の中を浮かんでいる緑あふれる惑星が映し出された。……そこは以前、死刑囚等をミドガルドに任せた囚人惑星。何故このような映像をジャックしてまで見せる意図が人々には分かっていなかった。

衛星軌道上にミドガルドの戦艦（デ・ブラン帝国は知らないが名称、エターナルストーム級Ⅱ型）5隻がその宙域にワイプアウトした。

刹那、輝く緑色の粒子がミドガルド各戦艦の艦首に集まりそして、

光の柱ともいえる砲撃が、囚人惑星を襲った。その砲撃は一直線に惑星へと降り注ぎ……数十秒、いや数秒にも満たない内に美しい緑の星を吹き飛ばしたのだ。

そして、囚人惑星は悲鳴を上げて、白い炎と光を撒き散らしながら宇宙の屑と化した。

——あ、ああ……！

——なん、だよ、コレ……？！

——アレが、もし、私達に向けられたら……ッ！！

映像が切り替わり、宇宙をバックに一体の人型が映し出された。

それは人間だった。腰元まで届きそうな銀髪をし、黄土色の瞳をする少女。この世のものとは思えないほどの美しさであった。

しかしその瞳は彼女の纏う全てが美しく輝いているにも関わらず、その瞳だけが氷の如き冷たさを放っていた。その冷たさは相手を嫌悪するが故のものではない。ただただ、ひたすらに無感情で機械的。人形のような瞳。

あれほど恐ろしい眼差しを、私は今でも見た事がない。家畜を……いや、もっと矮小な、意識の片隅にすら残らない何かを見るような冷たさだ。

ぷるっとした桜色の唇が蠢き、言葉を紡ぐ。鈴の鳴るような、し

かし冷たく感情を感じさせない声音が放送を通じてやってくる。

『見ての通り、我々ミドガルドは惑星を破壊出来る武力を持っている。だがコレはほんの一端に過ぎない。しかし我々はあくまで、平和を望んでいるがしかし、我々に武力を行使する存在には容赦はしない。武力による交渉はお前達デ・ブラン帝国にとっても不都合な未来だ。それ故、我々はただ一つ、コレを求める』

——我々ミドガルドに対して武力干渉をしない事だ。

私は、恐ろしい。心の底から、ミドガルドが恐ろしいのだ。

きっと自分達が住まうデ・ブラン本星は文字通りの監獄と化したことだろう。ミドガルドは証明してみせたのだ。だから私は後世にこう語りたい「我々はミドガルドを未来永劫、恐怖するだろう。…だがそれでも、諦めるな」っと。

級軽空母改、マーレトランキリタティス級ミサイルフリゲート、FG300型フリゲートⅡ級、FG300型装甲フリゲートⅡ級で構成されている。

フリゲートとはいえ、地球、ガミラス基準から見てもミドガルドのフリゲートは巡洋艦サイズの大きさだ。ちなみに唐突であるが地球復興NOW!の最中にミドガルド大使が砲艦来防してきたのは此処だけの話…。

地球防衛軍特別混成艦隊はガミラス、ミドガルドと合流したことで地球、ガミラス、ミドガルド連合艦隊となったのだ!熱い、コレは熱い!!

*落ち着いてね?(ニッコリ)

…はい。

連合艦隊が向かう先には、小惑星帯に鎮座する扁平な形に潰れたガス惑星と、それを取り巻くガトランティス機動艦隊の姿があった。

今更ですが、このミドガルド艦隊を率いている者、オリビアです。宜しく。私はミドガルド艦隊旗艦であるツンドラ級『エシャレット』の艦橋に居るぞ。

「閣下、たった今、地球より映像通信が。我がミドガルド艦隊だけでは無く、地球、ガミラス…ガトランティスを除いて全ての艦艇にです」

士気を上げる為もそうだが、作戦内容の確認の意味合いもあるのだろう。気になるな。よし、全艦隊、回線を開け。

「はっ」

ノイズと共に中央スクリーンに一人の男が映し出される。彼は、芹沢虎鉄か。

『――。奴等がこの浮遊大陸を占拠して既に60日……。基地要員の救出はガミラス側も諦めかけていたが、ミドガルド特殊部隊によって救出作戦は成功した』

ああ、クローンコマンドー+コマンドーバトルドロイド部隊が救出作戦に赴いたことか。いやアレを赴いたと表現して良いのか分からない。

：地球には、特にガミラスには内緒でバレないようにこっそり施設内で実戦訓練していたのだが、まさかガトランティスによって既に占拠されているとは思わなかったな。というかそのままの場の流れで、気づいたら救出して一緒に脱出……。

いや、無事に脱出が出来てよかった。ガトランティス艦隊がその時、もの凄い数少なかったとはいえ、危なかったな。助かってよかったな。基地要員達よ……。

『攻撃目標、ガトランティス艦隊及び八番浮遊大陸基地。：浮遊大陸の奪還の栄誉は我々地球艦隊に託された。ガミラス、ミドガル

ド軍は先鋒として突撃。後に我々が内漏らした艦隊を各個、撃破する」

任したぞ、地球艦隊よ…。

しかし、あの装甲突入型のゼルグート…。漆黒の塗装と白の線で描かれた不思議な紋様のコントラストを纏った模様…異彩を放っていて畏怖の念を抱くな。

それにこの戦術歩兵のような陣形、いや隊形？明らかに時代遅れ過ぎないか？？まあ従うが。

「敵味方信号の再確認を完了」

「データリンク開始。各艦はグリッドの表示位置に注意せよ」

「敵ガトランティスの警戒ラインを侵入しました」

「敵艦隊を確認。…艦種識別、メダルーサ級殲滅型重戦艦3、ナスカ級打撃型航空空母130、ゴストーク級ミサイル戦艦70、ラスコ―級突撃巡洋艦150、ククルカン級襲撃型駆逐艦250」

多いな。少しではあるものの連合艦隊の上に行く数字だ。

しかし、メダルーサってあのメダルーサか？確か頑丈なゼルグート級を一撃の元で葬るあの？レーダ外より一方的に攻撃してくるあの？…心配になってきたな。

「我がミドガルド含む連合艦隊、間もなく作戦宙域に到達します」

「連合艦隊、間もなく交戦距離に入ります」

「敵艦隊、艦載機デズバデーダの発艦を確認しました！」

エリスドライブが全ての艦艇に搭載されているとはいえ、あの恐ろしい攻撃を耐えられるのはこの場に無いがそこはこの場に居るガミラスのゼルグート級の出番である。

あの壁のような盾は特別なものだからな。火焰直撃砲を受け止めることが出来るのは勿論のこと、そういった転送システムの転送座標を大きく狂わせる特殊な妨害電波を放つ機構が盛り込まれており、火焰直撃砲はゼルグート級の盾のみに集約され攻撃さぞ得なくなってしまう代物だ。

後は、確かワイプ阻害能力を持っていたのだったな。この場には無いが我々にも似たような代物があった気がする。

では、艦隊戦の時間だな。まずは…よし。…全セレス級に達する。ファイターを直ちに発艦せよ。

「はっ。ファイターを発艦させる」

「了解しました。旗艦より通達する。直ちに――」

命令を受け取った全セレス級は次々とファイターを発艦していく。

「艦隊、交戦を開始しました」



「敵艦隊、浮遊大陸へと引き返して行きます！」

戦況は少しずつではあるものの多数の艦艇とメダル―サ級2隻を撃破したことで優勢へとなりつつあったその時だった。敵艦隊が反転し、後退したのだ。…それだけでは無い。

「敵艦隊の後方、浮遊大陸基地の影から巨大な構造物が1つ出現！」

その報告に私は食い入るようにその浮遊物体を凝視してしまう。それは岩石で出来た十字架型の巨大構造物で、全長約八〇〇mは下らない巨大さである。戦闘艦でもない代物がガトランティス艦隊の中央を分けて逆進——即ち連合艦隊へ向けて前進してくるのだ。

前進をする未確認物体は敵艦隊の最前線である前面に移動したと思えば、その場で停止した。

しかも、よく見れば戦闘機にも満たないであろう、小さな一〇〇機もの物体が、周囲でリングを形成して回転していた。

…何をしようとしているのは分からないが私は下した。追撃せよ。しかし、追撃するのはどうやら我々だけでは無く小破したぜ

ルグート級1隻と50隻のガミラス艦隊も共に追撃。

命令を受け取ったミドガルド前衛艦隊は機関を最大にし、うねりを上げて追撃を開始した。

そこで新たな変化が訪れた。表面の岩石が突然としてひびが入り、瞬く間に砕け散って周囲へと飛び散っていったでは無いか。

まるで内側から外へ向けて圧力が解放されたようである。大小様々な岩石が周囲に向かって広範囲に飛び散っていく中に、岩石ではない明らかな人工物——つまり巨大な宇宙船（我々ミドガルドからすると驚かない：感覚麻痺しているな）が、連合艦隊の前に姿を見せたのだ。

それも五一〇mに及ぶ巨大な十字架に近い形状をしているが、直ぐにその巨大艦は体制を寝かせる——というよりも、これが本来の姿勢であり、偽装の為に艦の姿勢を縦方向に向けていたのだ。

ガミラス艦と似たような緑色の艦体色をしており、艦体形状はやや縦長のロケット型であるものの艦首の形状はマイナスドライバーの様に尖っている。艦首両舷と艦尾両舷には潜水艦にある様な、一対の安定翼らしきものを備え、艦底部にもT型の構造物四つが一行に並ぶ。

上甲板には、聳え立る巨大な艦橋構造物があるが、その艦橋もまた独特なもので固定式連装大型砲を土台として、その上に三連装砲塔を三基重ね置き、なおかつその天辺に艦橋が乗っているのだ。

地球、ガミラス基準で言えばアレは大戦艦クラスだ。確かあの艦艇の名前は、カラクルム級？

そして、後退した筈の敵艦隊は既に反転しており、その大戦艦の直ぐ後ろ列に砲塔を向けたまま居座っている。

「機関波動パターンはガトランティス特有のものと同じ。アレは間違いなくガトランティスの戦艦です！」

…だがそれがどうした。たかが1隻では無いか？前衛艦隊に再通達、撃滅せよ。

「は、はっ！」

たった一隻で、我が前衛艦隊の勢いを止めてくれようというのか。蛮族共め、随分と舐めた真似をしてくれるではないか。…不思議とブーメランが此方に返ってきたのは何故だろう。WSO時代でそんなことをしたからかな。…嫌な予感が襲ってきた。

「カラクルム級より攻撃、来ますッ！」

なんと驚くことにたった1隻のみとは思えぬ程の攻撃である広範囲のシャワービームを上下前面へと浴びせて来たのだ。接近し過ぎていた前衛艦艇の殆どはこの短時間の内にシャワービームの中に埋もれ、艦体がビームであつとに言う間に蜂の巣にされた拳句に轟沈していった。

「前衛艦隊、被害甚大！」

「第二五宙雷戦隊壊滅、第四二宙雷戦隊通信途絶！？」

「我がミドガルド前衛艦隊及び先行したガミラス艦隊、全滅を確
認しました！」

なんたることだ。300隻の内、50隻あまりを一度の攻撃で失
ってしまうとは…。

…やはり宇宙人は侮れないな。恐ろしい恐ろしい。反省だな。

このままでは全滅してしまう。地球艦隊もカラクルム級の射程内
に入ってしまった為に被害を受けており、文字通り全滅するのも時
間の問題であろう。

「ッ…閣下、敵の砲撃が突如停止！」

なんだと？

ふと、豪雨の様なビームを叩き付けて来たカラクルム級の砲撃が
止んだという報告に、私は眉をしかめた直後に、チャンスが再び訪
れたと再認識した。恐らく敵の攻撃には持続性が無く状時間の砲撃
は不可能なのだ。…可能であったら詰んだ。

直ぐに再反撃の指示を下そうと思に至る。

「閣下！地球軍司令部より緊急電です！」

こんな時に緊急通信だと？まあいい。読み上げる。

「全軍に通達する。指定した第三戦闘ラインまで、速やかに後退せよ…とのことです」

…プランA、か。…よし、後退だ！！

全艦、直ちに指定されたポイントまで後退だ！急げ！！巻き込まれるぞ！？

『了解！』

さて、指定のラインまで後退が完了したと同時に山南艦長が乗る最新艦艇"も所定の位置に到達するだろう。

…同志よ、聞こえるか？

頭に響くこの声は、同志か。

…ああ、聞こえている。

…そうか、たった今、バスターレーザーを搭載したプロテクト級も山南艦長と一緒に所定の位置に到達した。言う必要は無いと思うが山南の隣にプロテクト級は居る。

「――発射体制には移っているか？」

「――間もなく、ソレは終わる。」

「いよいよか。では同志と同志シエラよ。頼んだぞ。バスターレーザーの力を見せてくれ。あ、今思ったのだが、この調子じゃ全ての連合艦隊は後退出来そうで無く、間に合いそうに無いのだがちょっと心配なところだ。」

「……プロテクト級へシエラ……」

「いよいよ、だね」

「ああ。いよいよだ。我々の力の一端を地球と共にガトランティスに見せつけてやろう。」

同志シエラ、始める。

「分かった。：指示通り、本艦は、プランAに、従い、敵艦隊、殲滅する。バスターレーザーの、発射準備を、速やかに、整えて。モードは、拡散モードに：」

「了解しました。バスターレーザー発射準備に入る。モードを拡散モードへ移行。機関圧力上げ！エネルギー充填を開始」

「前線の友軍艦隊、退避行動に入る。なお、発射体制完了までに退避を終えるのは無理かと……」

確かに前線の連合艦隊は、左右に退避行動へと移行しているもののスムーズとは言い難く、特に真っ先に突撃して敵陣系の深くに入り込んだガミラス艦隊等は時間が掛かってしまい、バスターレーザーと山南が乗る「最新艦艇」であるヘアンドロメダによる攻撃の被害を受けてしまう可能性があるかもしれないからだが…。

しかし、コレに関しては問題は無い。最新の多重マルチロックオンシステム照準を搭載している為、ガトランティスのみが被害をもらうからだ。

「構わない、発射を、継続。これも、拡散、バスターレーザー、試射を、兼ねた攻撃。多重ロックシステム、フル活用、敵と味方が、双方ともに、射線上へある場合は除外。それ以外の敵艦、全てロックし、攻撃を行う」

「はっ」

さて、そろそろ、充填は完了する頃だろう。

「エネルギー充填率、一〇〇%を突破！」

「カラクルム級からの攻撃が止んだ。敵艦隊行動開始、半包囲に移る模様です」

どうやら長く続かなかったな。

味方艦隊に後を託したということは消耗が激しいのだろう。まあ

此方としては好都合だが。

この艦に備え付けられた戦術コンピューターも、多重ロックシステムを以て前方の敵艦のみを尽く照準に合わせてしまうなど、人間には出来ない作業をあっという間に済ませた。

格納されていた大口徑の砲口が蓋を開き、姿を現した。

こうなれば後に残された作業は、秒読みを開始してバスターレーザーの発射を命じるだけである。エリスドライブによって、凝縮されたエリスIIエネルギーが送り込まれていき、その莫大なエネルギーを開放せんとして今か今かと待っている。

恐らくへアンドロメダも秒読みを始める頃だろう。

「カウントを開始、15秒前：14、13、12」

「艦長、コンピューターがカラクルム級をロックしていません」

「今さら再登録は間に合わないが、バスターレーザーの余波を受けて無傷とはいくまい」

「：8、7、6、5」

バスターレーザーは直撃せずとも、至近に居ればそのエネルギーの凄まじい放射熱などの余波を受けることになり、それを受ければ、大抵の艦艇は装甲を剥離された挙句の果てに、バラバラに分解

されてしまうのがオチであった。

あのカラクリム級も無事では済むまいが、願わくばデブリ群の成れの果てへと思うばかりだ。

「…3、2、1…0」

「拡散バスターレーザー、発射ア!!!」

同志シエラは発射を命じた。

下部に搭載されているバスターレーザー砲口から、強力な閃光が生じると共に一気に周囲宙域を緑白い光で照らし出す。だが放たれたのはバスターレーザーだけでは無く、青白い光を照らしながら放つ地球艦アンドロメダも同様だった。

プロテクト級から放たれた一つの砲口に堪った破滅の光球が、眩い閃光と共に風船のように破裂したかと思えば、一本の太い光道が前方方向へ、我行く破壊の道標となって突き進む。

それは、あっという間に戦闘宙域に達した。美と破壊を纏った光道は、一定の宙域に着た途端に直線だった道筋が螺旋を描き始め、互いに纏れあう様に突き進み続けた。

その数秒の後、螺旋を描くエリスIIエネルギーは、第八浮遊大陸の周囲を周回していた衛星の側面を文字通りに抉り、威力を衰えさせることも無く戦闘宙域に差し掛かった。

凄いな（感激）。

バスターレーザーは戦闘宙域に到達するや否や、数百以上の光が生み出され、辺り一帯が光の美しさと共に破壊の限りを尽くす。大陸基地は無論のこと数百という分岐したバスターレーザーにガトランティス艦隊は基地と共に吞まれて跡形もなく消し飛んだ。

「敵艦隊の九割以上を殲滅、浮遊大陸基地の消滅、並びに惑星の半壊を確認。なお、バスターレーザーとアンドロメダより放たれた拡散波動砲の影響で宙域一帯の磁場が乱れております故、残敵の確認は難しいかと」

「急速冷却開始。機関部に異常は見受けられず、戦闘面を除き航行に影響はありません」

「報告します。バスターレーザーを最大出力で放った関係もあり、エリスIIドライブに多大な負担が生じており、冷却を急いでも数十分は掛かります。戦闘能力は大幅に低下し、ミサイルや魚雷といった兵装が現状、使えます」

「友軍艦隊の被害はゼロ。健在です」

成功だな。艦隊決戦に使えることが証明されたがやはりと言うべきか、機関出力に負担が掛かるか。プロテクト級をベースにした戦艦ロジャー級であれば機関出力も事足りるだろうな。とはいえ、バスターレーザーが艦隊決戦時に有効である証明が出来たことは喜ばしい。

同志シエラ、作戦を第2段階へ移行。通信回線をオープンチャンネルにし、友軍に呼びかける。

「分かった」

いや、今日は素晴らしい日だな。ストレスも発散出来て一石二鳥だな。

「こちらは、ミドガルド軍総旗艦へシエラ。第八浮遊大陸基地の消滅を確認。これより掃討戦に移る」

『こちらは、地球連邦防衛軍総旗艦へアンドロメダ。第八浮遊大陸基地の消滅を確認。これより掃討戦に移る』

いつに無く流暢だな同志シエラ。後、同じタイミングで山南も呼びかけているとは。

「地球ガミラス、ミドガルド連合艦隊は引き続き静観を。なお、諸君らの健闘に敬意を表する」

『地球ガミラス、ミドガルド連合艦隊は引き続き静観されたし。なお、諸君らの健闘に敬意を表する』

きっと今頃は連合艦隊は勝利の喜びの声を上げているだろうな。うんうん。

さて、残りの敵を全て片付けようか。

くく数十分後くく

「瀕死カラクルム級ッ、ワイプアウトしました！」

…え、マジ？只でさえ、バスターレーザーを最大出力で放った為に動けないと言うのに…。それにしてもバスターレーザーと拡散波動砲による余波すら耐えきったあの、こんがり赤黒くなったカラクルム級は連合艦隊総出を以ってしての苛烈を極める程の砲火である艦砲射撃は、カラクルム級表面すら貫通しないとは。

私と同志シエラが座乗するプロテクト級は現在は身動き出来ず、砲撃すら出来ないがもし正常に復旧すれば、このプロテクト級で撃沈させることが可能であると言うのに。1回もカラクルム級に砲撃したことが無いから分かんが撃沈は絶対出来ると確信がある。

「敵艦は離脱した地球の友軍艦へディファイアンスへサラトガへの航跡を辿った模様！つまりは…っ」

地球、か…やはりこの世界は我々に優しく無い。非情である。

*この二十数分後になって、私達は地球への特攻を阻止できたことを知る。特攻って世界大戦時の神風特攻みたい…。ちなみに阻止出来たのは、なんと海底ドックに眠るへヤマトが海底ドックから迎撃したという衝撃の報告を添えていた。

…まあ、地球連邦防衛軍総司令部に特攻してくると元ヤマト女性

クルー（現オペレーター）の報告を聞いたミドガルド大使であるソフィアは駐留無人艦隊を出撃（衛星軌道をたまたま艦隊居た）させ迎撃したのだけでも、不幸なこと力不足＋ほぼ全滅。え、全滅理由？それはまた次回に…。

第16話

赤黒くなったカラクルム級は戦闘が困難となって離脱した地球連邦軍のヘディファイアンスへサラトガの航跡を辿り、八番浮遊大陸からワープした。瀕死の割にはワープするくらい元気なカラクルム級であるが、被害に当たるであろう地球にとっては本当にホント溜まったもんじゃない。

地球軍+地球軍総司令部は勿論のこと、母なる地球に最後の突撃と聞いたWSOプレイヤーであるミドガルドギルドメンバーの一同はてんやわんやの大騒ぎ。

主に「オリビア」であるが。

余談であるが最後の突撃と報告を受けたミドガルドプレイヤー面々であるがその報告は後であったとか。

ワープしたと同時にカラクルム級は地球めがけてもの凄くい加速する真っ最中、不幸ながらそのルート上に存在するものが二つあった。

それは艦艇で、つい先程、ワープアウトしたヘディファイアンスへサラトガであった。カラクルム級から「退けコラアアッ!!!」と猛突進をされてしまい「あゝれ」とモロに受けたヘディファイアンスへサラトガはくるくると5回転して、爆沈してしまった。

「月軌道外周に巨大質量がワープアウト!? 隕石などではありま

せん！！同ポイントにてヘディファイアンスへサラトガのワイプアウト信号を確認……。巨大質量は八番浮遊大陸戦闘宙域からワイプアウトしたカラクルム級と思われます！！」

「何ー！？戦闘衛星はどうなっとる？！」

「戦闘衛星、自動迎撃を開始しました！」

「一般市民への避難誘導プロトコルを開始します！」

月軌道外周にワイプアウトしたカラクルム級はスピードを落とすことも無く、更に加速していく。戦闘衛星は向かってくるカラクルム級を確認すると緑色の陽電子ビーム砲を撃ちまくるが「邪魔だ退けコラアアッ！！」と強引に猛突進され戦闘衛星は鉄くずとなった。カラクルム級ばねえっす。

地球軍総司令部室に芹沢、藤堂と共に席に座り、状況を見ていたミドガルドオブザーバーであるユリアは直様、「たまたま」月面軌道上、地球衛星軌道上に居た駐留無人艦隊を出撃させた。駐留艦隊司令を務めるコマンダーバトル・ドロイドは陣形を急いで整える。

構成としてはツンドラ級戦術駆逐艦を旗艦とし、ルビー級電磁加速砲フリゲートと安心安価建造超簡単なFG300型フリゲートII級で構成される。7年と数ヶ月前より全ての艦艇にはエリスIIドライブに換装済とはいえ、不安は残るところ。ちなみに実体弾も撃てる。

「全艦、攻撃ヲ開始セヨ！」

「ラジャラジャ！」

120隻以上からなる駐留艦隊のレーザー砲火は苛烈で、此処から先には通さないという意味が強く感じさせる場面である。陣形を横陣形にしていたことも相まって効率的に艦砲射撃を実施でき、より多くの命中打を出すことに繋がったのだ。

ところがエリスレーザー砲を前にしてもカラクルム級には力不足、否！力不足過ぎた！。

ちなみに地球、ガミラスよりもミドガルドが保有する主砲の方が破壊力がある。順番にするとミドガルド、地球、ガミラス、である。だが残念ながらそれですらこのカラクルム級へカラクルム級の装甲を満足に穿つことは不可能であった。ドンマイである。

「テ、敵艦隊、構ワズ突っ込ンデキマス！？」

「敵艦二損傷見受けラレズ。ア、チョットダケデスガ損傷負ったヨウデス。ソレモ穴ガ出来ソウナ程の：流石、ルビー級ダナ：ソウダッタッ！敵艦30秒後に、艦隊ヲ突破サレマス！！」

「ソナー！？」 「分かります、コマンダー。ソノ気持ち、同ジB1バトル・ドロイドトシテ良クカリマスヨ」

へカラクルムは「効かんわー！？コレでもくらいやがれ邪魔だ

退けコラァアッ！！」と全ての兵装をフル運用しビームの弾幕を駐留艦隊へ張りながら強引に突破した。瀕死の割に元気だねヘカラクロム。>

駐留艦隊はその半分もの被害を貰ってしまった。

一隻のFG300型フリゲートII級がエリスIIフィールドを全開にしながらヘカラクロム>目掛けて突進するも怒涛の特攻をするカラクルム級ヘカラクロム>には無意味なことであり押し折るような形で沈んだ。

このままだとヘカラクロム>は日本の地球軍総司令部目掛けて突っ込んで行けば総司令部どころかその一帯の都市などの被害は甚大なものとなろうと誰もが予想したその時だ。

ヘカラクロム>の後方にワープアウトする艦艇が1隻居た。

「カラクルム級付近後方にワープアウト反応：艦種識別、地球軍所属ノ金剛型ヘゆうなぎ>デス」

ヘゆうなぎ>はヘカラクロム>の隣に付き、全砲門から砲撃を行う。だが効果は無いと直ぐに判断したのかヘカラクロム>下部に回り込み、ヘゆうなぎ>自身の艦首から突進し接触した。同時にエンジン主力を全開稼働させながら押し上げる。

「軌道ヲ修正シヨウトシテイルノカ？」

その通りだった。しかし、へゆうなぎの献身は虚しく、コース修正を変えることは出来ないでいたその時だ。

「アア、へゆうなぎ、逆噴射シ離レテイキマス」

「ドウイウ事ダ？」「サア？」

へカラクロムから離れたのだ。それも砲撃することも無く只、追撃しながら。駐留艦隊のバトル・ドロイド達は疑問に思った時、青く輝く一筋の一本の光が地球からやってきた。それは真っ直ぐと大気圏に突入したへカラクロムへと向かっていき、艦首を貫通させエンジンノズルの所まで一直線に穿ち、そしてへカラクロムは瞬時に亀裂を作りながら爆沈した。

こうして、地球は危機を脱したのであった。英雄的象徴でもある艦艇によって…。



へオリビアSIDE

私は驚いている。八番浮遊大陸にて瀕死となったカラクルム級が地球に特攻したことを衝撃の報告を聞いた時は昇天するぐらい驚いている。だが地球は救われた。それも、なんと海底ドックに眠る改装中のへヤマトが海底ドックにて。

地球軍総司令部特攻事件のことは置いておいて…は出来ないな。

まさかカラクルム級が出てくるとは思わなかった。いや、正確に

は名前だけが最近になって知って艦艇形状は初めてだったと言った
ほうが良いだろう。

全ての艦艇にエリスⅡドライブ換装を7年と数ヶ月前より完了し
たと同時に設計図はエリスⅡドライブ搭載のものとなったが…。

あの場に居たFG300型フリゲートⅡ級からエリスⅠ級の主砲
ではカラクルム級表面を貫通することすら叶わなかった。しかし、
地球に駐留させて居たルビー級電磁加速砲フリゲートは少しではあ
るものの貢献出来た。

派生型であるルビー級実験型イオン砲フリゲートであれば、エリ
スレーザーの上位互換にあたるエーテルレーザーの力が発揮される
ことだろう。

とはいえ、それはカラクルム級に通じるかは別物だ。試したこと
無いもん。

地球駐留艦隊構成を再編成する必要がある。まず増援という形で
1個無人艦隊を向かわせる。総数は八番浮遊大陸作戦で投入された
同じ数の300隻。

艦種はアークワイズ級フリゲート、AC721スサナー重量級Ⅱ
型、プロテクト級航宙戦闘艦Ⅱ型、セレスター級航宙戦闘空母この
4点。主にAC721スサナー重量級Ⅱ型とプロテクト級Ⅱ型を中
心に。

到着したと同時に無人駐留艦隊は太陽系哨戒艦隊となり再編成。一応無断でやるのは外交的、政治的にマズイと判断し、アレコレ理由をつけた後にミドガルドより1個無人艦隊を向かわせた。

無人艦隊となっているが向かわせた艦隊にはクローン将校が艦橋要員として乗っているので、無人というのは語弊があるのかもしれない。

そうそう、聞いた話によると太陽系全域にはガミラス臣民の盾が至るところに配備されているとのこと。

ガミラス臣民の盾は火焰直撃砲を受け止めることが出来るのは勿論のこと、そういった転送システムの転送座標を大きく狂わせる特殊な妨害電波を放つ機構が盛り込まれており、火焰直撃砲はゼルグート級の盾のみに集約され攻撃さぞ得なくなってしまう。

それとワイプ阻害能力を持っている。実は我々にもあるのだ。盾では無いけど。

先の一件を受けてST59アロスト級防御戦艦をアンドロメダ銀河全域中に配備する。コレの特筆するべき点は登録されている味方艦艇などを除き、転送や如何なる次元跳躍をも不可能にする空間攪乱能力である。

ST59アロスト級次元跳躍特化防御戦艦とも呼べることだろう。ちなみに下位互換に当たるガーディアン級次元跳躍防御艦もあり、ST59アロスト級はその発展型でもある。艦の形状は全く似通っ

でも無いが。

量産性に優れたガーディアン級を太陽系に配置。

その関係もあり、ガトランティスによる地球直接ワープ事件は0だ。アンドロメダ銀河？元からガトランティス艦艇確認していない。いないからな。：ガトランティスに無効化する技術があったら詰んだし神に嘆くな。

そうそう、話は変わるが本拠地であるミドガルド本部は未知領域惑星へと移転した。

実はコレ、十数年前より行っていた事なのだが最近になってようやく完成したのだ。氷の惑星に覆われた軍事施設――機動式要塞特化惑星であり、惑星そのものを改造しミドガルド本部とした。この星を『イラム』と名付けた。

爆撃から惑星級の兵器まで全ての攻撃を防ぐため、『重力偏向赤リングフィールド』と最新の惑星シールドによって防御する。多分だが波動砲の攻撃からも耐えられるだろう。本当に多分だけだ。

単純な侵入でも亜高速では如何なる宇宙船を通すことは許可が無い限り通すことは許さない。それ以上の速度で侵入するとしても超高度な操縦能力が必要になるだろう。

イラム星に入るには軌道上に有るシールド・ゲートを通らねばならない。

イラム星が属する星系には多数のST59アロスト級次元跳躍特化防御戦艦を重点的に配置。

そして「アルテミスの首飾り」を静止軌道上に惑星を囲うようにして12設置した。コレは人工衛星でありミドガルドIIイラム惑星防衛を司る無人軍事衛星システムでもある。

四重のリングが旋回している、さながら天球儀のような外観。攻撃を担当する主幹衛星の周囲を、六基のエネルギー供給衛星が取り囲んでいる。直系の大きさは2km以上。

性能としては戦艦クラス砲撃を弾き返す+エリスフィールドで防ぎながら、武装の重力波レーザー、エリスレーザーで薙ぎ払う。360度全方位長距離に対して各種センサーやレーダー等で索敵し、ハリネズミのごとく大量の兵器で自動で迎撃するので死角は無い。

衛星同士が互いに防御と支援をして連携するように機能するため、まともに戦おうとするとなると攻略は困難。

いやはや此処まで実現出来るとは驚嘆に値するな。素晴らしいことである。

そういえば、3日後に日本でアンドロメダ級4隻の進宙式があるな。式典にはミドガルド大使である同志イザベラ。が参加。同志ユリアもオブザーバーではあるものの同志イザベラと共に同じ列にて参加すること。

私は行けないが生中継十後日に映像記録となって一般に販売されるみたいだから待ち遠しいものである。

…それとは別に気になることがある。地球で起きたあのカラーウム級特攻事件の日、宇宙戦艦ヤマトによって阻止された直後、母なる地球が存在する太陽系全域に通信障害が起きたのだ。

原因はまだ分かっていない。ただ分かるとすれば「地球に向けられた」ことくらいだ。それと地球在中武官兼ミドガルド護衛官クローシキヤプテンから、こんな報告が来た。要約すると「知人、あるいは親族の幻覚を見た者達が地球軍の中に居る」っと。

…ふっ、どうやら調査する必要があるようだな。調査と言ったらガトランティスの生き残りである兵士を地球政府は一人だけであるが確保したようだ。クソ、確保するべきだったな。

…良い感じに話のキリがついたと思ったらつけなかったな。そんな時もあるか。では温泉に入るとしようか。同志達と同志アイリス。

「ひっ、分かっているとはいえオリビアが沢山居るなんてホラー過ぎる！？…く、来るなッ。誰でもいいから助けてくれー！！」

さあ、温泉の世界にいざ往かん！

第17話

雲一つない青く晴れ渡った空に花火が十数発打ち上げられる中、開会の挨拶に地球連邦大統領のスピーチが始まった。

『全世界の皆さん：私は、地球連邦政府初代大統領として、今日此処に最新鋭艦アンドロメダ級の完成を、報告する者であります！。宇宙の平和、それをもたらし、それを守る力となるのは我が地球とガミラス、ミドガルドの同盟であります！その重責を担うシンボルとして、既に一番艦であるアンドロメダは――』

まさに壮観である。地球としては初の大型戦艦の進宙式であり――2番艦～5番艦のアンドロメダ級4隻。これ以上ない華々しくも晴れやかな祭典は、地球連邦の影響力を及ぼす範囲全てに渡り生中継されている。

誰もが気持ちを高揚させ、嬉しくなってしまう。時折、カメラは貴賓席の様子にもクローズアップをし、居並ぶお歴々――いわゆるVIPの姿が画面いっぱいに映し出される。ちなみにこの式典、地球勢力圏の外れ、太陽系外縁部・地球防衛の最前線にいる者達もまた食い入るように見ている。

大統領が立つ演説台から一段下（数m下）の段に貴賓席があり、そこは軍需産業部門オブザーバーがおり、現在はカメラで映されている。

オブザーバーは地球、ガミラス、ミドガルド数人がおり皆、歴を重ねている風貌だが、ミドガルドオブザーバーは誰よりも若かった。

ヘッドギアが特徴的である銀髪の女性は20代ちょうどであるが、能力に置いては他オブザーバーはおろか、特に地球政府は一目置いている存在であることは、ミドガルド側を除き上層部でも一部のみしか知らないことだ。

まあ、若さという点に関しては彼女だけでは無く、ミドガルド全員にも言えることだろう。

カメラは次にオブザーバーから一個下の段に位置する貴賓席に座る者達を映す。

中央の席には軍部を代表する芹沢虎鉄が座り、左には地球連邦防衛軍統括司令長官の藤堂平九郎が座る。芹沢側にはガミラス大使であるローレン・バレル大使が座り、藤堂側にはミドガルド大使のイザベラ・ファレストが座っている。

ガミラス、ミドガルド大使の隣にはガミラス特有の蒼き肌を持つ青年と地球人と同じ肌を持つ黒髪の若い女性が控えるように座っている。

対外的には無名だが、あの席に座を占めるのだ。両名は美貌だけでなく、何かしらの重責を担っているのだろう。イザベラ大使も美貌の持ち主。

藤堂、芹沢、両大使は何やら言葉を交わしているように見える。まあ、真正面を向いてであるが。いったい何を話しているのだろうか…。

「何故、生存者が居ることを教えてくれなかったのですか？ガトランティスの兵士は、肉体に所定の処置を施さねば自爆する。そのように創られているのです。我々に一報してくださいませば…」

バレル大使は芹沢と藤堂を横目で見た後、イザベラ大使と上に居るミドガルドオブザーバーにもチラッと見るが、直ぐ真正面に戻る。

「お言葉ですが、今更、重要な情報を開示されるのはどうも…」

「…芹沢副長。それは我々ガミラスの落ち度であるかと？」

「せめて共同作戦の実施前に…」 「過去に不幸な行き違いはありました。今では地球とガミラスは同盟国。対等なパートナーであると信じております」

昨日の敵は、今日の友とは言うもののまだ三年。いや、もう三年であろうか？だがそれでも複雑な気持ちは両者ともある。…ミドガルドを除いて。

大統領のスピーチが終わったのか、観客からの拍手喝采が会場を広がりを見せて、やがて紐で吊るされたシャンパンが新造艦の左舷

にある波動砲の発射口にぶつけられ、瓶が割れたと同時に久寿玉が割られた。

「今の地球の人口は当時の三分の一にも満たない。デスラー体制の崩壊により、国が乱れていようと、ガミラスがその気になれば、侵略するのは容易です。無論、もうそのようなことは起きないでしょうが…」

「藤堂長官、疑心暗鬼という言葉は我々ガミラスにもありますよ。危険な火遊びであると、忠告させていただきます。恩人であるイスカンドルの約束を反故にしてまで…」

「そう、あれは一字宙戦艦艦長の沖田十三がした口約束です。条約でも無いし、地球の意味でもありません」

バレル大使が言ったことを芹沢は一蹴する。

藤堂は顔をそむけた。思うところが無い訳じゃない。分かっているのだ。だがそれは地球の為に必要なことなのだ。

「その通りです。今の地球には必要なこと。ガミラスを退けたとはいえ、未だ地球は脅威の渦の中に居ます。数多の脅威から身を守る為にも、地球政府が推し進めるこの政策は必要不可欠なことなのです」

今まで口を閉ざしていたミドガルド大使であるイザベラの声に藤堂、芹沢、バレル大使と金髪の青年は耳を傾けた。容姿はうら若い

銀髪の女性であるが、真っ直ぐな眼差し、表情、雰囲気、態度は歴戦の猛者のように力強く感じられた。

(必要なこと、か)

バレル大使は心の中でそう呟きながら、真下に居るアンドロメダ級に視線を向ける。ガントリイロックが外された新造艦アンドロメダ級4隻はレールにそって急速に進み、やがては直角90度のレールに沿って空へと舞い上がっていった。

一同が再び凝視する中、空高く昇って行くアンドロメダ級2番と5番艦の4隻は市民の大歓声の中、式典上空にワームホールを形成させて、式典を後にした。

こうして様々な思惑が入り乱れる中、進宙式は終了した。

くくミドガルド 駐地球大使館くく

ヘイザベラSIDE

「いや、やはり未来の地球は凄いよ。宇宙戦艦アンドロメダは迫力満載だったね！」

「ええ、そうね。でも私はやっぱり、ヤマトの方が良いかしら？ ヤマト級は至福……」

私達は進宙式から我がミドガルドの大使館に戻り、向かい合うようにして執務室のソファに座り、団欒を楽しんでいる。ちなみに

大使館は、日本に置く地球連邦防衛軍総司令部から割と近い場所だ。

そして今ユリアが「未来の地球」と言ったけど理由としては私達が元居た世界と同じの歴史を辿っていたから。だからこそ私達はこの地球を未来の世界だと確信をしている。でも不思議なことに、WSOゲーム無かったけど…。

そんな現在居る未来の世界はガミラスによって「サヨナラ♪」（意味深）寸前だったけど、それは3年前の事。現在地球暦2202は復興真っ最中。だからこそか、WSOゲームが歴史から消えたのも仕方が無いのかもしれないわね。

う〜んでも、太陽系に第11番惑星なんて私の記憶が確かなら無かった筈なのだけれど。まあ、その事は一先ず頭の片隅に置いて起きましょう。

「そういえばイザベラ。確か進宙したアンドロメダ級達って木星から離れた宙域で演習するんだったよね？アンドロメダ級アンドロメダも一緒に。後は、え〜と何だったかな？」

「初期生産された14隻のドレッドノート級前衛航宙戦艦、よ」

「それだよ、それ！いやぁ、あのスペックで量産型って言うのは色々と凄いやね」

「そうね、貴女が身震いしているのも面白いわ。ちょっと引くけど…」

全くね。ガミラスのガイデロール級二等航空戦艦をベースに造られているのと、なおかつヤマトの戦闘データなどを反映したことから、姿形は異なれどもヤマトの簡易版とも言うべき戦闘艦。

新開発された収束圧縮型衝撃波砲を30・5cm口径9門装備する他、数多くの兵器をその艦体に装備している為、見た目以上に重武装。なおかつ波動砲が標準装備されているのにも関わらず、量産型とは…末恐ろしいわね。流星母なる地球。

「突然だけど、ガトランティス兵って人造人間だそうね」

「本当に突然だね。まあ、そうみたいだね。まさか自分達ミドガルド以外にも人造人間を創り出せているとは…」

強靱な肉体も持ち、自分の意思で自爆させることも出来るなんて、私達にはとても無理だわ。技術面での意味では無いけどね。

「…話は変わるのだけれど、地球に特攻したカラクルム級事件の際に起きた通信障害の件があったのどうなっているの？」

ユリアはチャラけた態度から一瞬に真面目な表情へと切り替わった。

「…未だ分かっていないよ。ただ、白色彗星からほぼ同方向から地球に向けられたってことしか分かっていないんだから」

「白色彗星？」

「未知のクエーサーとも言うね。白色彗星は地球に向けて限り無く光速で向かっているけど計算では何万年も先の話…。まあ、それより、コレを見て貰いたい」

ユリアはタブレット端末を私に渡してきた。それを受け取り、画面を見る。

「これは…」

「オリビアと同じ似姿をしたNPCが乗ったヤマトだ。そして今見てもらっているのは、元ヤマトの乗組員達」

何故、元ヤマトの乗組員だけなのかしら？

「疑問に思っている顔だね。その元ヤマトの乗組員だけが幻影を…太陽系全域に通信障害が発せられた最中に幻影を見た。知人、あるいは親しかった家族を、ね。そして幻影はこう言ったそうだよ。…ヤマトに乗れっとね」

なんでヤマトに乗る必要があるのかしら？それにこの事は…、

「…この事は私達の故郷、地球の政府は知っているの？」

「正解だ。寧ろ勘づいてもいるよ。そしてそれは我がミドガルドの七大ギルド統治者と最高指導者、いやギルド長も知っている。そ

もそもこの件の調査が始まったのはギルド長直々の指示だよ？はあ、ギルド長直々ってそれってさ…」

セブンス・デイビタース：通称、七大ギルド統治者は名前の通り、ミドガルドギルドを統治する存在。彼女等はミドガルドギルドで最も貢献している者達の集まりであり、そしてギルド長から統治者の称号を下賜されている。

その内の2人はステラとオリビアだ。

最高指導者Ⅱギルド長はW S Oプレイヤーのギルドにとっても最上官に当たり、ミドガルドギルドの創始者である人物。彼女は謎を呼ぶ存在であり、素性は謎に包まれていて分からない。

クローン軍団の創設に関しても、七大ギルド統治者主導によるものってなっているけれど、それ自体に間違いは無い。：が、実際のところはギルド長が案を出して、七大ギルド統治者へ案を渡したとも言われている。

七大ギルド統治者はギルド長の代理人…。

そのような存在の統治者達でさえ、ギルド長の素性を知るのは統治者達の中でも限られている。

事は重大、なのね…。

「まあ、何がどうあれ、調査は継続する。変更しないし決定事項

でもある」

そうね。はぁ、胃がキリキリするのは何故なの？まさかこの地球に向けられたエネルギー波は「危機が迫っています。頼りなのです」とメッセージを地球に向けているもので…。

一方の白色彗星は「滅ぼすから♪」の合図で、地球の危機に直面して関係しているってことは考え過ぎだわね。はぁ、でも考えるとか何故か胃が痛い。もの凄くいキリキリする。

私はユリアとの団欒が終わった後、大使としての仕事をやっていくのであった。胃薬を忘れず飲んで…。

第18話

地球にてアンドロメダ級4隻の就役式典が終わった頃、ミドガルドは自身の領域でもあるとある宙域で、『あること』が行われようとしていた…。

その宙域には少数のミドガルド艦隊が一つの「何か」を誘導しているようだった。「何か」は宇宙に溶け込むかのような漆黒の球体であった。

「サブスペースの影響領域への侵入準備…。パイロット艦隊による誘導終了。繰り返す、パイロット艦隊による誘導終了」

パイロット艦隊に誘導されていた「何か」はミドガルドパイロット艦隊よりも大きかった。いやアレを大きいなんて済ましても良く無いだろう。

何故なら準惑星サイズを誇る天体なのだから…。

「何か」は金属で出来たような巨大な球体であることから、まるで人工的に造られたかのようなようであるようだ…いや、間違いじゃ無い。「何か」は人工的に造られた。

その証拠に「何か」の球体にはなぞるように青く輝く線が多々あるのと、後部中央にメインの推進部と思われる巨大な一つのエンジンが埋め込むようにあり、メインの推進部を囲むようにして推進部

と思しき複数のエンジンが同様に埋め込むようであった。それは青い粒子を放ちながら動いていた。

そして、「何か」の正面中央には巨大な穴のようなものがある。兵器の一種だろうか…。

その「何か」を知るミドガルドは「何か」に対してこう呼んでいた。その名も『ガイエンブルク級移動要塞』っと。

「サブスペース発生シークエンス8まで終了を確認。これよりサブスペース発生シークエンスを最終段階へ移行」

要塞には本計画の立案者である七大統治者が一人、ステラ。作戦の司令官を務めるオリビアと瓜二つのオリビアNPC。副司令官のマイシャルクローンコマンダー、リルデ。技術部門を中心にプレイヤ―数十人と62400人の将兵、そして数多のバトルドロイドが乗り込んでいた。

一方、旗艦を務める統治者級（エターナルストーム級）のブリッジには司令席に座るオリビアを囲むようにしてオリビアと瓜二つであるオリビアNPCを筆頭に幕僚達が集い、更にクローン中将ないしクローン少将達、及び各艦隊の司令官であるクローンコマンダーが集合し要塞より離れた宙域で、固唾を飲んで三次元投影された巨大スクリーンに映る光景を見守っていた…。

「これほど揃うと中々に壮観だな。同志（創造主）よ」

「ああ、そうだな」

オリビアはチラッと隣に佇んでいる黒ローブ姿の映像伝達ロボットを見やる。ロボットは人ベースではあるが頭は違った。頭は近未来的なテレビカメラのような物となっている。

「――。カウントダウンを開始：30、29、28、27――」

「後方支援部隊は速やかにワープゲート軸線上から退避せよ。繰り返す――」

カウントダウンが始まったと同時にもう一人のクロインオペレーターが退避する旨を後方支援部隊に指示する。

指示を受け取った後方支援部隊の艦艇達は直ぐ様に退避に入る。完了した頃にはカウントダウンは10秒を切っていた。

「――7、6、5、4、3、2、1：ガイエンブルク要塞ワープ開始！」

ガイエンブルク要塞は宙域を照らしながら吸い込まれるかのよう
にワープした。

少しして、ワープする予定のポイント：此処、通常空間に現れた。

ワープのエフェクトは青白く○字状に空間が割れるようにその中心部から、蒸気のような靄を纏わりつかせながら物体がゆっくりと現れようとしていた。

その光景を旗艦に報告する為、ワープゲート近場で報告する艦が1隻居た。

「此方《フォックスアハト》。発生時、重力場、共に許容範囲内。
——」

蒸気のような靄を纏わりつかせながらガイエンブルク要塞はゆっくりと現れ、数秒後に通常空間から姿を完全に現した。

「此方《フォックスアハト》。——」

~~~~ミドガルド旗艦 統治者級~~~~

巨大スクリーンに映るガイエンブルク要塞を観てブリッジに集まる者達は、結果を待っていた。

「《フォックスアハト》より通信です…。ガイエンブルク要塞、ワープ成功です！」

『おお〜』

ガイエンブルク要塞がワープ成功したことに皆、歓喜の息を漏らしていた。ふと、自分達の後ろに座るオリビアを見やる。

「……」

オリビアは顔を脇に控えるロボットから正面へ向く。席を立ち、声高に宣言する。

「ガイエンブルク移動要塞を正式に主力兵器の一つとすることを、此処に宣言する！」

『はっ！』

こうして地球、イスカandal、ガミラスの与り知らないところで要塞のワープ実験が終了した。

余談だが実はこのワープ実験はミドガルドが管理下に置いているすべての惑星、星系、星間国家に生中継されている。これによってミドガルドに対し畏怖の視線を向けていることにミドガルドは知らない。

まあ、もっともミドガルドはデ・ブランを除き管理なんぞしていないのだが……。ある種の放置。

くくくミドガルド 駐地球大使館くくく

ヘイザベラSIDE

「…何？」

『はっ、ユリアオブザーバーが大使に用があると…』

「そう…ルナテント佐良。ユリアを中に入れなさい」

『はっ。…どうぞ』

部屋の一對の扉が音を立てて開かれ、4人の人物が入って来た。

一人は言わずもがなユリアで残り3人は兵士。

深緑色を基調とした士官用の軍服を身に纏い、大尉の階級章を付けているクロインルナテント佐良とフェイズIIアーマーを装着しているクロイントルーパー2人。

ルナテント佐良はキャプテン美波と勤務交代要員であり現在はユリアの警護を行っており、一方のトルーパー2人はこの執務室を警備する衛兵。

「やあ、仕事お疲れさん」

「イザベラも仕事お疲れ様ね」

入室したユリアが親しみ籠った笑みを向けるのは、同じ感情を宿

した笑みを私も作る。

「貴女達は下がりなさい」

「「「はっ」「」」

他者がいない執務室で二人きり……。私は執務席を立ち、執務机の正面にあるソファーに移動する。ユリアもソファーに座るけど、向かい合わせに座ってる。

「それで用件は？お互い忙しい身だけど今日はどうしたの？」

「いやまあ、そうなんだけど……」

歯切れが悪いこと。

「実は、オリビアNPCからこんな物を貰ってね」

それは…個人端末コンピューター？随分と古い型を…。情報か何か、それとも映像でも詰まっているのかしら？。

「え？なんでそれを…」

「プレゼントされちゃったんだ」

はあ？

「なんでも…『面白いものが二つ撮れた。同志イザベラと一緒に見てほしい』ってさ」

面白いもの、か。気になるわね。

「良いわね。ちょうど休憩時間に入るところだったし、観ましようか」

くくく映像再生くくく

バレル『——その星の名はテレザート。文明の頂点を極めるときれる伝説の惑星。その星の民は人間の意思そのものを物理的な力へと変えて、利用することが出来た…』

…ん？。月面にあるバレル大使の大使館の様子なのだけでも…。バレル大使と元ヤマト戦術長現ゆうなぎ艦長古代進一尉の会話の様子…え？何？早速ツッコミどころが出てきたんだけど…。

「バレル大使がドアップされてる…てか、セリフといい発言者の名前といい、台本形式みたい」

…まずは観よう。

バレル『人間の想像力に限界が無いように、精神から引き出されるエネルギーにも限界は無い。無限に等しい力を誇った彼等は、その気になれば星座の形を変えることすら出来た』

「へえ〜…フア!？」

「何ですって!？」

バレル『いつしか、彼等は肉体を必要としなくなり、精神だけの存在となった』

!？え、神なの？ねえっ、テレザートに住まう人達って現人神か何かなのッ!？ヤバ過ぎるわ!!どうなってるのこの世界は!!

バレル『——そして、生きた人間では決して辿り着くことは出来ない次元の果てで、一つの命に結晶した。その名はテレサ。あの世とこの世の狭間であって、全ての平穏を願い続ける女神』

女神様!？まさか想像している金髪金眼だったり…、

\*正解だ。同志イザベラよ。

「私が思っていたことを!？」

「でもイザベラ。これって結局は御伽噺の類…」

バレル『古代一尉、コレは御伽噺では無い。テレザートが実在する逸話は様々な星間文明に残っている。どれも1000年以上も前ののだが——』

「「……マジか」」（啞然&驚愕）

古代 『テレサのメッセンジャー？』

バレル 『そう。我々よりも高い次元に存在するが故に、テレサはこの宇宙の始まりから終りまで見通している。テレサに呼ばれた者はあるべきことをなさねばならない。――』

古代 『…この座標、我々に幻を見せたあのエネルギー波と方向が一致します』

バレル 『そう、君達はそれを救難信号と称した。――』映像停止。

「アレ？止まったね。」

不調かしら。

「叩いたら治るかな」

テレビじゃないんだから…。逆に叩きに叩くと壊れるかも…ん？

「あ、再生したわね。でも…」

「なんか海底ドックにあるヤマトをバックに見覚えがありまくる顔が十数人揃ってる…」

本当に何な…あ、コレが二つ目のね。

森雪『古代君、真田さん。お帰りなさい』

古代『すまない。連絡もしないで…』

島『気にするな古代。真田さんから送られた時間断層のデータは皆確認しています』

相原『こ、この情報はいつ…』

真田『…中央に留まれ。あの時、去り際に土方さんはそう言った。少しでも情報を集める為、私はヤマトの再改造を引き受けた。…だが、くっ、時間断層の事を突き止めたところで、大きな流れを止めることなど。…結局、我々は負けたんだ』

…むっ？今なんと言ったのかしら？おかしいわね。耳掃除怠っていない筈なのだけれど時間…え？

「あれ可笑しいな。時間断層は機密事項であった筈なんだけど…」

…マジか。

古代『ど、どういうことですか？』

徳川『ヤマトのクルー全員に本日付けで配置転換命令が出たんじゃ』

古代『そ、そんな…』

島『気にするな。お前のせいじゃ無い』

徳川『農らの気持ちを、上層部が分かる筈も無い…』

相原『3年前のあの航海で、地球は救われた筈ですよ…っ』

南部『今の地球は、コレで良いのかよ…ッ』

古代『…俺達はこの世に居ない大切な人から何かを語り掛けられた。…大きな災いが宇宙の何処かで起きようとしている。その事を言葉では無く、心で感じ取らされた。…今の地球政府は分かるうともしない。彼等に見えるのは…現実の光景だけだ。生きる為に、地球の主権を守る為に…でもそれは間違った未来に突き進むことじゃ無いのかっ？このままでは…死んでしまった者達へと顔向け出来ない！』

「にしても大きな災いって何かしら？」

「白色彗星とかじゃない？後は災いとかでは無いけどテレサ。でもそれってなんの関係が…え？」

古代『俺は、ヤマトでテレザートに向かいたい…皆！力を貸してくれ！』

「「……」」

真田『古代、行こう。今の地球にヤマトの居場所は無い。だからこそ真実を突き止め、間違った未来を変えるんだ。それこそが今、やらねばならないこと…ヤマトと共に生きた我々の道なんだ！』

古代『真田さん…！』

徳川『沖田さんがきつと導いてくれる』相原『そうだ行こう！』  
山崎『ヤマトで行こう！』百合亜『頑張ります！』榎本『俺達は間違っていない！』南部『司令部が何だっただ。負けるもんか！——』

\*以上で二つの面白いもの映像はこれにて終了。ちゃんちゃん♪。

そう残し、画面は一瞬で暗くなり、電源もオフとなった。

「「……」」

静寂が部屋中を支配し、無言でこの部屋から隣にらう執務室へと向かい、ソファァーにどしりと座る。そして……

「「これのどこが面白いんじゃあーッ！！」」

私達は叫んだ。仕方が無いでしょう？色々と衝撃的すぎるのだから…はあ。

オリビアNPCから渡された映像を見た私達は、頭を抱えて悩みに悩みまくった。

\*この後、なんやかんやあってヤマトの反乱はお咎め無しと藤堂長官より地球防衛軍全てに通達され、ヤマトは独立部隊としてテレザート星への調査航海を正式に藤堂長官より言い渡されたのであった。

\*一方その頃、

「ゾル星系最果ての星か…」

「はっ、特殊な楕円軌道の為、黄道面から大きく外れておりますが…紛い物の恒星が生物の活動を保証しています」

「ならば我々は別なものを"保証"してやろう。いつもの手順は既に踏んだ。…では始めるとしよう」

大陽系に再び危機が迫っていた。

「オリビア統治者。ご報告致します。太陽系最果ての星、第11番惑星に○○○○○○○○の艦隊が出現しました。侵略と思われます」

「…ふむ」

「地球軍の空間騎兵隊と呼ばれる者達による活躍により、住民の避難は迅速に行われています。その為、都市部に向けて重点的に艦載機によるミサイル攻撃、爆撃を受けましたが幸いというべきか死者

は驚く程におりません」

「…ふむ？」

「現在は○○○○○○の兵器と思われる複数の人型機動兵器と兵士達が地上にて掃討戦を行っているようですが…無意味なことこの上無いでしょう。逃げ遅れた者達もいるようですが既に避難場所へと向かっている最中なのですから。それともう一つ、新たな報告がございます。地球を発ったヤマトが現在、第11惑星に進路を取ったようです」

「なん、だと！」

「!？」

(オリビア統治者…っ。あなたはそこまで第11惑星の事を想って…!?)

「オリビア統治者！太陽系巡回中の艦隊を直ぐに差し向けます！では私は此方で失礼させて頂きます！！」

「…消去しなくては」「同志（創造主）、自分の世界に集中しすぎたあまりに重大になりそうな報告を聞き逃した…」

## 第19話

へミドガルド艦隊旗艦 プロテクト級Ⅱ型 ウルトンへ

「発見しました。敵ガトランティス艦隊です。距離は約3光秒」

「全艦に伝達。陣形を警戒態勢から攻撃態勢へと変更！対艦戦闘用意！！」

太陽系最果ての星、第11番惑星。ガミラス軍が戦時中に開拓した星であり、ガミラス製の人工太陽によって生存可能な環境に作り変えた惑星。：同志（創造主）と同志プレイヤー達はこの世界を元いた世界かつ未来時代と言っていたが自信なさげだったな。

例として地球で大使を務める同志イザベラと、同じく地球でオプザーバーを務める同志ユリアがそうだな。恐らく同志（創造主）含む全ての同志プレイヤーが疑問に思っていること。ミドガルド定例会議の際、同志（創造主）は「我らが故郷、地球が属する太陽系に第11番惑星なんてあったか？」と疑問の声を上げていた。

ということとは我が同志（創造主）を含む全ての同志プレイヤー達が元いた世界とは別の世界線に、WSOの技術を持って転移したことになる。きっと寂しい想いをするだろうと「私」は思うが私から見て全く寂しい想いなど抱えているように見えなかった。

寧ろ嬉々としていた。主に同志（創造主）であるが。まあ、かく

いう私も同志（創造主）を元に創られた存在であるためか、気持ち  
は分かるというものだ。

「艦種識別：ナスカ級打撃型航宙空母30、ゴストーク級ミサイ  
ル戦艦5、ラスコー級突撃巡洋艦40、ククルカン級襲撃型駆逐艦  
60：以上です！」

「火器管制システム作動よし！」

「…いかが致しますか？オリビア將軍」

…だが今は第11番惑星を荒らす、荒らしであるガトランティス  
を成敗しなくてはならない。

今更だが我が艦隊の戦力構成が――

- ・プロテクト級航宙戦闘艦Ⅱ型 1隻
- ・プロテクト級航宙戦闘艦 2隻
- ・セレスター級航宙戦闘空母 2隻
- ・セレス級軽空母 7隻
- ・AC721スサナイ級支援駆逐艦Ⅱ型 6隻
- ・エリスL級装甲駆逐艦 3隻
- ・FG300型フリゲートⅡ級 10隻
- ・FG300型装甲フリゲートⅡ級 10隻

――以上が私が率いている艦隊でその構成である。本当ならもっ  
と連れて行きたかったのだが自由行動出来るのはこれが限界である。

致し方ないか。

「装甲フリゲート艦、エリスL級は前列に展開。私が座乗する艦を含め全プロテクト級は共に前列へ。FG300型フリゲート、AC721スサナー級を中列。セレスター級、セレス級軽空母は後列に移動しつつファイターを全機発艦させ制宙権を確保せよ」

「はっ！」

一応セレスター級はプロテクト級をベースに建造された艦艇であるから前列に出ても良いのだが、念の為にセレスター級はセレス級と共に後列へ移動してもらう。セレスター級がやられたら帰投出来ないからな、セレスター級所属の航空隊は。

しかしもう間もなく戦闘になるというのにこんな事を考えるのは何だがガトランティス、ガミラスはシールド発生装置すら搭載されていないかったのは驚きだ。シールドは無いが片方は装甲補強、片方はミゴウエザー・コーティング（帯磁性特殊加工）を防御装備としていた。

ミゴウエザー・コーティング（帯磁性特殊加工）は地球軍第1世代艦の主砲を容易に跳弾させ、防御が出来るのだが宇宙戦艦ヤマト出現以降、その防御はゼルグート級を除き全く以って役に立たない。まあ、私個人としてはどちらも艦船外見は好みだ。

そんな敵であったガミラスは現在は同盟国。地球を流星爆弾で一方的に環境を変化させた荒らしである存在のガミラスを成敗したか

ったが、本々当に致し方がないがシールド発生装置を渡してやった。

プロトタイプ＋設計図であるがこれを理解すればガミラスはガミラス本国、軍需産業惑星と時間断層にて量産体制に入ることだろう。これでガミラス宇宙軍は強くなることだろう。

「敵艦隊より艦載機デスバデーダの発艦を確認！数200！」

おっとまたもや思考の海を浸かってしまったか。気をつけよう。

先手は此方が取ったから相手からしたら迎撃に当たるか。

「オリビア將軍、意見具申です。発艦した航空隊は経験値獲得の為、このまま敵編隊を迎撃しつつ敵ガトランティス艦隊へと向かわせ、本艦含む全プロテクト級の航空隊は迎撃及び艦隊防空に当てさせたいと思います」

…ふむ。良いだろう。

「そのように為せ」

「はっ」

くく数十分後くく

戦果は次々とやって来た。

やって来た敵編隊は全て撃破。航空隊計600機から放たれたミ

サイル及び爆弾は敵艦を捉えゴストーク級2、ナスカ級16、ラスコー級13、ククルカン級24隻を撃沈。

四分の一ちょっとの敵ガトランティス艦隊を撃沈の他にゴストーク級1、ナスカ級10、ラスコー級11、ククルカン級8隻を中破ないし大破という戦果を挙げる。ちなみに我が艦隊の被害は：撃破されたファイターが7、フリゲート小破1だ。

「全艦、第二戦速へ。主砲射程圏内まで前進」

「はっ。全艦、第二戦速。主砲射程圏内まで前進せよ！」

しかし、あのミサイル戦艦は艦首部分に巨大なミサイルが2本あるが：あれ攻撃されたらどうするんだ？男のロマン仕様だなく（苦笑い）。

「コマンダー、主砲射程圏内です」

「了解。ではゴストーク級ミサイル戦艦を先に片付けろ」

「はっ。全主砲発射用意よし：撃ちろ方始め！」「撃てー！」

まあ、アレは的になってくたいて言っているようなもの。残念だ。

「弾く着、今！」

「全弾命中。全ゴストーク級の撃沈を確認！」

うむ。素晴らしい花火である。こういうときなんと言ったかな。確か、たくまやく！だったか？

「報告します。友軍艦隊はナスカ級2、ラスコー級3、ククルカ級5を撃沈。なおも戦果拡大中」

それはそうと先んじて拡散バスターレーザーを発射するべきだったな。次回があればそうしよう。

「偵察機より報告。ヤマトを発見。ヤマトは現在、避難民の収容に従事している…とのことですよ」

「偵察機より新たな報告。地上の上空に敵艦隊を発見。数は4隻。援軍を乞う…です。コマンダー、いかが致しますか？」

「ファイターを2個中隊、FG300型フリゲート2隻を援軍として送れ。…宜しいですか？オリビア將軍」

そうだな。数的優位は未だ相手が上であるが戦況優位は此方にある。

「構わん」

「はっ。…ただちに援軍を向かわせろ」「了解！」

くく数分後くく

「オリビア將軍。我が軍は制宙権を完全に掌握。圧倒的優勢にあります」

その通りだな。このまま行けば全て撃滅することが出来るな。残るはナスカ級1隻とラスコー級5隻か。…む？

「前方、重力振を感知。惑星軌道上にワープアウトする模様。規模は6隻です」

「航空隊は現戦闘宙域より一時退避し、艦隊へ引き返せ。艦砲射撃も一時中止せよ。様子を観る。…敵の編成確認を急げ」

「はっ！」

コマンダーの命令を受け、索敵兼通信士官が解析を急ぐ。恐らく、いや確実に我がミドガードでもガミラスでも…そして地球では無い。…ガトランティスだ。しかし6隻とは…。

「目標、通常空間にワープアウトします！」

視線をスクリーンに見やる。

やがて宇宙空間には、ガトランティス特有の三角型の水色リングが何重も重なって回転する、独特の波紋が広がっていく。巡るましく回転する三角型リング内の奥から、ズズズッと緑色の巨体が出現

した。

「やはりガトランティスか…」

「艦種識別…カラクルム級です。しかし…」

索敵兼通信士官が言いたいことは分かっている。…なんだこの音楽は？我々からでは無い。ガトランティスがワープアウトした軌道上からだ。この音楽…まるで終曲のようだ。

「カラクルム級に変化有り」

「解析を急ぎます」

…何をやる気だ？。いったい何を…

「カラクルム級、雷撃ビットと思われる物体をカラクルム級艦周囲を集回しています。雷撃ビットは数百です」

ビーム状のシャワーを浴びせるつもりか？だがその割には艦首部分に集まっていないし我々の方に向けていない。組まれつつある陣形は徐々に直列陣であることを察することは出来るが。地上に向けているのは何故…まさか？

「カラクルム級、直列陣の完成と同時に高エネルギー反応を検知！上昇しつつある！？」

嫌な予感がするぞ。

「全艦に告げる。ただちにカラクルム級へ集中砲撃を！」

「主砲発射準備よし。撃ちろ方始め！」 「撃てー！」

全戦闘艦から次々と放たれる主砲のビーム群はカラクルム級へと向かっていき…その横っ腹に叩き込み貫き、そして爆沈していった。

「カラクルム級全て撃沈を確認！」

……

……

…

…え？ 呆気な。

ま、まあ、後はこれで残りを片付けるだけの簡単な仕事だ。ふっ、勝ったな。風呂入って「前方、重力振を感知！ ワープアウトする模様！」：フラグを建築してしまったか。

「念の為、全艦戦闘態勢を取りつつ後退」

ワープアウト時に観測される重力振が捉えられると、直ぐに出没するであろう艦艇群の数を算出していく。まあ、どうせ大したこと無いだろう。どれどれ、

「推定1000!」

……桁を一つ間違えているのでは無いか? まぁ流石にもう増え「  
まだまだ増えます!」:てた。え、これってまずいのでは?(確信)。

「コマンダーッ!艦首にシールド、エリスフィールドを集中展開  
だ!それと全ファイター呼び戻せ!全艦後退急げッ:後退を急げー!!」

「はっ、はっ!」

ワイプアウトするのが全部カラクルム級だったら無理だぞ?この  
場で対処出来るのは貫徹力があるプロテクト級やセレスター級、A  
C721スサナー級Ⅱ型くらいだ。後、貫徹力では無いけどバスター  
レーザーとか。

最終的に観測された重力振による推測値は、次のようなものだった。  
——10000隻。:桁!?。いやそれよりも:それよりもど  
ころでは無いがヤマトは何処に?もう第11番惑星から出たのか?  
姿見えないが:。

「ヤマトは何処に居る?」

「地中に埋まっています。浅いですが岩盤を上から、のしかかっ  
ているようです」

なんだと!?!本当にどうしたのだッ?ヤマトはカラクルム級から  
の高エネルギー攻撃くらっても無い筈:。まさか自分から隠れたか?

それは羨ましいことだ。コッチは隠れる場所は無いのだよッ？宇宙空間だからな?!。

一旦落ち着け私。いや落ちけ無いぞっ。あれ、おかしいな。目から水が…。

「立て直す。現宙域、を…ヒク。うう…っ」

私今、何を言っているのか分からん。おかしいな。今度はぼやけるぞ。

「しかし、オリビア將軍。地上にはまだ部隊が…何故、あなたは涙を…？もしや…くっ、承知しました。全艦に達する。ただちに現宙域を離脱する！だが忘れるな。我々は再び此処に戻ってくるぞ…！」

『はっ!』

あれ、もしや180度反転してる？ああ、そうか。勝ったんだっ。たな。そうなのだ。そもそも10000隻なんて可笑しなことなんだ。あはっ、あははハハハ…!!。

くくそして（数時間後）くく

…全く以って全然良くない。何なのだ？、この頭がおかしくなる程のカラクルム級の数は？？桁本当に間違っているだろう。え？間違っていない？…間違っていないようだ。はあく（溜息）。

…同志諸君に告げる。やはりこの世界は残酷で、理不尽である。

## 第20話

オリビア將軍率いるオリビア艦隊はガトランティス第八機動艦隊より距離を取り、オリビア艦隊はガトランティスに睨みを効かせていた。そんな中で現在、オリビアと数人のクローン将校が作戦室に集っていた。

「此方をご覧ください」

オリビアの参謀を務めるコマンドースキアがホロテーブルを起動させる。

「第一一番惑星に待機している部隊からの報告によると衛星軌道上にワイプアウトする無数のガトランティス艦隊を発見しました。ワイプアウトした艦艇は全て、カラクルム級です」

起動されたホロテーブルにホログラムが投影された。スキアが言っていた通り、ホログラムに映っているのはカラクルム級が次々とワイプアウトしている様子。

「カラクルム級戦艦群は巨大な円筒を形成中であり、ワイプアウトしたカラクルム級も形成に加わっています。円筒は加速装置と思われるが：恐らく砲台かと。：予測によると現時刻より2時間後の10：20に250万隻となります」

250万隻と聞いて室内はざわざわとし始めるがオリビアからの

一声で場が直ぐに静まり返った。

「…あの円筒が砲台であるのならば、射線上に位置する惑星は存在するか？」

「…はい、將軍。不幸な事に存在します。…前置きを挟みますがカラクルム級からなる円筒型砲台は完成し次第、ガミラスが創り出した人工太陽と接触し暴走…そして半径2万宇宙キロに存在する物体を消滅させます」

ワイプアウトするカラクルム級より、スキアが報告していた事を分かりやすくしたCG映像に切り替えた。一同はまるで超新星爆発のようであると忽然としながら思った。

「——そして肝心の射線上に位置する惑星ですが超新星爆発エネルギーを転用した場合、有効射程内に入る惑星が1…地球です」

「は？」

『……!?!?』

オリビアから放たれた冷たく尖ったその声に、この場にいる全員が畏怖の念を抱かせた。

彼女達は知っている。彼女達の上司であるオリビア將軍はセブンス・デイヴィターズの一人、オリビア統治者より創られた存在であるということ。オリビア統治者の姿形、性格すら同一であるという

こと。そして、オリビア統治者含む「全てのオリビア」は地球を愛しているということ。

だから彼女達は想う。オリビアの為に何か名案を出して作戦に組み込もう、と。

「オリビア將軍、名案があります」「私もです」「將軍、この案はどうでしょう!」「同じく!」

自立心は他の人からの指示で行動するのでは無く自身が考え、自分から行動すること。彼女達はクローン。容姿、才能は勿論、性格までも同じである筈であったが少しずつ個人の性格は変化し自立心も芽生えていた。

へミドガルド艦隊旗艦 プロテクト級Ⅱ型 ウルトン

「作戦時刻となりました。オリビア將軍」

「これより作戦行動に入る。…荒らしを許すな」

『はっ!』

沢山の案が出された中で一つ、この状況に適切である案を今、実行されようとしていた。

「全艦に達する。これよりバスターレーザーの発射シークエンスに移行する。モードを収束モードへ。…バスターレーザー発射用意！目標、第11番惑星 人工太陽！」

「旗艦より全艦へ達する。ただちに——」  
「バスターレーザーへの回路開け」  
「機関圧力上げ！エネルギー充填を開始」

「第11惑星部隊より報告。…地中よりヤマト浮上、波動砲発射準備に入った」

全プロテクト、セレスター級の格納されていた大口徑の砲口が蓋バスターレーザーを開き、姿を現した。

「カウントを開始、15秒前…13、12、11」

バスターレーザー搭載がされていない戦闘艦は前以って射線上から回避し、充填中のプロテクト、セレスター級を護衛する陣形となっていた。

「人工太陽より多数の小型ホール発生。敵艦隊へのエネルギー流出と思われます」

「…7、6、5」

エリスドライブによって、凝縮されたエリスエネルギーが送り込まれていき、バスターレーザーの砲口に緑白い光が蓄積され始めた。砲口内を満たしていき、その莫大なエネルギーを開放せんとして今

か今かと待っている。

「エネルギー充填120%！」

「…3、2、1…0。バスターレーザー、発射ア！！」

下部に搭載されているバスターレーザー砲口から強力な閃光が生じると共に一気に周囲宙域を緑白い光で照らし出す。

プロテクト、セレスター級から放たれた破滅の光球が眩い閃光と共に風船のように破裂したかと思えば、一本の太い光道が前方方向へ、我行く破壊の道標となって螺旋を描きながら突き進む。それが5本。

現戦力で250万隻を相手に正面きって戦うことなど土台無理で…愚かなこと。

ではバスターレーザーでは？ うん、それは良いのかもしれない。しかし250万隻を撃滅することなどそれは拡散モードですら現戦力ではとても難しい。…ではどうこの戦況を打開するか？それは…中央に接続された人工太陽を撃つことだ。

「バスターレーザー、波動砲…人工太陽に命中！」

なんで？その意味はいったい何か？…ときっと思うだろう。…だが意味は確かにあった。

「報告。敵カラクルム級戦艦群の機関部及び活動停止を確認しました」

人工太陽をバスターレーザー、ヤマトから放たれた波動砲により破壊。それによってあれだけの数を誇った250万隻のカラクルム級戦艦群は、その円筒内で発生し続ける紫の雷：波動共鳴の干渉波で使い物にならなくなった。波動共鳴の干渉波は大雑把で表すとすれば、ある種の電磁バルスのようなものである。

機能に支障を受けたカラクルム級戦艦群は衛星軌道上を漂うことしか出来ないでいた。これを見たミドガルド将兵は大喜び。たった5隻で250万隻を宇宙を漂う死んだ船としたのだから分からも無い。

まあ大喜びしている中、この艦隊を率いるオリビアンPCは意図せず白いカラクルム級にチラッと視線を向けて内心「ざまあ♪」と笑顔で中指を立てていたのはここだけの話…。

偶然か、その白いカラクルム級は第八機動艦隊を指揮する旗艦であった。

場面は変わり艦橋では常に沈着冷静と自負する男、レーザー提督は怒りの表情を隠さずミドガルド艦隊とヤマトを睨んでいた。

だがレーザーにとって最も屈辱的だったのはスクリーンに映るヤマトの艦長代理を務めっていると自称する青年が言っていたこととその行動だった。

ヤマトは攻撃することも無く避難民を乗せて数日後、第11番惑星を後にした。

また場面は変わりミドガルド艦隊もヤマトが発った同じ日&同じ時刻に11番惑星宙域を後にしたが『第10番惑星の成れの果て』：アステロイドベルト（小惑星帯）にて紛れ込むように増援として哨戒より駆けつけたミドガルド無人駐留艦隊と共に布陣。

地球の守りは現在ガミラス駐留艦隊と地球防衛軍の山南艦隊が就いており、衛星軌道にはカラクルム級を撃沈出来るよう目標に設計された地球防衛軍の重武装型戦闘衛星が多数配備されていた。

太陽系内にはワイプアウトを阻害するガミラス臣民の盾とガーディアン級次元跳躍防御艦を至るところに配備していた為、ワイプアウトすることなど有り得ないのだが一応念の為：というのが政府上層部の見解ということだろう。

最もガトランティス第八機動艦隊はヤマトを追うべく第11番惑星を後にした為、それらは良い意味で杞憂に終わった。

## 第21話

第11番惑星の衛星軌道上から超新星エネルギーを転用し、地球を破壊するガトランティス第八機動艦隊の思惑は宇宙戦艦ヤマトとオリビア将軍率いるミドガルド艦隊により、阻止された。：第11番惑星から地球までが射程圏内って、怖いな。

「オリビア統治者。時間です。定例会議の時間が迫っております」  
おっと、もうか。では会議室に向かわねば。

―未知領域　イラム星系　惑星イラム―

異様とも言える光景がこの惑星イラムに包まれていた。

月軌道外周とイラムの軌道上にはAC721スサナー級II型やプロテクト級II型が両方合わせて300隻以上は確実に存在している。イラム星の防衛艦隊である。その内の十数隻、ロジャー級戦艦の姿が確認出来る。

未知の脅威がいつでもやって来ても対処出来るよう常時臨戦体制を取っているが、この日はそれ以上に重苦しい雰囲気宇宙空間に醸し出しているのも異様とも言える要因の一つかもしれない。

そんな中で、1隻のロジャー級戦艦と3隻のAC721スサナイ級II型、十数隻のアークワイズ級フリゲート改が通常空間にワープアウトした。

ワープアウトしたロジャー級から1機のラムダ級T-4Aシャトルと2機のT-65Xウイング・スターファイターがハンガーベイより発進しイラム星を目指す。

ファイターは護衛対象であるシャトルから離れず、ミドガルド本部の発着場であるプラットフォームまで送り届ける。シャトルが着陸態勢に移るとファイターはその場から離脱した。

1機のシャトルは着陸し機体の翼を畳んだ。

顎の部分はコックピットでありコックピット下の搭乗用ハッチがある。搭乗用ハッチが開かれ、シャトルからメガネを掛けたピンク髪の女性が現れた。歳は20代前半といったところ。

金色の肩章が付いた光沢のある統治者専用の白い軍服を着用しており、白いマントを身に着けている。左胸には統治者の証を示す階級章がある。

シャトルから降り立ち、その場で肅然と襟を正し終えた瞬間、ブラストゲートが開かれた。

ピンク髪の女性から見て、十数m離れた正面のブラストゲートから3人のショックトルーパーが姿を現れ、ピンク髪の女性の前にや

ってきた。その内の一人、左肩に赤いポールドロンを付けているシヨックトルーパーが話し掛けてきた。

「ステラ統治者。オリビア統治者がお待ちです。此方へどうぞ」

ステラ統治者と呼ばれたピンク髪の女性ステラは頷きシヨックトルーパーの案内の元、ブラストゲートを潜り無言で会場である会議室へと進んでいく。

通路をしばらく進んだ後、会場へと辿り着いた。会議室だ。

この会議室はミドガルド本部にある数有る中の一つであるがブラストドアの両脇にシヨックトルーパーが警備していることから一目で此処が重要な部屋であることが伺えることだろう。

ドアを守る2人のシヨックトルーパーの1人がドア脇に有る開閉ボタンを押した後、ドアが開かれる。

「どうぞ」

入室を促すシヨックトルーパーにステラは頷き、入室する。ステラを此処まで案内した3人のシヨックトルーパーは回れ右し、招かれざる者が入室して来ないようにドアを警備する。

ステラの入室と同時にドアは閉じられた。

「遅いぞ、同志ステラ統治者」

「悪いね、忙しくてね」

「まあいい、…座れ」

入室したステラを迎えるのはオリビア統治者だ。オリビアはステラと同じく統治者専用の白い軍服を着用していた。

オリビアはステラから見て向かい側の席に座っていた。

他には今もステラに視線を向けている十数人の将軍…プレイヤーの姿があり、オリビア含むプレイヤー達は円卓テーブルを囲うようにして席に座っていた。プレイヤーの中にはオリアナ、テレーゼもこの場に集っていた。

ステラは席に座る。

「これで全員が揃った。…では会議を始めるとしよう」

会議が始まる。だが議題に入る前はまず近況の報告からだ。次々と近況報告がなされる中、オリアナの番がやってきた。

「——ミドガルドがこのアンドロメダ銀河に転移してきて20年数年が経過しました。地球を発見する為にも、まずは星図を完成させ、同時に元いた時代においても未開であったアンドロメダ銀河の開拓をしてきました」

ホロテーブルが起動され、テーブル上にアンドロメダ銀河の星図がホログラムとなって映し出される。

「開拓は未だ途中であれど：ご覧の通り、アンドロメダ銀河の星図は完成し、星図作成中にオリビアNPCが地球の宇宙戦艦ヤマトをビーメラ4にて発見し乗艦。オリビアNPCは帰還時、地球がある天の川銀河の星図も獲得し、地球の位置を特定した私はイザベラと共に同盟を結ぶことに成功しました」

オリアナが話している通り、開拓は終えきれていない。イラム星がある未知領域が例に当てはまるだろう。

星図作成はオリアナが受け持っていた為、一同は労いの言葉を掛けた。次はテレーゼの番となったが今回は話すことは無いとのこと。

最後となったステラの番となり、オリビアは彼女に尋ねた。

「同志ステラ統治者、『スターダスト計画』の進捗状況の報告を」

「了解」

ステラは自身が掌り指揮するプロジェクトであるスターダスト計画について次々と話し出す。

「――で、スターダスト計画の進捗は95%に達した。残り半月程で完成になる見込みになるよ」

この場に集う全員から感嘆とした。始動したプロジェクトが間もなく完成となるのだから。

「——さて、近況報告はこれで終えたな。∴では今回の議題に入ろう」

「∴それは、ガトランティスについて、かな？」

「そうだ、同志ステラ」

ガトランティスと聞いて一同は張り詰めた表情をした。

∴ガトランティス。大小マゼランの覇者と名高いガミラスですら未だ何処にガトランティスの母星があるかすら掴めていない。

そんなガトランティスはい先日、太陽系最果ての星である第1番惑星にガトランティス艦隊が現れた。その数は合計にして250万隻。

しかもその250万隻は全てカラクルム級で統一されており、ガトランティスはカラクルム級による円筒形砲台を作りあげ、ガミラスの人工太陽を利用して地球を破壊しようとしたというのが記憶に新しい。

「更にテレザート星宙域でガトランティスの動きが活発化している。偵察を務める次元潜宙艦の報告によれば多数の∴守備艦隊を配備していることが分かった。加えて何処から運んできたのか岩盤を

使いテレザート星を物理的な封鎖が、現在進行系で行われている」

「テレザート、か」

『…』

ミドガルドとしては250万隻がガトランティス全力の戦力であることを信じたいたい思いでいっぱいであったが…もしかするとそれ以上の戦闘艦保有数がある可能性も、容易に捨てることは出来なかった。

この場に集う者達は思う。備えなければ！、と。

「今やるべきことはガトランティスという脅威より備えることのみ。…備えなければならぬ」

勿論だ、とこの場に集う全員は強く頷いた。

やるべき備えることは4つ。

一つ…地球に増援として艦隊を派遣する。

一つ…デ・ブラン帝国に要請しデ・ブランに集う加盟国すべては防衛行動を1年、行うこと。中央総司令部を務めるのはデ・ブラン。

一つ…ミドガルド本部を中心とした防衛網の強化。

一つ：最後にテレザート星はオリビア統治者が対応する。

以上4つ。

最後のテレザート星の件に対し少なからず驚いた一同であるが「オリビア統治者なら」と反対0で賛成となった。

「…ではこれにて解散とする」

会議の終わりを宣言する言葉を最後に会議は終了し、各々は会議室から退出していく。…だがオリビアだけは未だ席に座っていた。

オリビアは全員が退出したことを再確認した後、間近に人が居ても聞こえないくらいの静かな声音で呟いた。

「…まあ、テレザート星は私どころか他の者も行かなくても問題は無いのだが。…ヤマトがそろそろテレザート星に着くし」

そういえば、と思い出したオリビアは苦笑いをしつつ会議室を後にする。

オリビアは退出しドアが閉まった瞬間、部屋を照らす照明が急に消えた。常時付いているのに、だ。…不調だろうか。

部屋は暗闇に包まれる。

“ドサッ”

…だが、おかしい。全員が退出した筈の部屋では音が鳴った。音の発生源はオリビアがついさっきまで座っていた席からであり、音は席に座る際に発する音のようであるがそれは間違いでは無かった。暗闇の中で溶け込んでいる為、殆ど見えないが確かに1人の人物が席に座っていたのだ。

「…」

いつの間にか、照明は回復し、部屋は暗闇から解放された。

「…」

座っている人物は漆黒のローブを総身に纏い、目深までフードを被っている為、容貌はあまり分からない。

分かることは肌が薄い灰色で、ローブ越しでも凹凸とした部分が強調されていることがはっきりと分かることから女性であることが伺えるだろう。

「…」

俯き気味であった女性は顔を上げる。フードからチラッと覗かせる白い髪は揺れ、輝く黄色の双眸はドアを注視した時、またもや照明は消え去り部屋は暗闇に包まれた。

このまま暗闇に包まれるかと思えば照明は直ぐに回復し暗闇から

解放されたと同時に、ドアが開かれた。異変に気づいた警備兵であるショックトルーパー数人が入室してきたのだ。

「照明に異常は見当たりません。キャプテン」

「そうか、では戻るぞ」

「「了解」」

…だがそこに女性の姿は無かった。

…それはまるで、幻影のように消え去ったかのようにであった。

## 第22話

地球にガトランティスという脅威がやってくる。備えあれば憂いなし：私の好きな言葉だが最近憂鬱気味だ。

いやだって、ねえ？

ヤマトがテレザート星を解放した：のは憂鬱に含まれない。問題は別だ。

地球に何万年も掛けて向かってきている木星規模の大きさを持つ未知のクエーサーが突如として消えたのだ。

それだけならって片付けるのは可笑しなことだがなんとクエーサー：以降は白色彗星としよう。情報によると白色彗星の中に火星とほぼ同じ大きさを誇る惑星が1つあったというのだ。

その他に多数のガトランティス戦艦群の姿があり、その中には第八浮遊大陸作戦より登場しているカラクルム級がうじゃうじゃといたそうだ。観測されたデータによるとカラクルム級含めて約1000万隻を越していた。

：桁がおかしい。本当に桁がおかしいと思うのは私だけだろうか。  
はあ（溜息）。

気持ちを落ち着かせて：数ある戦艦群の中にはミサイル戦艦の姿

がチラホラあり、そのミサイル戦艦群の中には反物質エネルギーを転用した大型ミサイルが艦首に装備していたとのこと。報告であったあのミサイルか。確か名が『破滅ミサイル』：だったか？

次元潜宙艦からの報告によるとテレザート星で使用された破滅ミサイルは凄まじい破壊力を持っていたようだ。

今更であるが此等の情報はヤマト+地球防衛軍総司令部から抜きつげフンゲフン：嬉しいことに共有させてくれた。感謝する。

そんな理不尽な存在であるガトランティスになんとしてでも対抗する為、今日も多数の戦闘艦が建造、就役している。

建造はアンドロメダ銀河内の複数あるミドガル造船所、基地、要塞にて24時間フル稼働。

一応地球にある時間断層も使わせて貰ってはいるが主に時間断層の所有権&管理は当然地球側であるのでメインに使えるのは地球だ。そんな地球は今日も波動砲艦を盛々と建造している真っ最中。

建造面から話は変わって、地球の守りを心配した我々は増援として艦隊をいっっぱい派遣した。

艦種構成として、プロテクト級航宙戦闘艦Ⅱ型、セレスター級戦闘空母Ⅱ型、AC721スサナイ級駆逐艦Ⅱ型（派生含む）、ウィングユサール級ミサイル駆逐艦Ⅱ型、ルビー級フリゲートⅡ型、DH全能支援船を派遣する。

どれもカラクルム級を撃沈することが可能である艦艇達。それと本当なら移動要塞も一緒に派遣したかったのだが、同志最高指導者こと同志ギルド長より「今はダメだ」と言われてしまった。

だが「今は」とはいったいどういう事だろうか？…まあ、後で考えるところ。場合によっては直談判も視野に入れよう。

話は戻るが派遣した艦隊は既に地球に到着しており地球衛星軌道上にて警戒しつつ待機しているのだが、艦隊の中から太陽系哨戒任務に就かせている哨戒部隊がある。

哨戒部隊ではあるが偵察部隊、パトロール部隊と呼ばれることもある。編成内容はFG300型偵察フリゲートII型1隻とFG300型多機能フリゲートII型2隻で編成し、現在も多数の哨戒部隊が太陽系哨戒の任務に就いている。

哨戒と同時に各惑星には地球防衛軍と共同で守備艦隊を組み、地球含む各惑星を守備している。冥王星が最前線となる。

さて、私はそろそろ…ん？…同志ギルド長からの念話か。

……………了解した、直ちに準備に入る。



一方その頃、

「索敵中のパトロール艦より入電。艦影を探知！友軍では無い！」

「冥王星守備艦隊、全艦戦闘配置！」

冥王星守備艦隊は戦闘配置に就き、ガトランティス艦隊の襲来に備えた。

## 第23話

地球防衛軍は、第11番惑星での失態——二度と奇襲攻撃を受けて壊滅的被害を貰わないよう、各惑星の守備艦隊を展開した。その中には同盟関係である、ミドガルドも含まれていた。

地球は到底知らないことだがミドガルドは元々、地球の人間だ。母なる地球を滅亡に迫いやるガトランティスの存在は、ミドガルドギルドのプレイヤー面々からすると頭が沸騰しそうな程の怒りを覚えた。それはもう、腹が煮えたぎりそうな程に…。

展開した守備艦隊は敵ガトランティスの小艦隊と小さくも激しい火花を散らし続けていった。因みに守備艦隊の戦力は80隻単位で編成されていた。無論、先の通り守備艦隊はミドガルド軍も含まれているので実質は連合守備艦隊だ。：内容は以下の通り。

地球防衛軍側の守備艦隊——

- ・ドレッドノート級戦艦×5隻
- ・金剛改Ⅱ型戦艦×15隻
- ・パトロール艦×2隻
- ・護衛艦×18隻

ミドガルド軍側の守備艦隊——

- ・プロテクト級航空戦闘艦Ⅱ型X3隻
- ・セレスター級航空戦闘空母Ⅱ型X5隻
- ・AC721スサナー重量級支援駆逐艦Ⅱ型X7隻

- ・ AC721スサナイ重量級ミサイル駆逐艦Ⅱ型X5隻
- ・ クワオアー級加速砲駆逐艦改X10隻
- ・ ツンドラ級戦術駆逐艦Ⅱ型X1隻
- ・ ルビー級エリーレイレーザー砲フリゲートX7隻
- ・ FG300型偵察フリゲートⅡ級X2隻

：以上が守備艦隊の内容であり、これだけで例に表すと旧国連宇宙海軍の2個艦隊以上の戦力となる。

ミドガルド、地球共に新鋭艦や改修艦が各惑星に配備された事で、より防衛力は強化されたのは間違いないだろう。事実、軍の損耗は低くなっている。

だが宇宙戦艦ヤマト発進から2ヶ月ちよつとが経とうとしている頃、ガトランティスは再び活動を活発化させてきた。

そして今、最前線とも言える冥王星にて土足で歩き回りちよつかいを出してくるガトランティス艦隊と冥王星守備艦隊との戦闘が開始されようとしている。

「索敵中のFG300型偵察フリゲート艦より入電。方角11時、伏角7度に艦影を探知。数は100！」

「エネルギー放射パターン測定を完了。：ガトランティスと識別」  
 「また、か。：懲りないことだ」

冥王星守備艦隊ミドガルド軍旗艦 プロテクト級ヘファラフェル  
 への艦橋で、前衛の偵察艦より入った敵艦発見の報に対し、渋い表

情を作った黒髪の女性指揮官が呟く。

深緑色を基調とした銀肩章付きの軍服を着用し、左胸に中佐を示す階級章を付けている。容姿は20代前半といったところ。

認識番号CT-5596 ファイラ中佐。冥王星守備ミドガルド艦隊司令兼プロテクト級ヘファラフェル艦長を兼任する指揮官だ。

「中央司令部、ならびに艦隊司令部に報告。――敵ガトランティス艦隊、冥王星沖に出現。迎撃態勢に入る――と」

「了解しました。司令部へ報告します」

「それと、敵の戦力情報も送れ。前回よりも数は多い。恐らく中小艦艇が殆どだろうが…」

本日で4回目の接敵となるが…接触率があまりに増えている。今まで数日から1週間に1回あるか無いかであったのが、ここまで極端に活発化してくるといふ事は、恐らくは何かあるのだろう。

遭遇戦で確認された艦種にカラクルム級戦艦は含まれてはいなかった。巡洋艦や駆逐艦が殆どを占めていた。

今回も、カラクルム級は含まれていないだろう。…だがそろそろ大きな軍事行動があってもおかしくは無い可能性が、一概にも捨てきれない。

何せ、第11番惑星の件に際はカラクルム級のみで構成された250万隻もの大軍が攻め込んで来たのだ。

もしもカラクルム級のみで構成された250万隻もの超大艦隊が再び攻めて来たら、とても守備艦隊だけで対処するなど無謀で不可能に等しいだろう。そうなればもう、即時後退する他ない。

だが、それでも……軍人として、出来得る限りの事をしてみせる。この場に集う冥王星守備艦隊の面々は誰しもがそう思っていた。

「全艦、戦闘配置を。…全セレスター級に通達。——ミストラル戦闘攻撃機、T-65 Xウィング・スターファイター、BLB-Yウィング・スターファイター隊を投入し、奇襲攻撃を！」

ファイラ司令の指示に従い、冥王星守備艦隊は戦闘態勢に入ると同時に全セレスター級から戦闘機、爆撃機編隊が次々と投入されていく中、ファイラはふと思った。

ここ最近の戦闘でバスターレーザーによる撃退も少なからずあり、もし今回もそれが叶うのであれば早々に片を付けておきたいものだと考えていた。

（撃退と言ったら、地球軍の奴等は波動砲で撃退していたな）

波動砲といえばイスカンダルとの和親条約で使用を固く禁じた兵器であるが、地球政府ならば防衛軍最上層部はその条約を反故にしたことは、ファイラも聞いている。というか実際に波動砲を使用している場面を何度も目撃しているのだから、普通に分かるというものだ。

「…データ照合完了。メダルーサ級2、ナスカ級20、ラスコー級35、ククルカン級43——以上！」

「メダルーサ級、か…」

FG300型偵察フリゲート艦Ⅱ級に備えられている高度な索敵機能によって、従来の艦よりも広い索敵範囲を獲得している。その偵察艦が斥候役となって、本隊に対し迅速に情報を送り込むことが可能となったのだが、今回もまさに、この機能が彼女等にとって救いの手となっていた。

メダルーサ級という言葉聞いたファイラ中佐は、この戦艦の危険性は十二分に理解していたことから、表情をより険しくしている。

「確かに、メダルーサ級なのだな？」

「私は今までに嘘を吐いたことは1度もありません。…間違いありません、コマンダーファイラ」

非常に厄介極まりない戦闘艦だ。第八浮遊大陸作戦時、もしもガミラス臣民の盾が無ければ苦戦を強いられることが容易に理解出来る程に、危険な艦艇なのだ。

（本格的な侵攻の兆し…ということか）

たかを括っていたファイラは掌を握り絞めた。いや、ここで悠長に考えている暇は無い。即座に行動に移さねば、アウトレンジで一

方的損害を被ってしまう。

「艦隊の間隔を広く取り、アウトレンジ攻撃に備えよ！ 通信士、至急司令部へ連絡。――敵はメダルーサ級を投入せり、本格的攻勢の可能性大――とな」

これではバスターレーザーを撃つことすら出来ない。

その直後、観測員がメダルーサ級に強力な光点と重力変動の感知を報告した。それに対しファイラは直ぐ様、搭載されているシステムを起動させる指示を出す。

「転送予測システム起動、各艦と連動開始せよ！」

「了解しました！全艦、システムに従い各自で回避運動を取れ！」

「回避運動開始！」

各艦の艦長達は、重力変動を感知した時点で瞬時の判断により回避行動に移っていた。艦体各所のスラストターを目一杯吹かして、観測宙域上からの回避を試みる。

「火焰直撃砲、来ますッ」

冥王星守備艦隊の全艦隊が灼熱の火焰に焼かれまいとして回避を行った直後、何もない空間の一部が揺らめき、そして次の瞬間には巨大な業火の濁流が現れて守備艦隊へ襲い掛かった。火焰直撃砲のエネルギー流が宇宙空間に飛び出して来たのだ。

「地球防衛軍含め、被害ありません！」

火焰直撃砲のエネルギー流が止む。

もしも宇宙戦艦ヤマトから攻撃予測データを貰い受け、ミドガルド含む同盟軍に共有されていなければ…今頃は業火の炎によって焼き尽くされていたに違いない。

ファイラは念の為、引き続き転送予測システム起動を維持するよう命じた。

「…ッ。火焰直撃砲、再び来ます！」

ファイラは自分に感謝した。

全艦隊は再び無事に第二波の火焰直撃砲を受けることも無かったが、このままでは埒が明かない。とはいえ、だ…。

「アルファ、ブラボー、デルタXウィング中隊は敵艦載機デスバデーダ隊と接敵するも全て撃破！」

「チャーリXウィング中隊、ミストラル攻撃機編隊、爆撃機編隊はメダルーサ級含む敵艦隊の1割を撃沈！なおも戦果拡大中！」

現在、艦隊は本意に動けない状況であるもののXウィングファイターやミストラル攻撃機、爆撃機の活躍により敵艦隊の内、1割を撃沈に追い込む戦果を上げてもお、現在も戦果拡大中だ。

撃沈した中にはメダルーサ級があり、メダルーサ級はミストラルと爆撃機編隊の活躍により全て撃破。

「地球艦隊の内、ドレッドノート級2隻以下護衛艦戦隊が小ワイプを実施。ジャンプしました」

「小ワイプだと?...まさか」

オペレーターからの報告にファエラは一瞬、眉を潜めたが直ぐに彼等の思惑を理解し感嘆の息を出した。

「小ワイプした地球艦隊、敵ガトランティス艦隊の前方斜め下にワイプアウトしました」

「同地球艦隊はラスコー級2隻撃沈、ナスカ級3隻を大破、ククルカン2隻を轟沈させる戦果を上げています。なおも戦果拡大中」

「ほう...」

ファイラは感じた。勝利への兆しが来ていることに...。

「ミドガルド艦隊将兵に告げる。勝利は目前だ。これより我が艦隊は地球軍を援護する。全艦隊、敵艦隊後方より某座標の距離8000宇宙キロに小ワイプを敢行。ワイプアウト後、敵艦隊後方より攻撃を仕掛けよ！」

「了解、全艦隊に通達。小ワイプ準備！目標、敵艦隊後方より某座標の8000宇宙キロ！」

ファイラ司令の指示に従い、将兵達は小ワイプ準備を整え始める。ワイプアウトする座標をガトランティス艦隊の後方に設定を終えた時、ファイラより小ワイプ号令が下された。

ファイラ率いるミドガルド艦隊は瞬きする間に、通常空間から消えていった。

通常空間から消えて、十秒もしない内にガトランティス艦隊後方にワイプアウトした。

「全艦、その場180度急速反転しつつ全主砲を敵艦隊へ標準合わせ！準備出来次第、各艦砲撃を開始。魚雷、ミサイルも出し惜しみ無く使え。これより挟撃を開始する！地球軍にもそう伝える！」

ファイラ率いるミドガルド艦隊：通称ファイラ艦隊は前方の地球艦隊と共に挟撃する陣形を執った。

「蹴散らせ、砲撃開始イ！」

ファイラ艦隊が一斉に砲門を開き、緑白いビーム群を放った。

旗艦へファラフェルへは、撃てる砲門を前方に指向するや、甲板上に集中して搭載されている49cmという四連装大口徑エリスレーザ砲を毎秒約2秒で撃ちまくる。

緑白いビームが螺旋を描きながら背中を向けている間抜けなガトランティス艦隊の集団に突き進む。

そんな中、ガトランティス艦隊の後方：ファイラ艦隊から見て前方の集団計20隻がファイラ艦隊に向けて回頭しているのだ。交戦可能距離圏内へと入ってしまったのに、だ。

各ミドガルド艦から繰り広げられる主砲や対艦ミサイル、魚雷群が一同に回頭中のガトランティス艦隊へと浴びせまくる。

あるガトランティス艦は量子魚雷を発射する間も無く撃沈され。

あるガトランティス艦は49cm四連装大口徑砲の主砲群に木っ端微塵にされ…。

あるガトランティス艦は撤退しようとするが、不幸にも機関部を集中的にミストラル戦闘機編隊から攻撃されてしまい、コントロール不能になって宙を漂い始めた挙げ句に追い打ちを掛けるように機銃とミサイルの雨が殺到後、爆沈。

可哀想なことに、凄まじい勢いでガトランティス艦隊は数を減らししていく。

数分が経過すると、冥王星沖に侵犯したガトランティス艦隊は冥王星守備艦隊によって全て撃破された。

冥王星守備艦隊の損害――

ミドガルド軍側：多機能型フリゲートⅡ級1隻小破、1隻中破。

地球防衛軍側　：金剛型Ⅱ級2隻小破、ドレッドノート級1隻小破。

：以上である。撃沈された友軍艦艇は0。

こうして、冥王星沖海戦は冥王星守備艦隊の勝利となり、此度の戦いは幕を下ろしたのであった。

## 第24話

「土星宙域」

太陽系第6番惑星の土星沖では、ガトランティス艦隊が来襲するであろうことを予期して、エンケラドゥス守備艦隊が巡回行動中にある。

この守備艦隊も、先日の冥王星守備艦隊と同じ規模で構成される規模の艦隊であり、その内2隻のFG300型偵察フリゲート艦と2隻のパトロール艦と2隻が距離を置いて索敵中。

「前方にワイプアウトを確認！ガトランティスです！規模…  
100…300…更に増大中！」

「艦種識別…カラクルム級戦艦です」

「全艦、第1種戦闘配置へ。それと、司令部に援軍要請を」

…であったのだが、現在は戦闘態勢を執っている最中だ。…カラクルム級ということは、やはり250万隻もの超大艦隊がやってくるということ…贅沢なことだ（震え）。

「地球軍、波動砲の発射準備に入るとのこと」

「ならば、我が軍もバスターレーザーの発射準備に入れ」

まあ、援軍が来るまでの間、持ち堪えようか。全滅覚悟でな。

しかしながら今この場に居るバスターレーザー搭載艦は、プロテクト級とセレスター級にクワオアー級加速砲駆逐艦改。

この状況下では砲雷撃戦よりもバスターレーザー使用の方を選択する。それが正解だ。間違いない。

ちなみにだが波動砲搭載艦はヤマト級にアンドロメダ級、ドレットノート級、金剛Ⅱ型改、護衛艦、パトロール艦である。

「敵艦隊、U字となり半包囲に移る模様です」

「バスターレーザー、発射準備完了！全艦とのデータリンク完了！」

「地球軍も波動砲の発射準備が完了し、データリンク完了したとのこと！」

既にカラクルム級の数は数十万隻となり、残り数十秒もすれば200万隻となる。

とても守備艦隊だけで対処するなど、不可能に等しいがバスターレーザーと波動砲であれば、戦果を得られるだろう。理想として戦果1万隻は欲しい。現実的では無いが…。

「バスターレーザー、発射ア！！！」

プロテクト級Ⅱ型やセレスター級Ⅱ型、クワオアー級改から発射された拡散バスターレーザーは、集団たるカラクルム級群を一挙に光の網に捉えた。それは既に発射していた波動砲も同じこと。

眩い光に包まれたカラクルム級群はバスターレーザーと波動砲の波に揉まれたかと思うと、あっという間にデブリへと成り果てた。

「冷却機能、最大稼働」

「戦果3200隻。…しかし」

「ワイプアウト増大中」

だが、それでもなお、カラクルム級群の勢いは止まらない。

3200隻ものカラクルム級を撃破してもなお、絶賛カラクルム級は現宙域にワイプアウト。そして、遂に撃破したカラクルム級含めての算定数が判明した。…頼むからこれ以上増えないで。

「敵艦隊の算定数、カラクルム級249万隻9960……いえ、更に後方、新たな集団がワイプアウト！」

「フっ、来たか」

…現実には非情である。250万隻、来てほしく無かった。泣きそうだ。創造されてこのかた泣いたことが泣い私は、今泣いても良いと思うが泣くのは後にしよう。

「ラスコー級14隻、ナスカ級26隻。更に大型の反応が1隻  
ッ、データベースにない未知の艦影です！」

「メインパネルに映せ」

……ふむ。1kmを超える巨体と4本の飛行甲板が有り、その飛行  
甲板上に500m級のカラクルム級戦闘艦を優に2隻つつ、並べる  
ことが出来る程の大きさだ。

さながら、ナスカ級の巨大バージョン兼進化バージョンと表すれ  
ばよいか…。

「この未知の敵艦を旗艦と設定。…航空隊全機急降下！」

予め出撃させていた航空隊が旗艦を護衛するラスコー級、ナスカ  
級を真上からミサイル攻撃と爆撃を敢行。地球軍も同様であり、ミ  
ドガルド航空隊に続いて地球航空隊もミサイルの雨を降らす。

それにより、旗艦を護衛していた全てのラスコー級とナスカ級は  
航空隊による攻撃をもろに受け、リングの中へと沈んでいった。

その直後である。

「敵旗艦、回転を始めた模様！」

並列に並んだ2つの円柱型を楕円型frisbeeが上下からサンド  
イッチした様な艦体が、最後部に聳え立つ艦橋と機関部の位置をそ

のままにして、回転を始めたのだ。

いったい何を…ん？甲板上に何かがある…？。

「敵旗艦大型空母より、地球軍の磯風型駆逐艦規模の大きさに匹敵する物体の発艦を確認」

「射出物体…いえ、飛行物体は急速に向かって来ています！」

「撃ち落とせー！」

艦長指示の下で急速に向かってくる飛行物体を迎撃する。ミドガルド軍は勿論の事、地球軍も同様に迎撃する。

しかし、これだけの迎撃で以ってしても、有効弾を出すことはままならない。

それは仕方が無いのかもしれない。

短剣状の独特な艦体構造を有しており、当然のことながら全幅は非常に狭い。地球軍の護衛艦よりも小さい幅であるし、まるでミサイルの如く、突っ込んで来ているのだから…。

まあ、例えばミサイルの如く突っ込んで来る物体が迎撃を掻い潜り、友軍艦に接触し衝突したとしても、エリスフィールドで防げるのだから…何も問題は無いのだ！。…私、フラグ建築していないよな？。

「先頭に居た地球軍の護衛艦8番艦。波動防壁を突破された模様！」

…フラグを建築してしまったか。

「護衛艦8番艦、串刺し後に速射輪胴砲塔で零距离攻撃されてしまひ轟沈！」

え〜と、地球軍の護衛艦F8は波動防壁はものの数秒も経たずに破られてしまひ、巨大なナイフとなって護衛艦の艦体に、文字通り突き刺さってしまったようであり、その直後に両舷に装備している速射輪胴砲塔で以って零距离射撃で放って滅多打ちにされて…この世からサヨナラした。

他人事で言ってしまったているが、こんなもん溜まったもんではない。某帝国の「天皇陛下万歳」特攻と同じくらいに、たちが悪い。本当に。

次々と1隻、また1隻、と餌食となっている最中であるエンケラドゥス守備艦隊。挙句には、地球軍次世代主力量産型戦艦であるドレッドノート級までも餌食となった。嫌だ、餌食になりたくない！。

ちなみに今もなも万歳特攻しているこの小型艦の名称はイーターだそうだ。名称を知ったのは傍受したからである。それよりも…地球含め守備艦隊の被害は大きい。

地球軍のドレッドノート級2隻、金剛II型改8隻、護衛艦3隻が犠牲に。我がミドガルド軍はクワオアー級改3隻、AC721スサ

ナー級Ⅱ型（ミサイル型含む）2隻、ルビー級7隻が犠牲となった。

飛来して来たイーターI全て撃破出来たとはいえ、油断は出来ないところだ。

「コマンダー、我が方の残存艦は?!」

「本艦以下プロテクト級Ⅱ型3、セレスター級Ⅱ型5、クワオアⅠ級改4、AC721スサナー支援級Ⅱ型7、AC721スサナーⅡ級ミサイル型3、FG300型偵察フリゲート2隻です」

「上方より、敵カラクルム級多数接近ッ!」

「おのれッ……!」

だが1つ言わせて欲しい……お終いだ!神は言っている。此処で死ぬ定めだと。嫌だ、死にたくない!そう思っていたその時……

「上方より接近中のカラクルム級全て消滅!」

なんと膨大な艦隊を青い光の波へと呑み込んでいったのだ。

「我が艦隊後方より高エネルギー反応を検知。……これは、波動砲です!」

「艦隊識別……地球軍の山南艦隊です!」

……助かった?

……同志に告げる。

頭に直接語り掛けてくるこの声は…同志か！同志、助かったぞ。

…礼には及ばない。後は任せろ。

うむ、任せたぞ。では守備艦隊は後退するでしょう。

「山南艦隊の後方よりワイプアウト反応多数…友軍です！」

フフフっ、これはもう勝ったな。

## 第25話

〈オリビアNPC SIDE〉

——同志よ、助かったぞ。

礼には及ばん同志。

「エンケラドゥス守備隊の健在を確認」

「エンケラドゥス守備隊残存艦、退避行動に移る」

しかし、よくもまあ、守備隊をポッコボコにしてくれたな。ガトランティス。

「報告、第1連合艦隊右翼ならび左翼に友軍艦隊ワイプアウト。第2、3艦隊の到着を確認」

「連合艦隊中央後方に空間跳躍反応を観測。友軍の第4、5艦隊です」

ガトランティス、地球を滅亡させんとする存在：そのような存在は荒らしと断定せねばならない。此方としてはストレス発散出来て何よりであるが。

それはそうと：艦隊のワイプアウト光景は、とても美しい。

ミドガルド・地球艦隊のそれは、「威風」「堂々」「圧巻」おま

けに「規律」という四拍子を揃えていて、どの艦隊もが綺麗な隊列を維持している。見事なまでに足並み並の揃ったワイプアウトは、威容で圧巻な様を見せつけた。

とても美しい。本当に。

「敵ガトランティス艦隊の某集団に変化有り。敵旗艦前列のカルム級60隻が、陣形を変えています」

ほう、陣形を変えているのか。…ん？60隻だけで？

戦況スクリーンとは別に投影される某集団のみをクローズアップしたディスプレイには、確かにカラカルム級60隻が慌ただしく艦列を組み直す様が見える。

私は困惑した。何がしたいんだ。だが次の瞬間、私は悟る。

その組まれつつある陣形が徐々に直列陣であることを察した途端、私は悟った。

間違いない。インフェルノ・カノーネを使うつもりだ。それも自らの艦を犠牲にしての。

もっとも…、

「《アンドロメダ》、《アキレス》、《アルデbaran》、《アンタレス》、《アポロノーム》、重力子スプレッドを発射し、グラビ

「ティ・フィールドを展開」

この重力子スプレッドが持つグラビティ・フィールドの前には無力だがな。

5隻のアンドロメダ級の重力子スプレッド発射機砲身から、凝縮された波動エネルギーが青白い光弾となって発射。

それぞれが艦隊前方に突き進み、やがて強力な閃光が放たれた。すると、青白い輝きを放つ巨大な靄の様なものが形成。これが、重力子スプレッドがもたらす特殊なフィールドこと、グラビティ・フィールド。

計算上ではインフェルノ・カノーネを防げるばかりか、火焰直撃砲をも防ぐことが可能である代物だ。

その証拠に…、

「インフェルノ・カノーネ発射を確認！」

「来ます！」

「着弾を確認：グラビティ・フィールドでの防御成功！」

そもそもこのインフェルノ・カノーネと火焰直撃砲の2点は、惑星を破壊する程の力は持たない為、防ぐことなど容易だ。

インフェルノ・カノーネを防げたことで、ガトランティス旗艦に座乗する指揮官に小さくない動揺を与えたことだろう。やったね。

「敵艦隊、我が方の射程圏内まで後20秒」

「敵艦隊前方のリング下方より、高エネルギー反応を検知。拡散波動砲です」

防げたと同時に、土星沖のリング下より青く輝く矢が現れた。拡散波動砲だ。

拡散波動砲はカラクルム級の艦底からボディアッパーを喰らわせ、次々と粉碎していく。真っ二つに砕け折られていく。

数秒後、土星リングから出てきたのは、水飛沫を上げるが如くアステロイドをまき散らして浮上。正体は、ドレッドノート級とAC721スサナー級II型の集団。

その集団は第2連合艦隊の先陣として駆けつけて来た第6艦隊だ。第6艦隊はずっとこの瞬間の為に、土星リングの中で息を潜めていたのだ。

リングから現れた多数のドレッドノート級とAC721スサナー級II型は、目の前の敵に主砲をお見舞い。爆炎を上げ、火を噴き上げるカラクルム級が続出し、撃沈してゆく。

「第1連合艦隊後方、空間跳躍反応。第2連合艦隊の第7、第8、第9艦隊です」

「敵艦隊、我が方の射程圏内に入りました」

「全艦、砲撃開始！」

到着した第2連合艦隊は、直ぐに戦列に参加した。それと同時に射程圏内に入った連合艦隊は砲撃を開始。ちなみに第9艦隊の構成は全て、我がミドガルド軍で構成されている。

砲撃の他、前方に展開しているクワオアー級改とプロテクト級II型の50隻は拡散バスターレーザーを発射。戦果を挙げてゆく。

戦果を挙げているのは当然に我がミドガルド軍だけでなく、地球軍も砲撃に加えて拡散波動砲での戦果も挙げる。

苛烈な砲撃戦を繰り広げて、しばらくすると戦果は248万隻を超えた。：こもカラクルム級を沢山に沈めていると、弱い印象を持ってしまふな。第八浮遊大陸作戦の際は、最強オーラがとてもあったというのに：。

：だがこの250万隻はあくまでも前座に過ぎない。本命は、白色彗星だ。

白色彗星はガトランティスの拠点であることが判明された。で、あれば、そろそろやって来てもおかしくは無い。

「：！中将閣下。敵艦隊より更に後方、巨大な空間跳躍反応を観測！ 質量、計測不能！！」

「白色彗星です！ワープアウトします！」

……来たか。

「白色彗星、出現！」

オペレーターが報告した直後、巨大な白色彗星が姿を現したのである。

《ヤマト》からの報告通りだ。

それでも圧巻の一言に尽いていて、白色彗星の超重力の影響によって土星に悪影響が出始めている。土星のリングも重力に引かれて散り散りになり始めており、いずれは土星そのものが崩壊してしまうのも時間の問題だろう。

「白色彗星の予測進行針路は……地球です！」

だが此処で止めねば、荒らしガトランティスに地球を滅ぼられてしまう。それは阻止しなくてはならない。ギッタギタのボッコボコにしてくれるわ。

「敵残存艦隊、敵旗艦を中心に後退を始めました。白色彗星に針路を譲る形です」

「損傷の激しい艦は戦線の離脱を許可する。残る戦闘艦艇も一時後退し予定通り、プランMに移行。：バスターレーザーの一斉砲撃を以って、白色彗星に潜む敵本拠地を殲滅する！ 全艦隊、マルチ隊形！」

「了解しました、中将閣下」

「航空隊、全機発艦せよ。艦隊防空に務め！」

戦闘で被弾した戦闘艦が、次々と艦首を翻して離脱を始めていく。まだまだ戦闘が可能な艦は残り、白色彗星撃滅の為にプランMを実行すべく、急速反転後に白色彗星との距離を引き離し戦線を下げる。

後退するミドガルド・地球艦隊は、予定の宙域で後退を止めると、プランMとして組まれた陣形に変換し始めていく。

ミドガルドはミドガルドで組み、地球は地球で組んでゆく。

「マルチ隊形展開完了」

「各旗艦。重力子スプレッド斉射」

「バスターレーザー発射用意！」

ちなみであるがアンドロメダ級は地球軍の他、我々ミドガルド軍も10隻保有。数は10隻であり4隻はライセンス生産で、6隻はミドガルド版である。波動砲も撃てる。

ライセンス生産+ミドガルド版アンドロメダ級は第2連合艦隊の第9艦隊に組み込まれている。

「白色彗星、増速！」

「バスターレーザー充填率90%」

「重力フィールドの収束率、安定値へ」

「目標、白色彗星中心核。セット20の45」

白色彗星内部の巨大人工天体の存在は、ミドガルド軍…ミドガル

ドギルドも知るところだ。

故に、これを破壊する為の戦術を考案し、実証しようとしていた。9830隻分の波動砲と10000隻分のバスターレーザーを、グラビティ・フィールドへ向けて集中砲撃すると、重力の影響で波動エネルギーとエリスエネルギーは一気に集約される。

グラビティ・フィールドに当てられると、予想もつかない超巨大エネルギー兵器として威力を発揮するのだ。これだけのエリスエネルギーと波動エネルギーを浴びて、果たして白色彗星が無傷でいられようか？

「バスターレーザー充填率120%を突破！」

「拡散バスターレーザーから収束バスターレーザーへ！全艦連動！」

「カウントダウン開始！」

だが、不安だ。

「……10……9……8……7……」

もし通じたら問題無い。

「……6……5……4……」

もし通じなかったら…神を罵倒…ハッ！ 神を罵倒するということは、同志創造主含むプレイヤーを罵ると同義！…だ、大丈夫だ。同志創造主に罵った訳では無い。だから私を捨てないで（懇願）。

「発射アッ！！」

ビックリした！？…戦況を観察せねば。

艦隊から放たれたバスターレーザーと波動砲は、グラビティ・フィールドに吸収されると同時に十数の巨大なバスターレーザーと波動砲の束となって、白色彗星に突き進む。

途中で無謀にも、バスターレーザーと波動砲進行の邪魔をしていたカラクルム級13000隻を消し飛ばした。

「バスターレーザーならびに波動砲、白色彗星に命中！」

やがてはバスターレーザー・波動砲艦隊の一斉射は白色彗星を覆う霧を吹き飛ばすに至った。命中した途端、白色彗星に変化が。

渦巻く白いガスが紅蓮の炎に包まれたかと思えば、巨大な火球へと変貌を始めた。その紅蓮の炎と爆発が白色彗星を包み込んでゆく。

効果があったのか、白色彗星は止まり、単なる燃え盛った火球と成り果てたようであった。

や、やったか！…今、フラグを建築したような気が。い、いや大丈夫…な筈だ、うん…同志中将？

「はい、オリビア將軍。我々は白色彗星を殲滅に成功…殲滅出

来たんですよね？」

いや、そこは自信满满持って言って欲しかった。…同志中将、後退の準備を頼む。

「そ、それは…」

念の為だ。それに準備をするだけだ。

「は、はっ！」

…白色彗星はどう…消滅していない。

寧ろ、白色ガスを纏って不透明だった内部が、鮮明になりつつあった。これまでは白色ガスが纏わりついて、彗星に擬態化していたが、そのガスのみが爆発し、中の人工物が次第に姿を見せていった。

私は感じた。その言い知れぬ存在感と恐怖感に。

「あれは、惑星…」

最初に見えたのは、火星と同等を誇る惑星。

「へヤマト」の報告通り——ッ！！」

それも、1つに限らず、全部で5つもの惑星が薄れつつあるガス層の中から姿を現した。白色彗星の中に5つもの惑星を内蔵してい

たとは驚きではあるが、驚くのはそれだけに留まらなかった。

なんと5つの惑星の周囲に、別の影が見えて始めて来た。しかも、惑星を遥かに上回る規模の人工物であるよう。

「あ、アレが……っ」

同志中將が呟く。その呟きはこの場に集う全員を代弁するようであった。

「ガトランティスの正体……！」

5つもの惑星を上回る木星規模の人工天体が、姿を現したのである。

人工天体の天辺部分には、都市か何かを思わせるビル郡らしきものが聳え立っている。中央には1つのタワーが聳え立ち、2列ある赤い目が20確認出来る。巨大戦艦の艦首のようにも見える。

天頂部分から下方へと延びる、幾つもの縦長構造物は、まるで脚か檻のようなものだ。

木星規模を誇るアレは漆黒色に近く、青く輝く線が多々、至るところに走っている。

何事も無かったかの如く、ガトランティスの拠点である白色彗星は少しずつ動き出す。その針路先には土星が重なっており、土星は

白色彗星の重力場と強引な接触によって、文字通り崩壊を始めていく。

以降はアレを、彗星都市帝国と呼称しよう。彗星都市帝国が進むだけで土星がバラバラになっていく様子は、十分な脅威と威圧を与えているよう。実際そうなのだが。

「オリビア將軍、後退の準備が整いました。後退しますか？」

フフ、決まっている。後退だ！

「はっ！…全艦隊に告げる。直ちに「中将閣下！」…いったいなんだっ？」

「ち、地球艦隊。波動砲へのエネルギー再充填を開始ッ！」

なんだと！？

## 第26話

「ち、地球艦隊。波動砲へのエネルギー再充填を開始ッ！」

なんだと！？ 山南総司令官はいったい何を考えている?! こ  
こは距離を置くべきだろうッ?!

「コマンダー、地球艦隊の総旗艦との直接回線を開け！」

「中将閣下、それは間に合いません!地球艦隊、波動砲を発射!！」  
「なんだと!？」

なんたることだ。……ん?何だ、アレは?

疑問に思ったと同時に、彗星都市帝国の上部と下部に巨大な赤い  
リングが現れたのだ。

薄く光るリングはその輝き度合いを強めていたが、既に波動砲の  
発射態勢を整え終えていた地球艦隊は波動砲を発射した。

地球艦隊はこのリングに対する警戒感よりも、発射を最優先とし  
たよう。なんてこった。

彗星都市帝国でも波動砲に対するリアクションを見せていた。

地球艦隊より放たれた波動砲の集中砲火は、そのまま彗星都市帝  
国の中心ないし都市部へと突き進んで行き、そのまま命中し壊滅的

な被害を与えること間違い無し！

…かに、思えた。

「白色彗星の上下ならび中央より、強力な重力場を検知！」

その報告を聞いた瞬間、私は勿論のことミドガルド将兵一同は、ありえない光景を目の当たりした。

9800以上もの波動砲の束が彗星都市帝国へ命中する直前、強力な重力場によって強制的に捻じ曲げられたと思えば、その薄く光る赤いリングへ吸い込まれ、何事も無かったかのように消え去った。

量産型であるドレッドノート級にも標準装備されている波動砲は、惑星を一撃で以って死に至らせる。それが無効化された。

ふと、今のアレを見て思い出した事がある。

波動砲を無力化したアレ……技術開発部が作り上げたものと似ているような…？

しかし、驚くばかりでは済まされなかった。

突然にガクン、と艦が揺れ動いたのだ。思わず足のバランスが崩れ、転んでしまうのではと感ずる程に。

突破的な出来事に私は…では無く同志中将は態勢を立て直しなが

らも副長である同志コマンダーに問いかけた。

「報告しろッ！」

「強力な重力傾斜ですッ。白色彗星から発せられている模様！」

「重力傾斜、更に高まるッ。計測不能ッ、全艦隊にまで重力傾斜の影響が及んでいます！」

なんたることだ。

「反転、全艦離脱！」

しかし、ここまでの距離が離れていながらも影響を受けるとは予想だにしていなかった。

「反転、全艦離脱！」

彗星都市帝国へ引き寄せられる中で地球艦隊の総司令官である山南修は、全艦隊へ離脱命令を下したが：既に遅かった。

重力傾斜で引き寄せられた両艦隊のマルチ隊形は、あっという間にバラバラになった。

アンドロメダ級やドレッドノート級らは、傾く艦体のバランスを保つ為に、姿勢制御スラスターによる姿勢の安定を懸命に行った。

しかし、中々に回頭はままららない。

かくいう一方、ミドガルド艦隊は回頭の方は地球艦隊同様に順調とはならないものの、地球艦隊よりも先に離脱が出来そうであった。

だが、「先に離脱出来そう」である。断定では無い。

一方で、幸いにして後方待機していた地球艦隊の護衛艦隊とバスターレーザー非搭載のミドガルド艦隊は、重力傾斜の影響を多く受けずに済み、早々と離脱を開始することが出来た。

また、両航空隊も素早く重力圏の影響が無い宙域まで後退を始めた。

波動砲とバスターレーザー戦を重視したマルチ隊形が、この時ばかりは仇となってしまったのであった。

## 第27話

次々と入る友軍艦から悲鳴にも等しい程の通信が、総旗艦へアンドロメダへとやって来ている。

その全てが、離脱できずに呑み込まれていくものであった。

更には、態勢を立て直すことが出来ずに、勢い余って僚艦同士で衝突する艦も続出していた。波動砲戦を重視したマルチ隊形が、この時ばかりは仇になってしまったのである。

懸命にも重力傾斜から逃れようにも波動砲を連射してしまったのである。なんとか補助エンジンの力で離脱を試みているが、主機関のエネルギー量が少ない関係もあり、ただ虚しく、次々と呑み込まれてゆく。

地球軍総司令官兼アンドロメダ艦長を務める山南修は、悔しさのあまりに拳を握る。

ミドガルド艦隊も同じである：のだがミドガルド艦隊は地球艦隊と比べ、呑み込まれてゆく艦は少ない。

そんな山南の想いなんぞ知らないガトランティスは、「アレ」を叩き込もうとしていた。

「ただちに「破滅ミサイル」を発射せよ。偉大なるズオーダー大

帝陛下へ楯突く、身の程も知らず者共に鉄槌を下すのだ」

そう命じたのは老将の男、ゲーニッツである。ガトランティス艦隊司令長官として、膨大な数の艦隊を掌握する司令長官。

都市帝国内部にて遊弋待機中であつたゴストーク級ミサイル戦艦群の一部から、新兵器である反物質ミサイル：『破滅ミサイル』が、一斉に発射されたのだ。

この破滅ミサイルはテレザートを守備していたゴーランド提督率いる守備艦隊にも、旗艦へゴーランドのみ装備されていた。

命中した物質を粉々に粉碎しつつ分解させ、あまつさえ周辺宙域に激しい乱気流を生じさせる性質を持っている。その破壊力はテレザートを封鎖していた巨大な岩盤をも、だ。

恐ろしや恐ろしやである。

そんな代物である破滅ミサイルはゲーニッツ司令長官の命令により、発射。心臓に突き立てられる杭の如く、地球・ミドガルド艦隊へ投げつけられた。

「敵人工天体内部より、多数のミサイルらしき物体を感知ッ。数は60！」

発射された破滅ミサイルの数は少なけれど、大損害を与えることが可能だ。

地球・ミドガルド艦隊の多くは回頭中だが、それでも各旗艦各艦は迎撃を敢行。

第9艦隊旗艦MMMアンドロメダ級へマリクレールではオリビアNPC-1883が自虐的な笑みを浮かべながらも、迎撃と離脱の双方を熟そうとしていた。

「盛大なサービスであるな。：迎撃開始」

ミドガルド艦艇のみで構成された第9艦隊は迎撃を開始。量産型であるAC721スサナー級II型ならび同ミサイル型を中心に破滅ミサイルを迎撃。

ミサイルと魚雷の束は、重力波の流れに対して、半ば乗るようにして破滅ミサイルへと向かった。砲撃による迎撃も行われている。

やがて、集中砲火が功を奏したのか、破滅ミサイルが次々と誤爆した——強力な反物質の渦巻く嵐と衝撃波を伴って。

「衝撃波、来ます！」

「衝撃に備え！」

アンドロメダ級へアポロノームでは重力傾斜の影響で、他のアンドロメダ級よりもやや前方にいた為、その衝撃波を最初に浴びることとなる。

衝撃波に襲われるヘアポロノームであったが幸いにも波動防壁によって守られた。

とはいえ、連続の波動砲発射と宙域脱出の為に機関にエネルギーを回している関係で、波動防壁に回せるエネルギーが残り僅かしか残されていなかった。

そんな時、第二派がやって来た。

その内の一発の破滅ミサイルがヘアポロノームの迎撃を掻い潜り、至近を通過した直後に爆発。機関部に影響が出る程の被害を貰ってしまう。

しかしそんなヘアポロノームよりも最も被害を貰っている艦が1隻いた。

「ヘアンドロメダ、艦首下部を損失し徐々に重力に引き込まれています！」

アンドロメダ級1番艦ヘアンドロメダである。オペレーターは続けてヘアンドロメダ大破の報告をする。それにヘアポロノームの艦長である安田は敏感に反応し、ヘアンドロメダの姿を画面越しで確認した彼はゴクリと息を飲んだ。

総旗艦ヘアンドロメダは、あの堂々たる戦女神の姿を失っていた。波動砲の発射機構がある艦首下部が破損し無くなる程に。

航行不能に陥る一步手前にあり、その証拠にへアンドロメダは重力に逆らえずに引き込まれつつあった。

彼を失う訳にはいかない。安田は直ぐに指示を出した。

「機関長、最大出力を維持できる時間は！」

「ワープ出力なら多く見積もっても三〇秒とちょっとであれば……」

「十分だ、航海長！本艦左舷をへアンドロメダへ右舷に接舷させる。そのまま出力最大でへアンドロメダを押し上げる！」

『——！？』

それはつまり、自分らは犠牲となってへアンドロメダを助けるという事。誰もが驚く中で副長が安田の命令に率先して頷いた。

一人また一人と安田へと頷き、安田からの命令を復唱し行動に移った。

「……すまない」

安田は誰にも聞こえることはない小さい声音で、感謝の意と謝罪を言葉にした。

波動砲口が大破しエンジン出力が低下傾向となり、最早これまでかと感じ取った山南であったがそんな時、艦首右舷側に衝撃がやって来たのだ。

「ヘアポロノーム、接触！」

山南が顔を上げたと同時に映像通信が入り、モニタに投影される。

『山南総司令、行ってください！』

「安田、艦長……」

『我がヘアポロノームは残る出力でヘアンドロメダを押し上げます！』

「……」

あくまでも、職務を全うする軍人としての顔で、山南に提案する安田。

しかし山南は彼の行動に啞然としていた。何と言葉を発して安田に送ればいいのか分からない。ヘアポロノームの…安田が今していることのそれは…。

そんな山南の表情を見た安田は、素で最期の言葉を送る。

『山南総司令……山南、お前は最善を尽くした』

「や、安田……！」

最善を尽くしたただなんてやめてくれ。俺は、俺は……！ だがその山南の想いを口から出せることが出来ず、ただ彼の……親友の名を呼ぶことしか出来ないでいた。

『健闘を祈る！』

安田は姿勢を直し敬礼した。それが区切りであるかのように映像通信が終わった。

そうして数分もしない内に沈降していたヘアポロノームは10以上もの破滅ミサイルからの攻撃により……爆沈した。

「安田……！」

一部始終を垣間見ていた山南は『シグナル・ロスト』となっている砂嵐状態の映像通信スクリーンから目線を落とし、力なく首を垂れた。

司令官として屈辱的な敗北を喫した事もそうだが一番はやはり、

親友の安田を失った喪失感だった。

艦長席の肘掛けに置いていた掌を強く握りしめる山南は、何も声を発する事も出来ず、ただ、ただ、残存艦隊が離脱するのを待つばかりだ。

だがいつまでも落ち込んでいる訳にはいかない。そう無理やり気持ちを入れ替えた山南。兎も角は機関部の応急修理を行う必要がある。

「機関部の応急修理作業を開始。手の空いている者は、最優先に機関部を修復せよ！」

艦内クルーに機関部の修復を急がせる。ヘアンドロメダは被弾の影響があったにせよ、一応は自力で航行が可能な状態だ。

しかし、だ。

ワイプが出来ず、あまつさえ戦闘用に使うエネルギーすら余裕が無い状況。現時点では、四基の補助機関からエネルギーを回しており、戦闘不可能にしる生命維持装置は継続して稼働している事は、安堵の息を漏らす一同であった。

だが、これでは総旗艦として機能することは不可能だ。最悪の場合、ヘアンドロメダを乗り捨てる事も可能性としては濃厚気味であったがこの宙域での退艦は望ましくない。退艦途中に狙われたら元も子も無い。

どうするべきか、と頭を悩ませる山南であったが副官から提案を受ける。

内容としては両舷にドレッドノート級を重力アンカーによって接触そして接続し、推進機関代わりとすることで地球圏まで離脱、時間断層にて修理すること。

山南は提案を承諾。副官は復唱した。

この戦いで戦力を大きく削がれた地球・ミドガルド軍。未だ膨大な戦闘艦艇を保有するガトランティスに抗う術は無いだろう。

だが、地球連邦政府は徹底抗戦を選り：いや確実に選ぶ。何故なら負ければ全てを破壊されるのだから。

しばらくすると新たな連絡がヘアンドロメダへ入ってきた。

「司令部より緊急電です。我が軍とガミラス軍、ミドガルド軍の増援部隊が急行中！」

「増援……今、ここに来たところで、巻き返せる筈がない」

まずガミラス軍の主力はクリピテラ級、ケルカピア級、デストリア級といった中小艦艇であり、戦艦クラスは少数だ。

戦艦クラスは主に艦隊旗艦として運用する事が多い。あのカラクルム級と対抗することを考えるのであれば、ゼルグート級やハ

イゼラード級、メルトリア級が必要だ。或は、実弾兵器の集中使用ならば、ガイデロール級を旗艦とし快速性に勝る中小艦艇でも対抗の余地ありと考えられる。

ミドガルド軍であるが：正直なところミドガルドはかなり謎で、そしてガミラス以上に畏怖する存在だ。

ミドガルドはアンドロメダ銀河からやって来た存在であり、地球・地球人類を愛し、神聖視していること。技術力・軍事力は大小マゼランの覇者とも名高い、ガミラス以上であり、地球防衛軍の虎の子である、波動砲と同じ原理であろう決戦兵器を保有していること。

後者に関して：軍事力に関してはあくまでも、である。しかし、だ。

土星沖海戦に参加したミドガルド戦闘艦艇は、ガミラス軍保有隻数と同等の戦力が集結してきたのだ。ガミラス以上の国力を持っていることは間違いないと見てよいだろう。

しかし、それでもガトランティスの膨大な戦力には届かない。

となれば、彗星を足止めする為の部隊か。そう考えたものの、司令部が考える事に口を差し挟む余裕はない。

「後続の増援に任せるしかあるまい。副長、他の旗艦で無事な艦は？」

「ヘアンタレス」ヘドロットニングホルム」ヘデマヴェンド」の3隻、残りは中破判定です」

「そうか：ヘアンタレス」ヘドロットニングホルム」ヘデマヴェンド」は、戦闘可能な艦艇群を再編して現宙域に留まり、増援部隊と合流。その後は増援部隊並びに司令部の指示に従う様に。残る艦艇は、修理の為に一時地球へ帰還する」

山南の命を受けた三艦は、残存艦艇1140隻を纏め上げる間に、残る艦艇が次々とワープで離脱を凶った。総旗艦であるヘアンドロメダ」は最後まで留まり、全てを見送ってから離脱しようと考えていた——ヘヤマト」が白色彗星の目前にワープアウトしたのは、まさにこの時だった。

「ヘヤマト」、白色彗星前方にワープアウト！」

「・・・」

「土方司令より入電。『これより、トランジット波動砲により彗星の破壊試みる』：以上です！」

「土方さん……」

かの上司であり先輩でもある彼が、土方が指揮するヘヤマト」そのヘヤマト」が、単艦でガトランティス本拠地を…。

今の自分には…自分達には何も出来ない以上、見守るしかない。

山南を含め、この戦場に集う将兵の誰もが固唾を飲んで見守る。

だがこの後、彼らは絶句することとなる。自分達が「それ」を知ることになるのは、数分も経たない後の出来事であった。

第28話

「へヤマト、白色彗星前方にワイプアウト！」

ヤマトだと？ テレザート星へ任務の為に地球から旅立った、あのヤマトか。確か、同志古代艦長代理が指揮を執っていたが、現在は同志土方宙将が指揮を執っている…。

ヤマトは何をしようとしているんだ？

まさかだが、波動砲で挑むつもりか？…どう考えても無理では？？

バスターレーザー艦隊と波動砲艦隊の総力結集してもなお、無力化されたのだ。

どう考えても、いや、考えることすら必要が無いぐらい、誰でも分かるのだ。…通常艦艇では無理である、と。

通常艦艇でさえバスターレーザー艦や波動砲艦だが…ガミラスはその、な？

「へヤマト、波動砲へのエネルギー収束を開始」

「エネルギー収束率上昇…いえっ、こ、これは、異常上昇です！通常の数倍の数値！」

…む？、この数値、地球の最新鋭艦であるアンドロメダ級よりも大きく上回っている。いや、遥かにが正しいだろう。

「報告。ヘアンドロメダ、後部両舷の補助推進機関部に、ドレツドノート級2隻が接続。時間断層にて緊急修理に移るとのこと」

アンドロメダといえば…そのアンドロメダの一番艦のヘアンドロメダは時間断層にて緊急修理しなければならない程に酷い損傷だ。

はよ離脱しろと声高に言いたいぐらいだ。まあ、引き継ぎ云々があるのは軍として当然。

「オリビア將軍閣下。地球連邦政府大統領ニコラス・ベネットの声明が発表されております」

地球連邦政府大統領ニコラス・ベネット…全艦隊にか？

「はい、全通信チャンネルを介してです」

そうか、…回線を開け。

「はっ！」

内容はやはり…。

『…我々、地球人類は、侵略に膝を折るつもりは無い。3年前にも滅びの淵から這い上がってきた我々だ。地球人類は決して屈

しない！我々は最後まで戦い続ける！自由と平和を守る為に、子供達の明日の為に！！』

徹底抗戦をする声明であったか。当然だな、負ければ全てが失うのだから。

ミドガルドギルドもかつては…。

「…ッ！へヤマト、トランジット波動砲、発射体制を解除！」

「な…ッ！？」

なんだと！？

「へヤマト、更に機関を停止した模様。重力傾斜に捕まりました！」

い、いったい何が…ッ！ 機関部の不調か？ あるいは何者かが意図的にっ？

意図的であればそれは許すまじ行為である。

何はともあれ呆然と見続けている訳にもいかない。このままでは、へヤマトは白色彗星に呑み込まれてしまう。

そう思っていた時である。へアンタレスがヤマトの救助に向かったのだ。

頼んだぞ、ヘアンタレス。ああ、でも、念のため救助応援しよう。やって来るガトランティスの戦闘艦艇を追い払おう。

~~~~10分後~~~~

「ヘアンタレス、重力傾斜の影響範囲外への退避を開始！」

「へやマト、彗星の中へと吸い込まれていきます！」

なんてこった。

「オリビア將軍、本艦も引きずり込まれつつあります」

…致し方ない。左反転一八〇度、重力傾斜の影響圏外まで退避せよ。急げ。

「はっ！」

ヘアンタレスがヘアンドロメダとすれ違う頃になり、ガトランティスの新たな動きが感知された。

「白色彗星内部にて新たな反応を検知、ガトランティスの増援と思われる。数およそ1万！」

…離脱を急げ。

「はっ！」

約10000隻の戦艦艦艇、か。このガトランティス艦隊はおそらく掃討の為に差し向けてきていること間違いなし。

これに対し我々ミドガルド軍も含めても真面に戦える艦艇が半分はあるとはいえ、これでも十分に危険な戦力。

デ・ブラン帝国と“かの存在”での戦争では少ない損害を貰ったが、ガトランティスとの戦争はそれ以上だな。

反転離脱を開始するへアンドロメダとへアンタレス、そして私が座乗する艦を逃すまいと、ガトランティス軍1万隻は傘に掛かって追撃を始めて来ている。来るな来るな戻れ戻れ。

「敵艦隊の一部より破滅ミサイルが発射、数は8！」

だから来るな来るな戻れ戻れ。お前（破滅ミサイル）は特に来るな回れ右しろ。

「敵ミサイル、さらに加速！」

ああ、もうなんて理不尽な日なのだ！援軍はよ来いであるな本当！

…んっ、なんだ、こんな時にテレパシー念話っ！

………フフフっ、ああ、了解した、援軍を心待ちに待っている

ぞ、同志創造主？ 楽しみにな。

へ？？？？SIDE

ガトランティスは『蛮族』とも揶揄されている、典型的な戦闘種族。

そう呼ばれているのは彼等ガトランティスが闘争心剥き出しで、手あたり次第に襲い掛かるからだ。宣戦布告も無く、目の前にあれば飛びついて食らい尽くす。

科学者のみが奴隷として確保され、それ以外は女子供関係なく殺される。

確保された科学奴隷はガトランティス軍の技術を向上させている糧とされ、蛮族と呼ばれながらも侮れない所以とも言える。…だが彼等ガトランティスは唯の典型的な戦闘種族では無い。

ガトランティスは宇宙中を駆け抜けては星々を席卷し、他文明を押し、根絶する。ガトランティスの進撃は止まらない。…次なるその対象は地球。

まさに唾棄すべき『忌むべき存在』。『遺産』によるものとはいえ、それだけの戦力を保持しているガトランティスの存在は、脅威

以外の何者でもない。

『遺産』はガトランティス以上に忌むべき、『かの存在』が造ったものだ。

『遺産』は目覚めている。だが「真に目覚めている」訳では無い。

『大いなる和』が中心となり、ガトランティスと『遺産』による進撃を阻止することは『シナリオ通り』とはいえ、必ずしも「その通り」になることなど絶対はない。

「保険」はどんな時でも必要なのだから…。

第29話

「ミドガルド本部 イラム星」

今日はミドガルドギルドにとって重要で、そして記念すべき日となる。

本部が置かれているこのイラム星では、飾り付けや式典の準備などで慌ただしい。

『今日はギルド長が、ミドガルドギルドを創設した記念すべき日です』

WSO世界にてミドガルドギルド創設宣言が行われ、創設された日。

「リアル世界」より転移した日が今日で26年が経った理由もあり、式典は計画され今日に至る。

式典計画は半ば強制されている面もあるが、もの凄い盛況さだ。

『「今日という日に想いを馳せましょう。」』

だがその式典が行われているのには、もう一つの理由があった…。

―――某惑星 天の川銀河方面 艦隊旗艦エターナルストーム級
II型へシエラ―――

アンドロメダ銀河外縁部にある某惑星の軌道上には、数百隻以上のミドガルド艦が集結していた。

CAS066ミスキ級II型重巡洋艦やAC721級サナー級II型（ミサイル型含む）、クワオアー級改、ツンドラ級戦術II型にセレス級軽空母II型などの主力艦が、通常空間に続々と出現して来ている。

「第二十四機動艦隊が到着。第十五、第十六、第二十機動艦隊も同様に到着」

「アイリス將軍とガイエンブルク級移動要塞、ならびにガイエスブルク級機動要塞が間も無くワープアウト、第七艦隊もです」

「…そう」

長い黒髪が特徴的の女性司令官シエラ將軍は、副官と共にブリッジに上がり正面へと視線を見据えた次の瞬間、アイリス率いるミドガルド第七艦隊が、通常空間に出現した。

ミドガルドギルドの威信を示したガイエンブルク要塞のその周囲を護衛するかのようには、戦闘衛星シリーズの一部である3つのガイ

エスブルク要塞が展開。

ガイエンブルク要塞も戦闘衛星の部類に入るが、ガイエンブルク要塞と比較して、ガイエスブルク要塞は最小だ。

しかし、だ。それでも戦闘艦と比較すればガイエスブルク要塞は大き過ぎる。

通常の戦闘艦艇のみで構成された艦隊では、難しすぎるどころか対処など果たして出来ようか？

ブリッジからその姿を見るだけでも鳥肌が立ち冷汗が出るのは、決して気の所為ではない。

その反面もし自分がこれと戦う事になったらと思うと、背筋がゾツとするどころか、冷汗がダラダラに出てまわること間違いなし。

僚艦を潜り抜け、ガイエスブルク要塞を潜り抜け、砲火を躲し、戦闘機の軍集団を突破し、スターダスト計画の一部であるガイエンブルク要塞を撃破することが、果たして可能なのであろうか？

否、不可能である。

昔、WSO世界の「大戦」では出来たとしても今は違う。

再びミドガルドギルドは進化した。

昔のように、むざむざと破れるような事は絶対に無い。

その証拠に次々と主力艦がワイプアウトする中、巨大なワイプアウトが展開される。

スターダスト計画の一部にして、戦闘衛星シリーズの頂点に君臨するアタックムーン級戦闘衛星が姿を現した。

その数十秒もしない内に2つのガイエスブルク要塞に続く形で、エターナルストーム級Ⅱ型30隻が現宙域にワイプアウトする。

艦隊の集結を最後まで見届けるシエラには、確信があった。

ミドガルドギルドは必ず勝利する。

「㊦㊦が、本部から、出たら、直ぐに、ワイプ航法、移行して」

「はっ！」

集結し続けるミドガルド艦隊へとシエラはデフォルトである無表情の顔をそのままにしつつも、口元は半月を描くかのように弧に歪み、静かに見つめるのだった。

——イラム星 衛星軌道上 艦隊旗艦アタックムーン級へツ

ヴァイ~~~~

金髪の女性オリアナ將軍は、腕を組みながら静かに見守っていた。

「【総統】の演説の時間までは、残りどれくらいでしょうか？」

「30分を切りました、オリアナ將軍」

「そうですか…全艦に通達、ジャンプ隊形のまま待機してください」

「はっ！」

踵を返した士官を横目に、オリアナはブリッジから眼前に広がるミドガルド艦隊を見つめる。

エターナルストーム級Ⅱ型が密集し、その隙間を埋めるようにしてAC721スサナー級Ⅱ型（派生型含む）やアークワイテンス級クルーザー（旧名アークワイズ級フリゲート）、セレス級軽空母Ⅱ型が集まっている。

左右の真横をチラッと見れば、ガイエンブルク要塞が二つ並んでいる。

視界外にはオリアナが座乗するアタックムーン級の他に6つのガイエスブルク要塞が、護衛するように展開していた。

そして、オリアナが座乗するアタックムーン級の後方には、スタ

「ダスト計画の頂点に君臨する存在が睥睨と浮かんでいる。

まるで、WSO世界最強と名高いミドガルドギルドの軍が真に復活したような光景だ。

だが、まだ足りない。

追いつき、追い越さねばならない。

歩みを止めてはならない。進みに進み、進み続けらなければ。

すぐ先の戦いを見つめるオリアナの瞳は、鋭く睨みつけていた。

25分の時間が経った。時間が経つ中で現在も数人の士官が下士官達に指示を出しており、艦に異常が無いか、念入りにチェックをしていた。

「そろそろ【総統】の演説の時間が、ですね…」

オリアナはブリッジのモニターを見つめながら、軽く深呼吸をする。

【総統】である【彼女】の演説が終われば、直ちに戦場へワープしなければならない。

負けるつもりも死ぬつもりも毛頭ないのだがやはり緊張はする。思わず強張った表情をしてしまうのは仕方がなかった。

しばらくすると演説が始まったことが報告された。

「モニターに映します」

ブリッジのモニターに【総統】の姿が映し出された。

誰もが固唾を飲み、見守っていた。

演壇に立つ、【総統】。

高身長でスラリとしモデルのよう。長いエメラルドグリーンで、瞳はキリッとしたツリ目。一言で表すとエメラルドグリーン髪のクール系美女。

ギルド長の代理人にして七大ミッドガルドギルド統治者筆頭の第一席であった彼女であったが、ギルド長より【総統】という地位を与えられ就任した人物。

実質ギルド長に次ぐナンバー2である彼女、総統は上に立ち率いる者としての威厳が、確かにあった。

画面越しにも関わらず総統のその重圧に襲われたオリアナは、身震いしてしまう。

総統はまだ喋ろうともしない。

何故なら画面越しでもブリッジでも、未だに歓声が収まらないからだ。*主にプレイヤーが。

総統は片手を上げた途端、耳を覆いたくなる程の歓声が水を打ったかようにシーンと静まり返る。

皆一様に固唾を飲んで総統の次の一言を待っているようだった。

『私がW S O世界にて総統に就任し、長年に渡り舵取りする立場となった。総統職はミドガルドギルドを君臨するギルド長より一任され、ギルドを代理として運営する存在だ。――』

ついに演説が始まった。

落ち着いた声のトーンで総統は演説を続ける。

『――諸君、我ら（プレイヤー）が生まれ育ったリアル世界、地球は今まさに、ガトランティスによって滅亡の危機に晒されている』

『ガトランティスは白色彗星に擬態した木星規模の人工天体と共に、宇宙中を駆け抜けては星々を席卷し、他文明を押し根絶する。

…次なるその対象は、我らが故郷の地球』

まさに悲劇で、しかし真実であり現在進行系で【対象】に選ばれた地球は、ガトランティスによって滅亡の危機の中にあった。

『――地球は滅亡の渦の中へと飲み込まれ、消え去ってしまう。侵略者であるガトランティスは気にもしない。…まるで、いや、もはや荒らしだ！』

総統の演説は嘆きから怒りに変わった。

『何故に母なる地球がッ、荒らしであるガトランティスを前に屈辱の涙を流さなければならぬのか！ふざけるな！！』

身振り手振りを交えつつ、更には次第に熱を帯び、語気を強くする総統の演説。総統のこの姿は、感情的な一面を与え、聞く者の心を完璧に支配した。

そして、彼女は両腕を前に大きく広げ、宣言する。

『我々は大攻勢に転じる！ミドガルドギルドはガトランティスに対し、〔対荒らし殲滅プロトコル〕を発動することを、ここに宣言する！！』

その言葉と共に、歓喜の音が広がった。

総統とギルド長を称える声があちこちと発生し、熱気と大歓声が止まらない。

涙を流し、喜ぶ者もいれば、雄叫びをし、戦いを待ち望む者もいた。最もクローンはハッと我へと素早く帰り、己の職務に戻った。

遙か上空に位置するミドガルド軍にとって、総統のそれは出撃の合図だった。

「全艦ワイプ航法に移行を開始」

オリアナが座乗するアタックムーン級のブリッジでは、座標計算が行われ始めていた。

ガイエンブルク、ガイエスブルク要塞、主力艦なども同様だ。

遠く離れた外縁部の某惑星に駐留していたシエラ、アイリス率いる艦隊は、既に地球がある天の川銀河へと出撃していた。

「ドライブ正常に稼働中」

「30秒後に全艦ワープします」

下士官達の報告でブリッジはいっぱいだ。

準備は整った。

『空を見上げて欲しい！栄光あるミドガルドの大艦隊が、地球を滅亡せんとする荒らしガトランティスを駆逐する姿を！！』

「ワープ！」

軌道上の大艦隊は、防衛艦隊を除き、皆ワープしてゆく。

ミドガルドギルドの大艦隊は、地球を救う為に戦場へと旅立った。

〈? ? ? ? ? SIDE〉

「? ? ? ?」シナリオから逸脱しているが、問題はないだろう。
今のところイレギュラーは〇〇〇〇〇以外しか存在しない。…さて、
では我は「」

「」向かうとしよう、天の川銀河 太陽系へ。

第30話前半

「地球防衛軍 総司令部にて」

「おお……へやマトが、やってくれたか」

「へ滅びの方舟が崩壊してゆく姿を、連合軍将兵達は歓喜の声を挙げていた。」

「そんな最悪の時間が嘘のようだった。これで、地球のみならず、ガミラス人、ミドガルド人、全宇宙の生命が、脅威から解放された瞬間だった。」

「これで、我々も安心ですな」

「だがしかし、そんな空気を打ち壊すのが、平然と居る軍需産業のオブサーバー達。」

「だが、この戦争で失われた戦力の規模は、計り知れない」

「地球人オブサーバーが吐露する。」

「なに、我々には時間断層がある。人材に困ったらクローン兵の製造に着手すればよい。時間断層ある限り、戦力は直ぐに整う」

「ガミラス人オブサーバーが、命を軽んじた発言を口にするも、彼

自身は気にもしていなかった。

「そうですね。此方側の3年が、時間断層では30年の月日が経過しますし」

「そうだとも。我々の軍事力に適う勢力など、存在しなくなったも同然。我々の優位を覆すことは絶対がない」

「それもそうですね」

「「「ハハハっ！」」」

そんな会話を直ぐ傍でされる藤堂の表情には、露骨な嫌悪感が浮かんでいた。隣の席に座るペネット大統領も露骨な嫌悪感を浮かべているが、あの芹沢ですら嫌悪のそれを浮かべている。

機械の補充は良いが、人間はどうするのだ。

人間は自然に生み出され、人生を生きていくのだ。失われた人材は簡単に戻らない。

ミドガルドのクローン兵だって同じだ。簡単には戻らないし、何よりも彼女らも自分達となんら変わらない人間だ。

「（…所詮はビジネスによる金儲けしか頭がないオブザーバーめ）」

これはアレか、お説教を垂れても馬の耳に念仏というやつか。

ふと、藤堂は思う。

そういえば、ミドガルドオブザーバーである彼女は一言も地球・ガミラスオブザーバーに同調してはいなかった。

「（彼女は…ミドガルドは我が地球の復興支援を行っている。ガミラスも復興支援してくれているが、ミドガルドはそれ以上だ。ミドガルドの利益が黒字だろうが赤字だろうが、だ）」

藤堂は感謝の念を抱いた。

そして、である。

軍需産業オブザーバーの支援や協力を受けている野心溢れる芹沢は勘違いされやすい男だと藤堂は思う。

「（…本当に、勘違いされやすい男だな。『子供達の明日の為に！』、か。…いったいどこが野心溢れる男なのか）」

芹沢という男は、誰よりも地球を想い愛し、そして子供達を愛しているのだ。

彼らに同調するような姿勢や発言はあるにはあったが、内心では呑気な会話をするミドガルドを除くオブザーバーへ怒っていることは、藤堂は誰よりも知っている。

芹沢はスクリーンを睨み付けて、その目線を外そうとは決してしなかった。

「連合艦隊はどうしている？」藤堂が聞く。

「バレル大使、イザベラ大使の指示により、月軌道上にまで後退が完了し、現在は態勢を立て直している最中です」

「ふむ……」

〈滅びの方舟〉…。

このまま沈黙してくればよいのだが…。

変わらず崩壊が続く〈滅びの方舟〉であったが……異変が起きる。崩壊していくと誰しもが思っていたのだが、崩壊という言葉が不適切だと悟らざるを得なくなったのだ。

「…ん？、こ、これは?!」

「どうした？」

不意に声を上げるオペレーターに、芹沢が尋ねる。

「彗星都市中核から観測される、異常に上昇していたエネルギーが、一向に止む気配がありません！」

「!?!」

まさか、とスクリーンを見つめた誰もが絶句した。

彼らを見た。

〈滅びの方舟〉の形が変化するのを。

彼らは見た。

「へ滅びの方舟」が悪魔と呼称してもおかしくはない姿へと変貌し、悪魔となったのを。

「へ滅びの方舟」のコアは確かに破壊した筈だ、何故…。

誰もが見えない手で心臓を、鷲付かみにされるかのような心境だった。

「新たな報告です！」

「今度は何だ?!」

「そ、それが…へ滅びの方舟」後方に重力波を確認！」

「ガトランティスか!?!」

「違います!ガミラスでもありません!これは、このワイプアウト反応は…」

「…ミドガルドです！」

オペレーター「の報告の直後、…」彼ら「はやって来た。人々は知ることになる。…ミドガルドの本気を。」

「ワイプアウトします！」

その言葉と共に複数の青く輝くワイプゲートが展開され、通常空

間に姿を現した。

第二十四機動艦隊、第十五、第十六、第二十機動艦隊がワイプアウトした。

艦種はCASO66ミスキ級Ⅱ型重巡洋艦、AC721級スサナイ級Ⅱ型（ミサイル型含む）、ツンドラ級戦術Ⅱ型にセレス級軽空母Ⅱ型、そしてクワオアー級改。

どれもが大型だ。ミドガルドの駆逐艦でさえ、戦艦ないし弩級戦艦と地球側では識別されるだろう。

ワイプアウトした艦艇数は千隻で、バスターレーザー搭載型のクワオアー級改が大半であることを複数確認出来る。

「ワイプアウト更に続くっ！」

「巨大なワイプアウト反応です!？」

巨大なワイプアウト反応が確認された直後、青く輝く○字状のワイプゲートが少数展開され、ズズズっと出てくる。

そこから出てきたのは1つのガイエンブルク級戦闘要塞。

直径が準惑星ケレスと同じ900kmある球体状の人工天体であり、スターダスト計画の一部であるこれは宇宙に溶け込むような漆黒で、青く輝く線が至るところにあり、中心に“砲身”があるのが特徴だ。

護衛するように展開する3つのガイエンブルク級戦闘要塞が続く。直径が40kmある球体状の人工天体であり、スターダスト計画

の一部にして戦闘衛星シリーズの一角であるこれは宇宙に溶け込むような漆黒で、青く輝く線が至るところにあり、中心に"砲身"があるのが特徴だ。

だがまだだ、まだ終わらない。

巨大なワイプゲートが多数展開され、次々とズズズッと出てきた。

スターダスト計画の一部にして、戦闘衛星シリーズの頂点に君臨するアタックムーン級戦闘衛星が姿を現した。

直径が驚異の地球衛星の月と同じ大きさかつ月の形状をしており、宇宙に溶け込むような漆黒で、青く輝く線が至るところにあり、中心には巨大な砲身が確認出来る。

数十秒もしない内に2つのガイエスブルク要塞がワイプアウトし、ガイエスブルク要塞に続く形で全長2000m級のエターナルストーム級Ⅱ型30隻、エターナルストーム級Ⅱ型改14隻が現宇宙域にワイプアウトし、直後に漆黒塗装されたエターナルストーム級Ⅱ型改ヘシエラㄨがワイプアウトする。

赤髪の女性アイリス率いる第七艦隊、黒髪の女性シエラ率いるアイリス座乗アタックムーン級ヘアインスㄨ護衛艦隊の到着である。

「月軌道にもワイプアウト反応っ!?!」

だがまだだ、まだ終わらない。

ワイプゲートが多数展開され、ズズズッと一つのアタックムーン級ヘツヴァイ〜と2つのガイエンブルク要塞、6つのガイエスブルク要塞がワイプアウトする。

それに続く形で多数のバスターレーザー搭載型クワオアー級改にAC721スサナー級II型（派生型含む）、アークワイテンズ級クルーザー（旧名アークワイズ級フリゲート）、セレス級軽空母II型がワイプアウトした。

金髪の女性オリアナ率いる第3艦隊の到着である。

第3艦隊は月と地球の盾となる布陣を執る。

…そして、

「へ滅びの方舟〜後方、出現した艦隊中央に超巨大ワイプアウト反応っ!?!」

オペレーターからの悲鳴にも似た言葉の直後、アイリス率いる第七艦隊、シエラ率いるアイリス座乗アタックムーン級へアインス〜護衛艦隊の中央後方に超巨大ワイプゲートが展開され、ズズズッと出てくる。

そこから出現したのはスターダスト計画の頂点に君臨する存在だ。

…デカいなんて済まない。地球をゆうに超え、宇宙に溶け込む漆黒で青く輝く線が至るところにあり、中央には巨大な砲身が特徴である球体状の人工天体。

ミドガルドではこう呼称されている、…スターダスト級惑星破壊

兵器へスターダスト、と。

スターダスト級惑星破壊兵器へスターダストの周囲を、エターナルストーム級Ⅱ型とエターナルストームⅡ型改計300隻が護衛するようにワイプアウトする。

「彼女」と七大統治者によって率いられる艦隊の到着である。

以上が、ミドガルド軍戦力の内、実に9割以上を投入した「絶対破壊してやるぞ」の全力の艦隊運用である。

ワイプアウトと同時に、総司令部内に、そして戦場にいる全艦隊に音声通信が響き渡る。

『伝達！伝達！ミドガルド本部より緊急伝達！「荒らし殲滅プロトコル」発動！「荒らし殲滅プロトコル」が発動された！繰り返し！』

『「荒らし殲滅プロトコル」発動！「荒らし殲滅プロトコル」発動！目標、へ滅びの方舟！その一切を破壊せよ！！』

『七大統治者である私が命ずる。撃ち方用意！目標、へ滅びの方舟！』

時は来た。

惑星破壊兵器、アタックムーン級戦闘衛星、要塞、エターナルストーム級Ⅱ型、エターナルストーム級Ⅱ型改による砲撃とバスター

レーザー搭載型によるバスターレーザー砲撃が、今まさに始まろう
としていた。

第30話後半

「七大統治者である私が命ずる。撃ち方用意！目標、へ滅びの方舟！！」

不気味な仮面を顔に装着する七大統治者のその言葉と同時に惑星破壊兵器、アタックムーン級戦闘衛星、要塞、エターナルストーム級II型、エターナルストーム級II型改による砲撃とバスターレーザー搭載型によるバスターレーザー砲撃が、今まさに始まるうとしていた。

「滅ぶべし、へ滅びの方舟よ。：戦略級超兵器のカウントダウンを開始せよ」

「了解。惑星破壊兵器、アタックムーン級、要塞のカウントダウン開始」

惑星破壊兵器、アタックムーン級戦闘衛星、要塞の発射カウントダウンが始まり、巨大な砲身の砲口にエネルギーが凝縮され送り込まれいき、蓄積されていく。

「クワオアー級改、プロテクト級II型、バスターレーザー発射準備完了」

バスターレーザーを搭載しているクワオアー級改、プロテクト級II型の発射準備が整い、今か今かと凝縮し蓄積された球体状となっ

たエリスエネルギーを解き放とうとしている。

バスターレーザーは惑星ならば衛星を破壊する力を有しておらず、大陸を破壊出来るかどうかの力、それがバスターレーザーである。

とはいえ、それがプロトコル発動で投入されたクワオアー級改数百隻以上に加え、土星沖・火星沖・地球沖戦で参戦し、健在している同型のクワオアー級改そしてプロテクト級Ⅱ型合わせて約二千五百隻より繰り広げられれば、準惑星ケレスならびに衛星を破壊ないしは惑星を半壊出来る力となる。

「エターナルストーム級Ⅱ型、エターナルストーム級Ⅱ型改、主砲発射準備完了」

クワオアー級改と比べ、全長2000mもあるエターナルストーム級なら惑星なんて余裕だよ、となるだろうが違う。

実のところ、エターナルストーム級は惑星どころか、準惑星ケレス、そして大陸すら破壊など無理に等しく、そもそも超大型艦艇対処の為のエターナルストーム級である。

そんな艦艇を連れてきても意味あるのか、と疑問となるだろうが意味は確かにある。

まず投入されたエターナルストーム級は進化したⅡ型とⅡ型改。

Ⅱ型は大陸を余裕に破壊可能圏内となり、バスターレーザーを模倣した兵装エーテルレーザーを艦首にある主砲に採用しており、Ⅱ型改は数隻から10隻で準惑星ケレス半壊ないしは破壊可能圏内となる。

「全エターナルストーム級Ⅱ型と改、エーテルレーザー発射！」

そんなエターナルストーム級Ⅱ型とそのⅡ型改が三百隻以上はおり、円柱形の主砲をエメラルドグリーン色に煌めかせると、その一本の主砲から主砲のエーテルレーザーを瞬時に発射する。

光の矢となって、高速でへ滅びの方舟へと向かってゆく。

「バスターレーザー発射！」

ククワオアー級改、バスターレーザーがへ滅びの方舟へと放たれ、プロテクト級Ⅱ型は大口徑キャノン砲を斉射しつつ、バスターレーザーを発射した。

バスターレーザー非搭載型からも主砲が斉射されるが、木星規模のへ滅びの方舟へ相手では豆鉄砲もいいところ。

しかし、それでもバスターレーザー非搭載型から砲撃を続行し、更にはミサイルも投射される。

投射されたミサイルは、ただのミサイルではない。

投射されたのは、核融合ミサイル。

核融合ミサイルはプロテクト発動で投入されたミサイル艦隊と、土星沖・火星沖・地球決戦の一部の艦隊のみ装備されていた。

核融合ミサイルの成果はへ滅びの方舟へ相手では微々たるものであろうが、もし艦艇に命中すればオーバーキルといっても過言ではない代物だ。

「バスターレーザー、敵目標に全て命中を確認」

「エーテルレーザー、敵目標に全て命中」

「バスターレーザー非搭載艦、敵目標に全弾命中を確認」 「核融合ミサイル、全弾命中」

「敵目標にダメージは…小」

そんな攻撃をもってしてもへ滅びの方舟へは健在であり、もろに受けたのにも関わらず、ダメージは小さい。

ヘスターダストへの艦橋で指揮する七大統治者は舌をまきつつも、指令を出していく。

「ガイエンブルク、ガイエスブルク要塞、発射準備全て整いました」

「全要塞、照準修正、誤差+2度」

「重力収束バレル、形成完了。重力バレル強度の強化よし」

「全要塞、発射準備完了」

「了解、護衛艦隊は射線上から一時退避せよ」

「護衛艦隊、側面へと退避完了」

へ滅びの方舟へ後方で発射態勢であるガイエンブルク、ガイエスブルク要塞の射線上から急ぎ護衛艦隊は退避する。

それは、月軌道にいる要塞も同様に発射態勢を執っており、艦隊は要塞の射線上から急ぎ退避する。

「要塞砲、発射せよ！」

七大統治者は要塞砲発射を指令した。

護衛艦隊の退避が完了した直後、ガイエンブルクならびにガイエスブルクから要塞砲が放たれる。

「アタックムーン級戦闘衛星、発射準備完了」

「撃て」

「はっ、…月面弩級砲、発射！」

全アタックムーン級より放たれた3つの光芒は、亜光速のスピードを維持し向かっていく。

月面弩級砲の膨大な黄色の粒子ビームは光の柱にも等しく、へ滅びの方舟へに「吸収」されていない残骸となって漂うカラクルム級を蒸発させながら、へ滅びの方舟への方舟まで向かっていく中、計算されていたかのように要塞から発射されているエメラルドグリーン的光芒は、黄色的光芒と共にへ滅びの方舟へと到達し、轟音と共に周辺にエメラルドグリーン色の粒子と黄色の粒子を舞い散らせる。

「エターナルストーム級Ⅱ型、エターナルストーム級Ⅱ型改、エーテルレーザーを発射」

「クワオアー級改、プロテクト級Ⅱ型、バスターレーザーを発射」

「月面弩級砲、撃て！」

エーテルレーザーとバスターレーザーの2発めが発射され、二千をゆうに超えるエメラルドグリーン色の光の矢が、へ滅びの方舟へと直撃する中、後から続く形で2発めの月面弩級砲が発射され、その光芒は真っ直ぐと進んでいき、命中していく。

「エネルギー充填中のヘスターダスト」を除き、全艦隊は攻撃を中止せよ」

「了解。全艦隊、攻撃中止！」

七大統治者の声と同時に、誰もがその変わり果てたへ滅びの方舟へに見入る。

「へ滅びの方舟へ、損傷あり！損傷ダメージは——」

幾度となく重力シールドで波動砲やバスターレーザーから防御し無敵を誇っていたへ滅びの方舟へに、目で分かる程の損傷があった。

七大統治者は仮面越しで笑みを零さずにはいられなかった。

とはいえ、だ。流石に攻撃してこないのはおかしい。
異常な程に上昇していたエネルギーが未だ健在だ。きっと何かあるに決まっている。

仮面を装着する七大統治者は現在も兵器充填中であるヘスターダスト∨の盾となるよう、アタックムーン級、ガイエンブルク要塞に指令し、月軌道のアタックムーン級、要塞は引き続き月と地球の盾となる布陣を継続するよう指令する。

きっと何かあるに決まっている、はないほうが嬉しい、仮面を装着する七大統治者は思うのだが何故だか振り払うことが出来なかった。…だが、七大統治者のその考えは的を当てていた。

「統治者、敵方舟のコアに変化あり。エネルギー収束率を観測！」

「異常な数値です、波動砲をも上回っています計測不能！！」

突如として、コアが紫色を伴ったと思えば不気味な輝きを強めたのだ。

「へ滅びの方舟∨、我がヘスターダスト∨に切っ先を向けています。おそらくはそれが…」

統治者は副官の言わんとしていることを察した。

あれは、へ滅びの方舟∨は攻撃態勢に移行したことを、統治者は嫌でも理解した。

艦尾側？の形状とその切っ先がこちらにあることを確認した統治

者は、艦隊を後方に下げるよう指令する。

アタックムービー級、全要塞は盾となる布陣を継続。

1分が経過した時、「それ」がへ滅びの方舟へからやって来た。

「へ滅びの方舟へ、巨大エネルギーを放出！」

へ滅びの方舟への艦尾側？から、波動砲をも上回る強大なエネルギーが開放され、開放されたエネルギーは宇宙空間を席卷した。

薄紫色、あるいはピンク色にも近い輝きは巨大なエネルギー流となって、へスターダストへの盾となっていたアタックムービー級、ガイエンブルク要塞、ガイエスブルク要塞へと襲い掛かった。

直径が40kmあるガイエスブルク要塞はエリスフィールドを展開していたのにも関わらず、その防御を嘲笑うかのようにガイエスブルク要塞を2つ飲み込み、直径が準惑星ケレスと同等の900kmあるガイエンブルク要塞は耐えたかと思えば、貫通し巨大な穴を形成してしまい、その直線上にいた同型のガイエンブルク要塞もを同様に貫通そして巨大な穴が形成し、少しして爆散した。

爆炎の塊と爆散の余波に巻き込まれた3つのガイエスブルク要塞が爆散したガイエンブルク要塞の近くにおり、エリスフィールドを展開しつつ回避行動の最中で飲み込まれ爆沈してしまい、その周囲に展開していた30隻のエターナルストーム級Ⅱ型と数十隻のバスターレーザー搭載艦が巻き込まれてしまった。

へ滅びの方舟へから放たれたピンク色のエネルギーの速度は落ち

てはいるものの、止まることなくヘスターダスト∨の正面で防御の構えを執るアタックムーン級へアインス∨にピンク色のエネルギーが衝突する。

ピンク色の粒子を舞い散らせる。

アタックムーン級は標準装備されているエリスフィールドに加え、多数の偏向シールド、そして重力シールドを装備している。

これらの防御兵装は、惑星破壊兵器の攻撃を防御することが可能であり、難なく受け止めることが出来る：筈だった。

ピンク色のエネルギーがアタックムーン級へアインス∨の中央へと到達し衝突。

やがてそのピンク色のエネルギーは花を咲かせるように拡散し、ヘスターダスト∨に直撃することは無かったが、後方で待機していた艦隊に拡散されたエネルギーが当たってしまい、エターナルストーム級Ⅱ型とⅡ型改を除き、数百隻以上が大破ないしは撃沈されてしまう。

「アタックムーン級へアインス∨、中破」

だがそんな惑星破壊兵器を防ぐ筈のアタックムーン級へアインス∨は中破状態となってしまい、統治者は驚天動地の動揺を感じた。

この攻撃により、全てのガイエスブルク要塞（月軌道に展開しているのは除く）と2つのガイエンブルク要塞が撃破され、アタックムーン級は中破状態となった。

「アタックムーン級へアインス、後退せよ」

アタックムーン級へアインスは月面弩級砲をへ滅びの方舟へ睨んだまま、後退していく。

そして、遂に…、

「へスターダスト、前へ」

惑星破壊兵器へスターダストが動き出だした。

アタックムーン級と入れ替わったへスターダストはいつでも発射出来る状態である為、後は統治者より指示が下されるだけだった。

「オメガ・アナイアレイション・ランス、発射せよ」統治者より発射指令が下される。

オメガ・アナイアレイション・ランス。

惑星破壊兵器のコア内に設置された巨大な反応炉によって駆動され、地殻の下に存在する多数のシステムによって制御されている強力なエネルギー兵器

巨大な反応炉からこの超兵器オメガ・アナイアレイション・ランスに供給され、使用されれば目標は跡形もなく破壊される。

「発射！」

それが今、発射された。

紅の光芒が、へ滅びの方舟を襲い、閃光が宙域を覆った。

ズオーダーは、自分の身を置く方舟の中枢にて、ミドガルドのへスターダストからの攻撃を、忌々し気に注視していた。

「テレサめ……」

何故、あのような存在がいるのか？

何故、あのような存在を気づくことが私は出来なかったのだ？

次々と疑問が湧き、ズオーダーはより「彼女」を憎む。

相手は…テレサだ。

高次元世界にいただけで、何も出来よう筈も無かったテレサは、よもや地球のへヤマトと同じくミドガルドがへ滅びの方舟を阻止することを見通していたというのか？

ふざけるな！千年の絶望、慚愧は全て無駄だというのか？

それに加え、だ。

へ滅びの方舟は、ミドガルドの攻撃に対し防衛策を実行しない。攻撃は一回は可能であったのにそれ以降は何故出来ない？

何故だ、何故、己と一体化した筈のへ滅びの方舟は、指示を受けつけない？

何故、何故、何故、何故！

「テレサめ…ッ！！」

憎しみを含めた言葉を放った直後、「彼女」の声が聞こえた。

「ごめんなさい」

「ッ——！？」

ギョツとして振り返るズオーダー。

そこには、方舟に身を捧げる際に共に生贄となったサーベラーが、何故か黒髪の姿で立っていた。それは、桂木透子として潜り込んでいたサーベラーの純粹体のコピーであった。

「サーベラー……お前が……？」

制御機能は掌握していた筈なのに、まさか、奪取したとでもいうのか？

ズオーダーは驚きを隠せずにいる。

「私が、へ滅びの方舟を蘇らせてしまったばかりに……愛しい貴方に千年もの憎しみを抱え続けさせてしまった」

「……違う」

ポツリと、ズオーダーは否定する。それでも、サーベラーの口は

止まらない。

次第に、耐え兼ねたのか、涙がポロポロと溢れ始める。これまで、ズォーダーが幾度となくサーベラーの命を奪った際に見てきた涙であった。

それを見たズォーダーは、己の内にある憎しみと絶望に対する感情が揺らいでいく。

愛を育んだ女性を奪われた事に対する、激しい憎悪で動き続けて来たズォーダーであったが、それは同時に、サーベラーに対しても相応の時間と記憶を重ねさせてきた証しであり、…彼女を己の手で殺した記憶も重ねている。

サーベラーも、記憶が戻るたびにズォーダーを静止し、彼に殺される記憶があり、重ねていった。

既にへ滅びの方舟への崩壊が始まっている。

「私が止めるべきだったのです。あの時、最初にへ滅びの方舟へを見つけた時に。貴方には、そのような感情を持って生きて欲しくなかった。……なのに、私は…貴方を止めることが出来なかった」

そう語る彼女の姿が、やがてあの生きていた頃の、オリジナルのサーベラーの姿に代わっていた。

自分が押し付けたに等しい行為を、サーベラーは自分の責任だと涙を流す姿に、ズォーダーも耐え兼ねた。

「違う！」

今度は、ハッキリとした口調で、サーベラーの謝罪を遮る。

気づけばズオーダー自身の頬にも、流す事など絶対に無かった筈の涙を、彼はサーベラーと共に流していた。

「お前は、この私の願いにただ従っただけなのだ」

「しかし——！？」

ふと、サーベラーの身体を抱き寄せるズオーダー。それに驚くサーベラー。

この千年もの間、決して行わなかった抱擁だった。

ズオーダーは、逞しい腕と胸板に、サーベラーを出来る限り優しく、だが思いを強く乗せて包み込んだ。

「もういい」

驚き、ズオーダーを見上げるサーベラーであったが、ふっと笑みを零して、両手で彼の頬を優しく添える。

戦う事しかなかったズオーダーが、より人間らしく、愛する事を覚えた、素晴らしいあの時代へ生きた彼が戻ってきた瞬間だった。

「もう、いいんだ……」

崩壊を告げる音が聞こえる中、少しして二人を包み込む強烈な光が漏れ始める。

しばらくすると、光のせいでお互いの姿は見えなくなってしまいが、二人にとっては些末な事。

それでもお互いが、そこにいるという暖かな感覚だけは伝わり続けている。それで充分なのだ。

命の灯が尽きるその瞬間まで、抱きしめるズオーダーとサーベラ
ー。

「私は、お前をずっと、愛しているぞ、サーベラー」

「ふふっ、その言葉、そっくりお返しします、あなた」

そして二人の男女は、肉体が消滅する最後の最後まで穏やかな気持ちのまま――生涯を終えた。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~30013

同志諸君に告げる。これが理不尽だ！
2024年10月01日 17時48分発行